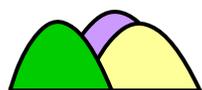
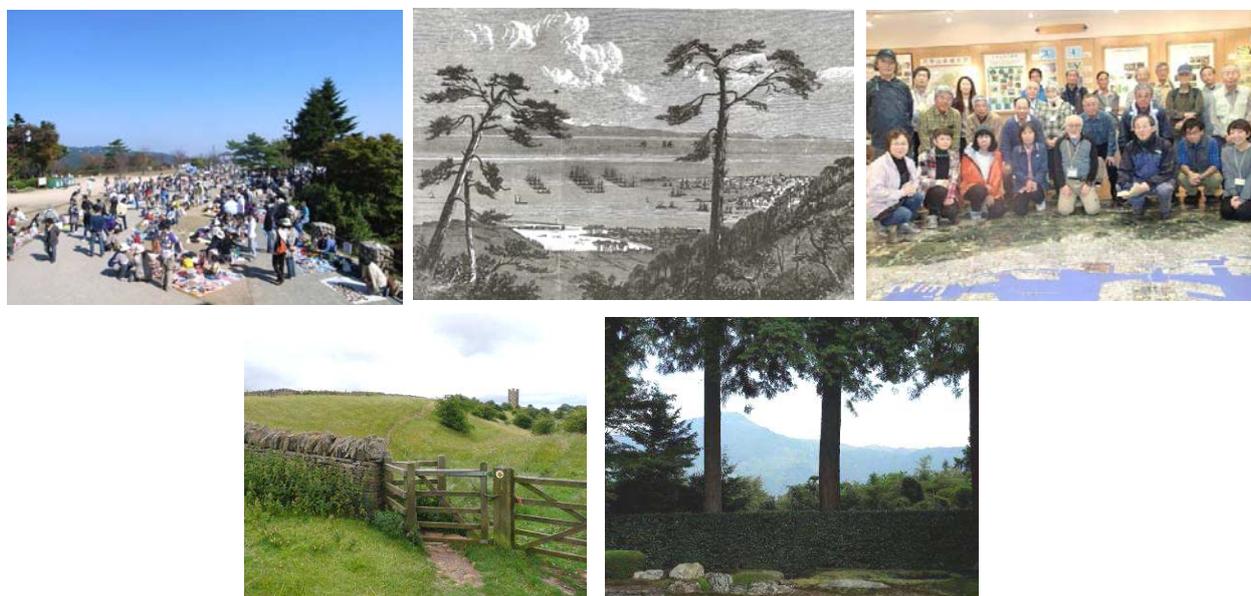
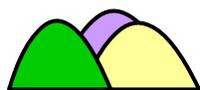


六甲山物語5

六甲山をさらに知る 続12話



2018年発行
六甲山を活用する会



「六甲山物語5」発行に寄せて

六甲山の魅力や楽しみがいっぱいだった「六甲山物語」の第5弾が発行されます。心からお喜びします。

港と並ぶ神戸のシンボル六甲山。春には眩しいほどの新緑が萌え、秋には木々が鮮やかに色づくなど、四季折々の異なった表情で私たちの目を楽しませてくれます。南北を海と山に囲まれた神戸は、人口150万人の大都市でありながら、自然が織りなす美しさを日々享受してきたといえましょう。



兵庫県知事

井ノ敏三

その六甲山の自然環境を守りながら、さらなる魅力アップを図ろうと、新たな取り組みが始まっています。現在、環境省、兵庫県、神戸市、民間事業者、地域住民が連携を図りながら、魅力ある眺望スポットやハイキングコースの選定、山上の遊休施設の再生など、六甲山全体の活性化に向けた検討を進めているところです。

先人たちの懸命の努力によって育まれてきた豊かな環境を、しっかりと守り、磨き、次代へと引き継いでいかなければなりません。

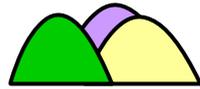
皆さんの「六甲山魅力再発見市民セミナー」も、六甲の魅力を多くの人々に伝える素晴らしい活動です。平成15年のスタート以来、自然環境はもとより、歴史、文化、産業、レジャーなど多彩なテーマを取り上げ、去る10月の第132回をもって最終回を迎えました。皆さんのこれまでのご尽力に改めて敬意を表します。

この「六甲山物語5」も、シリーズ最終巻として15年間のセミナーを締めくくる集大成。既刊の4巻と併せ、あらゆる魅力を凝縮した、まさに「六甲山百科」の完成です。

会ではさらに、セミナーの開催により蓄積した情報を「六甲山郷土誌」として再編纂し、今後ホームページで発信されると伺っています。

こうした活動を通して、より多くの人々に六甲山の魅力を知っていただき、自然に親しみ、いきいきと交流する人々の輪が、この六甲を舞台に大きく広がっていくことを願っています。

最後になりましたが、六甲山を活用する会の今後ますますのご発展と会員の皆様のご健勝でのご活躍を心からお祈りします。



ご挨拶

このたび、『六甲山物語5～六甲山をさらに知る 続12話』を発刊することになりました。既刊の『六甲山物語1』／平成19年、『六甲山物語2』／平成21年、『六甲山物語3』／平成24年、『六甲山物語4』／平成25年に続く、シリーズ最終編の第5号になります。これら5冊で、六甲山を多様な視点から理解できる132の話題を提供します。六甲山について幅広い知識や情報を得る案内書として、多くの皆様にご活用いただけるものです。

この『六甲山物語5』は、平成27年度の第121回から平成29年度の第132回まで3年間12回にわたる、市民セミナー報告書を再編集したものです。『六甲山物語1～4』で基本にした6つのジャンルを踏まえて、「六甲山を見渡す」、「六甲山を辿る」、「六甲山に親しむ」という3つのジャンルに編成しました。巻末には300項目以上の用語索引も掲載しました。

私ども「六甲山を活用する会」は、「六甲山魅力再発見市民セミナー」を平成15年から9年間は毎月第3土曜日に108回開催しました。平成24年度から4月・6月・8月・10月の年4回、第3土曜日に自然体験会と組み合わせて6年間24回開催しました。平成15年から15年間で132回、延べ参加者は3,525名(1回平均26,7名)になります。六甲山上で地域を研究し交流する生活文化を定着し、多岐にわたる知見や情報を集積できました。六甲山を知るための情報を集めるという初期の目的はほぼ達成できましたので、現行の「市民セミナー」はいったん終了することにしました。そして、『六甲山物語』をはじめ蓄積した情報を多くの市民に活用してもらうことに注力していきます。

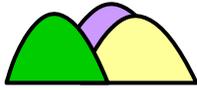
「六甲山魅力再発見市民セミナー」をきっかけにして、六甲山記念碑台周辺での環境保全整備活動やアセビ伐採による森の再生調査に取り組み、「まちっ子の森」や「六甲山頂・森と歴史の散歩道」を保全整備しています。これらの地域の魅力を生かして環境学習や自然体験の催しも運営しています。まさに、魅力再発見から魅力創造に進展しました。

大都市の市民が手探りで「地域研究」を続けて、六甲山の「郷土誌」と呼べるものを蓄積しました。この成果物や運営のノウハウは山麓の市民の人たちはもとより、全国で「地域」に関心を注ぐ人たちにも提供できるものだと考えています。これを「六甲山発郷土誌づくり」として活用しやすいものに編集し、広報し普及することを目指します。

さらなるご支援をお願いいたします。

2018年1月

六甲山を活用する会
代表幹事 堂馬 英二

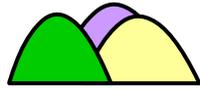


六甲山物語5 目次

「六甲山物語5」発行に寄せて:兵庫県知事 井戸 敏三 いど としぞう	P 1
ご挨拶:六甲山を活用する会 代表幹事 堂馬 英二 どうま えいじ	P 2
目次	P 3
1. 六甲山を見渡す～地域の特徴と都市環境～	P 4
①六甲山の利活用を考える ～環境資源管理の議論から～	第124回 三俣 学 みつまた がく P 5～7
②摩耶山再生の会の活動	第127回 慈 憲一 うつみ けんいち P 8～10
③再び、六甲山の景観計画を考える	第129回 中瀬 勲 なかせ いさお P 11～13
④六甲山を市民のものに	第130回 新野幸次郎 にいのこうじろう P 14～16
⑤六甲山発郷土誌づくりの歩み	第132回 堂馬 英二 どうま えいじ P 17～19
2. 六甲山を辿る～六甲山の歴史と文化～	P 20
①六甲山の茶屋群をみんなの文化財に	第121回 小代 薫 こしろ かおる P 21～23
②文化遺産としての六甲山ホテル旧館	第126回 笠原 一人 かさはら かずと P 24～26
③海文堂、震災、そして陳舜臣さん +野坂昭如さん	第128回 平野 義昌 ひらの よしまさ P 27～29
④六甲山開発史 バージョン2	第131回 森地 一夫 もりち かずお P 30～32
3. 六甲山に親しむ～生活文化と環境学習～	P 33
①シム記念摩耶登山マラソンの歩み	第122回 前田 康男 まえだ やすお P 34～36
②六甲山で森林療法	第123回 西村 典芳 にしむら のりよし P 37～39
③六甲山系のチョウ	第125回 谷本 祥二 たにもと しょうじ P 40～42
索引	P 43～45
H27～29 市民セミナー・プログラム	P 46
編集後記:『六甲山物語5』編集委員会	P 47



2016年2月21日の朝日新聞に閉鎖された「六甲山ホテル旧館」の保存を要望する記事(左)が掲載されました。1世紀近い六甲山開発史が転換しそうな予感がします。
2016年6月18日開催の第126回市民セミナーの参加者が旧館前で記念写真を撮りました。



1. 六甲山を見渡す

～地域の特性と都市環境～

①六甲山の利活用を考える ～環境資源管理の議論から～ P 5～7



三俣 学 みつまた がく
兵庫県立大学 経済学部
教授
第124回市民セミナー講演
2015年10月17日

④六甲山を市民のものに P 14～16



新野 幸次郎 にいのこうじろう
神戸都市問題研究所
理事長
第130回市民セミナー講演
2017年6月24日

②摩耶山再生の会の活動 P 8～10



慈 憲一 うつみ けんいち
摩耶山再生の会
事務局長
第127回市民セミナー講演
2016年8月12日

⑤六甲山発郷土誌づくり の歩み P 17～19



堂馬 英二 どうま えいじ
六甲山を活用する会
代表幹事
第132回市民セミナー講演
2017年10月21日

③再び、六甲山の景観計画を考える P 11～13



中瀬 勲 なかせ いさお
兵庫県立人と自然の博物館
館長
第130回市民セミナー講演
2017年4月15日

『六甲山物語5』の第1段は「1. 六甲山を見渡す」です。ここには、六甲山の地域特性を踏まえて、この都市環境にどんな関わりを考えるかという話題を集めています。

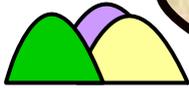
兵庫県立大学の三俣 学さんは経済学者で、北欧の自然の共用制や入会林野を研究されています。市民の自然資産である六甲山とどのように関わっていくかという視点から示唆を与えていただきます。

摩耶山再生の会の慈 憲一さんは地域活動家としてご活躍です。平成22年の摩耶山のケーブル・ロープウエー廃止の動きに対して、神戸市に存続を提案し摩耶山再生の会を結成して、地域を生かす様々な実践を続けておられます。

人と自然の博物館の中瀬 勲さんは景観園芸のオーソリティです。最終年度の記念として景観計画の現況や課題について大所高所からのお話をお願いしました。12年前の第26回以来2度目のご登場です。

神戸都市問題研究所の新野 幸次郎さんは神戸を代表するシンクタンクの重鎮で、行政の重要施策の審議などでご活躍です。最終年度を記念して六甲山と市民の関わりについて示唆を与えていただきました。

最終回は六甲山を活用する会の堂馬 英二が、「市民セミナー」の背景や運営を説明して締めくくりました。15年で132話という貴重な成果を、改めて「六甲山発郷土誌」として広く普及することを今後の課題として述べました。



第124回テーマ 六甲山の利活用を考える ～環境資源管理の議論から～

- G. ハーティンの論文から始まった資源管理の議論
- グローバル時代の資源・環境問題と「協治」という考え方
- 英国と北欧の自然アクセス制度

実施日：平成27年10月17日（土）
午前10時～15時45分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：三俣 学さんプロフィール
1971年（昭46）生まれ 年齢
43歳 ご出身地：愛知県
現在、兵庫県立大学経済学部教授。
その間、リヴァプール大学マクス
研究所客員研究員（英国）、エヴァー
グリーン大学交換教員派遣（米国）
を歴任。



イギリスのフットパス

秋晴れの自然歩道で22名がササ刈り

朝の記念碑台は快晴、自然体験会に22名が参加し、「散歩道」のササ刈りをしました。三俣先生とゼミ生3名も参加し、六甲山ホテル東までの約500mで三々五々に分かれて作業しました。

午後の講演に27名が参加しました。森づくりや山道整備の体験をテーマに結びつけて考えました。



ササ刈りに出発

三俣ゼミは下唐櫃村で林業も研究

三俣先生は県立大学に赴任して12年間ずっと、「卒業記念ウォーク」を続けておられます。森林植物園で禿げ山の展示コーナーを見て、森林が人間社会にとっていかに重要かを学ぶのです。北六甲の下唐櫃村でも桧林の間伐を体験し研究されています。本格的にフィールドワークを実践する経済学を養成されていることに感心します。今回は、「環境資源としての六甲山」というテーマで、「六甲山は誰のもの？」と投げかけて案内をしました。当日は、さらに焦点を絞って「六甲山の利活用を考える～環境資源管理の議論から～」の資料をご用意いただき、テーマと講演内容も修正しました。

資源管理の議論から、六甲山の利活用を考えたい

資源管理の議論の源流として、G. ハーティンの論文「コモンズ（共同地）の悲劇」を紹介されました。続いて、エリノア・オストロムがノーベル経済学賞を受賞した学説を上げて、「コモンズは悲劇に陥らない」と、「ローカルルール」の形成を説明されました。2つの理論を、甲賀の入会林野で実証研究され、「ローカルルール」の形成を確認されています。これら学術研究を背景に、「協治」の事例研究を進められ、イギリスと北欧の自然アクセス制度の調査をされています。

続いて、現地では撮影された写真を使って、興味深いエピソードを感動込めて話されました。イギリスの「歩く権利法」、フットパスの特徴を説明され、次は、スウェーデンの「万人

権（ばんにんけん）です。「私有地公用地を自由にアクセスする権利」が国の柱に据えられていること、「野外活動は自然における経験の活動を通じて、自然と魂がバランスを保つ生活様式だ」という哲学が根づいているとのこと。 「歩く権利法」や「万人権」は歴史の経験から紡ぎ出されています。日本の土地所有は「絶対排他的権利」で、アクセス権を広めるのが難しいという現実も知りました。



ブルーベリーを摘む女子大学生



ブルーベリー集めを商売にする

改めて「六甲山を使わなくちゃ、もったいない」

当会は当事者でない外縁の市民として、六甲山の新たな「便益」を探っていると理解できました。これまでの六甲山の「便益」が推移し変化するだろうと予見しました

※詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 柳川さん

今回のセミナーは、六甲山の活用という課題に対して、どう活用するのかという視点ではなく、活用していくためにはどのような課題があり、何が重要かという視点に立つものだと感じた。活用のためにはアクセスをしやすくすることは重要である。

しかし、その場合、欧州や英国のアクセス権の話にあったように問題が生じてくる。そのため、所有・利用・管理の在り方を改めて考えていくべきだと感じた。

また、当日の朝に行った笹刈り活動を通し、管理の大変さを身に染みて感じる事ができた。



【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、
コープこうべ環境基金、自然保護ボランティアファンド、
セブン-イレブン記念財団

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会



第124回テーマ：六甲山の利活用を考える

～環境資源管理の議論から～



第124回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験 : 10:10~12:00
2. 講演 : 13:00~14:50
3. 意見交換 : 15:10~15:45

- G. ハーティンの論文から始まった資源管理の議論
- グローバル時代の資源・環境問題と「協治」という考え方
- 英国と北欧の自然アクセス制度



三俣ゼミの3人

講演の経緯（三俣 学さん）

■環境資源管理から六甲山の利活用を考える

写真が30枚か40枚あり、退屈にならないようわかりやすくお話しします。皆さんと共有したいのは、六甲山など山や海や川など、本来どう管理すればいいのか、その前提としてどうとらえていけばいいのか、ということです。



講演する三俣さん

講演内容

1. G. ハーティンの論文から始まった資源管理の議論

■ギャレット・ハーディングの論文

1968年にサイエンスに「The Tragedy of the Commons」（共同地の悲劇）を書いた。資源管理論や環境論など、研究者の中で最も引用の多い論文で、「所有権がはっきりしない、利用管理が決まっていなると、悲劇の結果になる」という。



●**コモンズの悲劇**: 不特定多数の人が自分のやり方で管理すると、自分の羊や牛を好き放題に入れ、牛が増えすぎて、牧草地の草は根こそぎ枯れてしまう。共同放牧地は、皆がそこを好き勝手に使えるから悲劇が起こる。だから公の持つ権力によるか、市場的な私的管理にすれば、そのような悲劇はおこらないという。

■ローカルルールの形成

2009年に女性で初めてノーベル経済学賞を受賞したエリノア・オストロムが、共用とか、共有の新しい意味を学問上で打ち立てた。「ある条件下では、利用者集団が長期にわたって、地域の資源を持続的に管理してきた」「コモンズは悲劇に陥りませんよ」と、ハーディングの理論に異を唱えた。

●**ローカルルール**: 「環境資源が便益（利益）を及ぼす限りにおいて、利用者は環境資源を守る義務を果たす」。なぜ上手くいくかということ、ハーディングが見落としていた、「ローカルルール」が形成されるからだ。

■入会林野の研究

滋賀県・三重県の県境の甲賀に大きな共有林、入会林野がある。ここで、ハーディングが正しいのか、オストロムが正しいのか。ちゃんとローカルルールが出来ていく

のか、私は考えた。

●**禿げ山の問題**: 明治時代、「この山はみんなの山だ。燃料が必要だ」と取り放題取ったので大原共有林野は禿げ山になった。水害・災害が多発し、集落の人たちは自分の問題、禿げ山の問題を考え出して、すぐに規約を作った。これがローカルルールだ。

●**規約と罰則**: ルールができてモニターする。そして罰則も決め、状況に応じて罰則する。こういう風なローカルルールを作って、ここの禿げ山から脱した。

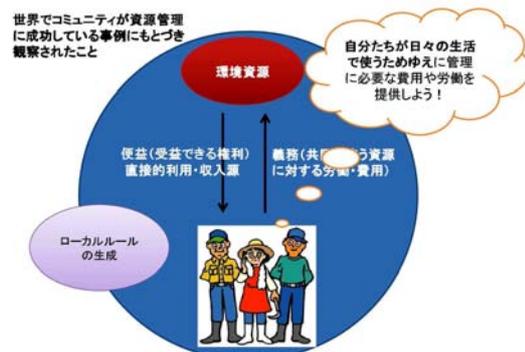
2. グローバル時代の資源・環境問題と「協治」という考え方

■グローバル時代の資源管理

昭和39年から木材利用の関税がほとんどゼロで、人工林を2世代3世代かけて伐っても割りに合わない。外材が日本の人工林と取って代わり、市場を占有した。

●**山林の放置**: 雑木林が手つかずに、そして竹林が放置され、活用が低減されていく。管理義務だけが大きくなって、そこからもたらされる便益が少なくなってきている。元から使っていたメンバーが放置しはじめて、元々の山が公益的機能を発揮しなくなってくる。

●**外縁者の便益**: 便益が直接、所有者ではなく、むしろ、外縁の流域住民とか、都市市民、漁師に波及ようになった。「当事者ではないけれど、これを管理する」という図式になっている。



■協治の研究

グローバル時代には資源の持っている意味合いが少しずつ変わった。所有とか利用とかの関係を新たに組み直していく必要がある。

●**「協治」の考え方**: 東京大学の井上真（いのうえ まこと）が、「協治」を「中央政府、地方自治体、住民、企業、NGO、地球市民など様々な主体（利害関係者）が、協働（コラボレーション）して資源管理を行う仕組み」と定義している。井上の議論では「開かれた地元主義」が示され、閉鎖性の強い地元主義ではなく、ある程度自分たちと周りの人たちとの関係を上手く構築しながら、資源管理を行う重要性が指摘されている。

●**「協治」の事例研究**: 様々な所有者も利用者も、みんなが理想的にひとつの目標を達成するために、行動できるかということを考えている。他にそういった「協治」にあたるような枠組みを持って「協治」している事例は

ないのか研究して、10年くらいになる。

3. 英国と北欧の自然アクセス制度

■イギリスの歩く権利

自然を愛でるために、「歩く権利が設定されている場所」を歩くことができる。元々は領主が囲い込んで、私的所有・所有概念がはっきりしている。

●**キンダースカウト事件**: 1932年にピークディストリクトという美しい丘に日常的に上っていた労働者達を、領主が閉め出した。それは許せないと数百人が集まって行動を起こし、逮捕者が3名出た。マスコミが報道したら、「長らくそういう自然にずっと飢えてきたわけで、歩くことぐらい構わないじゃないか」と議論を喚起し、「歩く権利法」の制定につながった。

●**フットパス**: 英国の共同地は全部「歩く権利」がかかっている。2000年法によって全面的にアクセスできる。歩く権利の道は18万キロ~19万キロに達する。私的所有者はそのアクセスを拒んではいけない。

●**マップ化**: 多大な費用をかけて、行政の責任でマップ化している。GISといって、ハイテク機能、衛星写真を用いて、どこが「歩く権利」がかかっているか、ボタンを押すと見える。



フットパスの杭

■スウェーデンの万人権

「全ての人がある制約下において、私有地・公有地を自由にアクセスする権利がある」と、国のひとつの柱として据えられている。ある制約というのは、「プライバシーを侵害しない」「自然を破壊しない」の2つだ。

●**野外活動の哲学**: 「野外活動は自然における経験の活動を通じて、肉体と魂がバランスを保つ生活様式だ」という哲学があり、自然にアクセスする権利が慣習として残され、ゲルマン民族の根元的な部分を成すとされる。

●**万人権に関わる問題**: スウェーデン人に雇われて、多くのタイ人が、1日かかって手で摘んだブルーベリーを買い上げる。商業的に使う人が出てくると、ふつうにおしゃべりして日常的に採って食べる人たちとの間に、少しずつ温度差が出てくる。多様な利用者がいる。

●**万人に開いたアクセス制度の評価**: 1番目は人々の自然への関心を喚起できる。2つ目は、環境保全政策への国民の理解。3番目は、より多くの人たちがアクセスすれば、その人たちも、意志決定に加わる可能性が出てくる。乱開発、放置の抑制機能。開発の抑制をするような機能がある。4番目がそういったアクセスを通じている

んな形で生態系のサービスが供給される。

●**懸念される点**: たくさん係争が発生する。私的な権利と公的な権利のせめぎ合いになり、その棲み分けを上手くするため、行政の費用負担も大きくなる。仮に機械を使った採取がなされれば問題は深刻化するだろう。それが頻発すれば、野外活動の縮小に進んでいく。

●**行動規範の共有**: アクセスすることがどこまで許されて、許されないのか、共有化されることが必要だ。親から、自分が子どもの頃に連れて行ってくれた時に散々教えられている、というのが行動規範としてある。



アンケートの回答を待つ子ども

質疑応答

◆**奥田**: 「健康で文化的な生活」が憲法25条で保障されている。六甲山を健康のための施設として使いたい。

●**三俣**: 深い問題提起だ。今の日本は経済市場主義で思想的基盤も明治時代から変質した。それを取り戻す一つの皮切りが「健康」や「文化」ということかもしれない。

●**三俣**: 利用者間のトラブルの調整も必要。法学的には「所有権の内在的制約」という議論がある。日本の私的所有は他国と比してかなり強い。不在村地主の放置もなかなか是正しにくい。

◆**嵐(たてがみ)**: イギリスのフットパスや北欧の万人権は、都市部でどの程度認められるのか。

●**三俣**: 「都市コモンズ」がある。イギリスの場合は1925年に「財産法」ができた。大都市の入会地、共用で使っている所はすべて歩く権利を付与するという法律。北欧の万人権は、都市部の方でも田舎同様に行使できる。

●**三俣**: 都市部と農村部では万人権に対する考え方が違うと予想したが、違いはなかった。家庭教育の段階で、自然との付き合い方を学んで、行動規範になっていた。

●**三俣**: 法の流れはローマ法とゲルマン法に分けられる。日本はローマ法の体系を汲んでおり、所有権の描かれ方は「絶対排他的権利」になる。ゲルマン法は、社会的な関係において、所有権のあり方は規定される。

●**三俣**: 戦後の象徴的なものが、高砂市の入浜権運動。高度成長で火力発電所が海岸を占拠し、住民や利用者が閉め出された。裁判で「入浜権」を争ったが負けた。日本でアクセス権を認めていくのは大変難しい。

事務局から

「六甲山で誰のもの？」と問いかけてスタートした。これからもずっと考えていく。今日は六甲山上での議論の出発で、こんな議論を続けることを提案したい。

◆参考・配布資料など

・パワーポイント: 「六甲山の利用を考える」~環境資源管理の議論から~

◆参加者の声

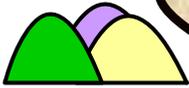
・六甲山はみんなのもの、恩恵を受けている。山を保全するために何ができる、一人ひとりが考える必要がある。
・「フットパス」「万人権」と、六甲山活用との関連を知った。

三俣 学: みつまた がく
兵庫県立大学経済学部 教授
〒651-2197 神戸市西区学園西町8丁目2-1
電話: 078-794-5469
Email: gaku@econ.u-hyogo.ac.jp

・日本ではもうからないものが見向きされないのが残念だ。
・英国、北欧の自然活用が長い歴史の間に培われてきた。
・欧州のように健康に過ごせる権利、思想を広げていきたい。
・欧州の制度を興味深く拝聴、日本での適用をどうするか。
・若い人も参加されたのは良かった。
・これからも市民セミナーを続けていただきたい。

◆参加者: 27名(50音順・敬称略)

泉 美代子 伊谷 幸子 伊谷 正弘 大森 敦史
岡 敏明 岡谷 恒雄 奥田 信也 川添 拓也
木村 正典 小代 薫 真川多一郎 實松 良次
芝 勝行 柴田 将八 鬣(たてがみ)峻 徳見 健一
堂馬 英二 中尾 啓子 南部 哲夫 藤井宏一郎
松岡 達郎 三俣 学 村上 定広 柳川 恵理子
柳田 千恵子 湯浅 久雄 吉田 信子



第127回テーマ 摩耶山再生の会の活動



講師：慈 憲一さんプロフィール
1966年(昭41)神戸市灘区出身・在住。東京在住時に阪神・淡路大震災で実家が被災、翌年神戸に戻る。灘愛をテーマにしたメールマガジンやWEBサイトなどでマニアックな灘情報を発信しつつ、数々のイベントを開催。2013年摩耶山でレンタルショップ monte702 開店。灘百選の会事務局長、摩耶山再生の会事務局長など灘の肩書き多数。



掬星台リュックサックマーケット

- 阪神大震災後、灘区で「まちあそび」
- 摩耶ケーブル・ロープウェイ存続を提案
- 「摩耶山再生の会」の実践と今後

実施日：平成28年8月20日(土)
午前10時～15時00分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道

午前中は散歩道のササ刈り

記念碑台は晴れで、午前中の活動に18名が参加しました。イベント清掃びかびか隊の14名は散歩道とまちっ子の森でササ刈りの作業をしました。4名は散歩道をシュラインロードを経て周回しました。午後の講演には26名が出席しました。

慈さんは震災後から一貫して灘区の活動家

慈さんは、「灘区民にとつての山は摩耶山」で、六甲山はレジャーの山みたいだ。長峰とか摩耶山は日常的に歩いて上がって、裏山として親しんでいた。摩耶山は信仰の山で、中腹に天上寺があって、よくここに連れて行かれた。



灘区から中央が摩耶、隣は長峰・六甲

実は摩耶山は嫌いだった。お寺しかなくて、「寺の人間が何で寺に行かないあかんのか」と思っていたと、摩耶山に関わる原風景を紹介された。阪神淡路大震災の翌年、神戸に戻ってきて、灘区の地域復興活動に20年関わっておられるコーディネーターで、地域活動のコンサルタントとしては主流でない、万人受けすることができないと自認されています。摩耶ビューライン復活の渦中で、「ふだん使いの山」にこだわって地域ぐるみの活動を根づかせている存在感は大きいです。

まやビューライン復活で地域連携の盛り上がり

講演の冒頭で、阪神大震災後の地域への関わりを紹介された。西灘の味泥復興委員会で初めて関わり、灘区民まちづくり委員会の企画委員として、「なだだな」の制作をはじめ、地域全体を見渡した活動を発展しています。そして、摩耶ケーブル・ロープウェイを
残す方向で取り組み、摩耶山再生の活動につながっています。震災後復活した「まやビューライン」の乗客を増やすため



摩耶ケーブル・ロープウェイ

主催：六甲山を活用する会
協力：兵庫県立人と自然の博物館
後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

にいろいろなイベントを着想して実践しますが、乗客数は低下し存続の危機を迎えます。2006年に「リュックサックマーケット」のイベントを導入して活路を見出していきます。

しかし、2010年に、「まやビューラインを来年廃止」と報道されて愕然とし、「摩耶山再生会議」を設立し、神戸市に存続の「提案書」を提出します。そして「将来構想」の具体化を1年かけて練り、再度「提案書」を提出します。1ヶ月後に神戸市長が存続の意向を表明しました。市民活動がオーソライズされる転機になり、実行的な団体「摩耶山再生の会」が設立されます。そして、イベントをどんどん拡充しつつ、「坂バス」でアクセスも改善するなど、地域を巻き込み、震災後の復興プランも活かすなど、多彩な活動が進展します。これらの経緯を失敗談も交えながら、にこやかに話されました。

卓越した「手作りの山あそび」？に感服

摩耶山は盛り上がっていると聞いていました。摩耶山のアクセスが廃止されるという致命的な課題に対して、本腰を入れ本格的な取り組みをされている実態を知りました。ピンチをチャンスに変える、地域挙げての活動を創出したのです。立役者の慈さんと仲間、地域の皆さんにエールを贈ります。



「将来構想」

参加の感想 木下さん

びかびか隊14名で参加させて頂きました。お話の中で今ではなくなっている掬星台の山上遊園地や摩耶観光ホテル等賑わっていた頃があった事も知り、寂しくなった摩耶山を再生させる慈さん達の大変な努力に感心しました。イベントの企画等の内容もユニークで、沢山のアイデアを持たれ、それを将来構想やマヤ暦等で実行されています。今後ともより一層、摩耶山そして六甲山が市民のいこいの場所となりますようにご活躍をお祈りいたします。



【助成金をいただいている機関】順不同
大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ環境保護基金)、
コープこうべ環境基金、セブンイレブン記念財団



第127回テーマ：摩耶山再生の会の活動



第127回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験：10:00~12:10
2. 講演：13:00~14:20
3. 休憩：14:20~14:30
4. 意見交換：14:30~15:00

- 阪神大震災後、灘区で「まちあそび」
- 摩耶ケーブル・ロープウェイ存続を提案
- 「摩耶山再生の会」の実践と今後



摩耶ケーブル弁當も試作

講演のあいさつ（慈 憲一さん）

今のJR摩耶駅の南側にある小さなお寺で生まれて育ちました。小・中・高まで神戸にいて、大学で関東に行き、楽しく東京で住んでいこうとそのまま就職しました。11年目に阪神淡路大震災があり、実家の寺もつぶれ、地域が壊滅状態になりました。神戸に帰って手伝わないかと衝動的に、翌年の1996年に帰ってきました。



慈さん

1. 阪神大震災後、灘区で「まちあそび」

■震災4年後から灘区全体に関わる

●**味泥での活動**：各地区にまちづくり協議会ができ、地域の団体がそこを中心に復興をやっていた。阪神の西灘の周辺で、味泥復興委員会のお手伝いをしたのが、神戸との関わりができた一番最初だった。

●**灘区全体での活動**：当時灘区に灘区民まちづくり会議というのがあり、その下に若手の企画委員会ができた。そこで町の勉強をしてこいと自治会長に放り込まれた。震災後4年目だったか、灘区全体、六甲・摩耶とか、町に関わっているいろいろすることになった。

■惜しむことから、残す方向へ

六甲山で悲しかったのは回る十国展望台、無くなるので「さよならツアー」をした。神戸のいいもの、自分が育った時にあったものがどんどん無くなっていくのを目の当たりにして、すごく悲しい思いをした。摩耶山の方でケーブル・ロープウェイが無くなるということで、たまには残す方向でちょっと頑張ってみようとしたのが、摩耶山再生の会の活動につながっている。

2. 摩耶ケーブル・ロープウェイ存続を提案

■摩耶山の昔と今

●**大正末に摩耶ケーブル**：大正時代の終わりに天上寺に人を運ぶために摩耶ケーブルができた。昭和4年に摩耶観光ホテル（軍艦ホテル）が当時の摩耶町にでき、映画館や公園があり、レジャーランドみたいにいっぱい人が行った。

●**廃墟も脚光**：軍艦ホテルは日本2大廃墟で、廃墟会でクイーンと言われている。キングが長崎の軍艦島で、六甲山系で全国区レベルのすごい地域資産だ。廃墟を活用する話も進めている。

●**掬星台までロープウェイ**：昭和13年の大水害で1回ケーブルが止まった。その後戦争で止まり、戦後10年ぐらい止まっていた。昭和30年代、戦後復興で神戸の交通局が山上駅から掬星台までロープウェイを敷いた。そして奥摩耶遊園地ができ、集客施設もできた。掬星台は高射砲陣地を造るために切り開かれた所だった。

●**昭和42年の水害**：わざわざ山の上に行かなくていいという風潮になった。昭和42年の水害でケーブル・ロープウェイが被害を受け、摩耶観光ホテルも廃業になり周辺はどんどん廃れた。

■「まやビューライン」として再出発

水害とか戦争で中止になっても何とか復活したが、1995年の震災で、大木が倒れ、トンネルも埋まり、復活は無理だと半ばあきらめかけた。

●**6年後に復活**：灘区や神戸市民の人が、ぜひ復活させたいと署名運動をした。6年後の平成13年に復活し、「まやビューライン」という名前に改めて再出発した。

●**乗車数の低下に危機感**：初年度は30何万人乗った。それでも大赤字だがたくさん人が乗った。摩耶ビューラインの友の会ができ、一口なんぼでみんなで支えた。復活した平成13年(2001)をピークにまた落ちていく。平成18年か19年(2007)くらいに、「このままやったらまたあかんぞ」という空気が出て来た。

■リュックサックマーケットの開催

摩耶ケーブル・ロープウェイの集客のため、2006年からリュックサックマーケットを毎月第3土曜日にやって、10周年になる。リュックサックの中に入る物だけで山に来て下さい、それで自由に売っても物々交換でもいい。最初は出店者が8組だけ、毎月やり続けているとメディアも取材に来てくれて人が増え、1年経たんうちに200組の出店者で賑わいだした。

フリーマーケットのような仕切もない、申込も入らない、出店料も何も要らない、闇市みたいなものだ。見に来た人とコミュニケーションができるのが、一番の肝だ。出店者には、再生の会の「マイマザーマウンテン・母なる山摩耶山」というコピーを作ってくれた人もいる。



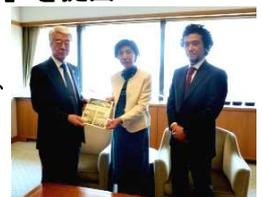
百円レコード演奏

■連合艦隊の「摩耶再生会議」設立

次々にイベントや名物商品作りを行っていたが、ケーブル・ロープウェイの乗車数は増えなかった。平成22年(2010)3月に「まやビューラインを来年から廃止します」という新聞報道があった。各方面に相談し、婦人会、摩耶山を守ろう会、灘百選の会、区民まちづくり会議を一個にまとめて、灘区民全部で摩耶山を考える連合艦隊的な「摩耶山再生会議」を報道の3ヶ月に作った。

■神戸市に協働の「提案書」を提出

市民も行動するから一緒に考えてほしいという「摩耶山再生のプロセスの提案」を作成して、平成22年9月に神戸市長に渡した。この時点では市長は廃止に満々だった。提案を具体化して将来構想を1年かけて作った。平成23年(2011)10月に摩耶山再生会議から要望書を再提出した。そして、実行的な団体「摩耶山再生の会」に改称し、広く市民に呼びかけて、活動することにした。



神戸市長に提案

3. 「摩耶山再生の会」の実践と今後

■存続の方針で市民活動が進展

青天の霹靂だったが、平成23年11月25日に神戸市長が「まやビューラインを存続する」意向を表明した。その決定によって「提案書」を作成し、最終的に存続することになった。好き勝手にやっていたのを、摩耶ビューライン再生の動きによってオーソライズされた。市民団体の市民活動になっていった歴史的な出来事だった。

■どんどんイベントを開催

リュックサックマーケットはコンテンツとして完全に定着した。それに続けて、音楽をテーマにした「摩耶山アコースティックピクニック」、食べ物の「摩耶山スパイスピクニック」、作品展示の「リュックサックギャラリー」というイベントをやった。勝手にグループが盛り上がっていき、山の仕掛けが面白くなった。



有名演奏家も参加

●坂バスでアクセス改善：摩耶ケーブルへのアクセスが悪い。神戸市がJR灘駅から上の方までコミュニティバスを走らせてみようとしたのが「坂バス」。山の手の人が水道筋まで買い物に行ける「お買い物バス」の意味合いも加えた社会実験で徐々に乗車率が上がっている。



「坂バス」の社会実験(上)
 目指す灘の姿(右)



●「マヤ暦」で広報：広報するのも重要で、「マヤ暦(ごよみ)」を毎月出している。摩耶山でこんなイベントをやっているというのを見せたいので、見にくいくらい手書きでばんばんに書いている。



●「マヤカツ」でプラットフォーム：どの曜日でもいいから市民の活動を募集する。例えば、ヨガ活動、山の幼稚園、山撮り写真教室などなど。一人ひとりの方に主催者になってもらってやると、密度の高いものができてく

る。僕らは、プラットフォームを作っているだけで、決して主催じゃないというのが、会の肝だ。

●monte702の活動：星の駅の2階にあるmonte702が事務局で、イベントの予約を取ったり、山の道具を貸したりしている。人工芝を貸し出して、子どもに山の上でごろごろして貰っている。(左下写真) 摩耶山のお土産として、麓の物やオリジナルな商品も売っている。麓の鈴木薄荷から仕入れているハッカは虫除けとか臭い除けとかで、一番売れている。(右下写真)



■「好きでやっている」のが原点

摩耶山にすべてを捧げているつもりはない、好きでやっている。親に摩耶山にひんぱんに連れてこられ、山に触れていたというのが、今こうしている所につながっている。子どもたちを山にどんどん連れてきて貰って、山の体験をどんどん増やしてくれたら、山で何かやってくれる人が出てくるのではないかと期待している。

質疑応答

Q1：湧き出るアイデアの原点は？～思いつきをすぐやるタイプ。1日寝かして忘れるのはネタとしてあかん。やることによって、次から何かが出てくる。

Q2：高尾山との比較は？～京王電鉄が本気でやっている。靴を洗える場所など細かいサービスができています。平日でも人がいっぱい来ている。

Q3：六甲・摩耶の活用策は？～僕らの小っちゃい頃に較べて市民が上らない。「ふだん使いできる山」にした。地元の人に利用してもらおう。

メッセージ(慈さん)

一人でも多くの人に上っていただきたい。「六甲・摩耶はいいところだよ」と声を大にしていただきたい。お孫さんとかをどんどん山に上がらせてほしい。

事務局

慈さんは阪神淡路大震災後の復興に軸足を据えて、実践を肥やしにしながら、大きく地域を巻き込む市民活動に発展された。「アイデアは誰でも思いつくが、それを実行するかどうかが違う」というのは至言だ。参加者も共感されたことが多いだろう。

◆参考・配布資料など

- ・パワーポイント：「摩耶山再生の会の活動」
- ・参考資料：「摩耶山再生 将来構想」
- ・参考資料：マヤ暦8月、イベント・チラシ
- ・参考資料：第21回市民セミナー報告書「摩耶詣について」、第122回報告書「シム記念摩耶登山マラソンの歩み」

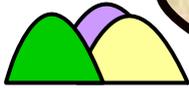
慈 憲一：うつみ けんいち
 摩耶山再生の会 事務局長
 〒657-0826 神戸市灘区倉石通 2-2-29
 電話：078-802-3133 FAX：078-802-3112
 e-mail：eken@pp.iij4u.or.jp

◆参加者の声

- ・摩耶山で沢山のイベントをしているのを初めて知りました。
- ・小さい時の思い出が走馬燈のように駆けめぐりました
- ・身体を動かすことと、識者の講座の組み合わせは新鮮でした。
- ・再生の会の多様な活動を紹介いただき勉強になりました。
- ・慈さんの次々湧き出るアイデア、その継続実施に感心!
- ・慈さんのイベントに感心。エネルギーの源に興味を持った。

◆参加者：26名(50音順・敬称略)

浅田	香織	伊谷	正弘	岩淺	敬由	慈	憲一
大林	恵子	織田	泰史	川幡	孝	北嶋	治夫
木下	健二	木村	明恵	倉持	隆	雑喉	良
玉井	誠	堂馬	英二	土塔あつ子	中尾	啓子	偉
中尾	嘉孝	長野	繁	前田	康男	松本	桂子
松本	俊夫	松本よし	森迫	盛二	森本	桂子	
山下	美紀	柳田千恵子					



六甲山魅力再発見市民セミナー

市民セミナーVol. 129
再び、六甲山の景観計画を
考える / 中瀬 勲
2017年4月発行

第129回テーマ 再び、六甲山の景観計画を 考える

- 六甲山の景観マネジメント
- 森林レクリエーション
- 景観計画の発想

実施日：平成29年4月15日（土）
午前10時～15時00分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：中瀬 勲さんプロフィール

1948年大阪府生まれ。県立人と自然の博物館館長、県立淡路景観園芸学校学長などを兼任。大阪府立大学大学院修了後、カリフォルニア大学客員研究員、県立大学大学院教授、淡路景観園芸学校校長、人と自然の博物館副館長、丹波の森公苑長兼任を経て現職。日本造園学会会長など多くの公職を歴任。阪神グリーンネット事務局長等の震災復興のまちづくりに関わる。日本造園学会賞、兵庫県科学賞等を受賞。



円通寺の借景の庭

午前中はアセビの萌芽枝を調査

曇りのち小雨で11℃、スタッフ7名、見学3名の10名が参加。2班でアセビ切り株の萌芽枝を調査しました。開花が遅れていたクロモジやアセビが咲き出していました。午後の講演に20名が参加しました。



小雨の中、萌芽枝の調査

ランドスケープ専門で40年

中瀬さんは、高校時代からガーデニングや造園に関心が深く、大阪府立大学で久保 貞先生に師事されました。「新渡戸稲造、内村鑑三、宮部金吾の孫弟子だ!」とジョークまがいに言われました。札幌農学校第2期生のゴールドントリオの宮部金吾から、久保先生は日本の近代化の過程で、地域づくり、景観づくり、森づくりが大事だと教え込まれています。

1978年、久保先生からガレット・エクボの研究室に送り出され、28歳でアメリカへ単身赴任。エクボ先生は世界中にランドスケープを広げた、フレデリック・ロー・オルムステッド(右)の流れを継いでいます。初仕事はアメリカ側のナイアガラの景観計画で、1年後に「自然やから触らんとこう」という意外な結論に接し、「自然と接するための流儀」を学んだとのこと。日米の先進的な研究者の系譜にあり、「ややアメリカっぽい、かなり近代化の路線を歩んだ研究だ」と紹介されました。



1万年前から辿って、「都市山」までを解説

講演では、用意されたスライド「六甲・神戸 地域整備の過去・現在・未来」のI～VI章に基づいて、豊富な話題を織りこみながら話され関心を高められました。

まず「過去1万年、長い歴史上での六甲山・緑の変遷」で、照葉樹林から再び照葉樹林へと6期にわたる六甲山の移り変わりを紹介されました。続いて「近世100年、人為による六甲山・緑の回復」で、植林や風水害の被害、第二次大戦中の大木の伐採、戦後の盗伐による緑の荒廃を述べられました。

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

次いで「近世100年、レクリエーション開発の展開」で、別荘、ゴルフ場などの複合開発が先進的に進展したことを説明されました。そして「何故、六甲山は国立公園に」で、水の風景から森林の風景へへの転換と併せて、国立公園化の由縁を語られました。結論部分の「未来の六甲山は」では、「保全」の側面と「利用」の側面からトータル・ランドスケープとして課題を抽出し再確認する必要があると述べられ、さまざまな課題や、アメリカのボストン・コモンなどの参考事例を引用して提言されました。

パブリック・アートを例に、六甲山の山は行政が管理し、壁面のパブリック・アート「羊を徘徊」イベントは市民が運営する組織体で担うことを強調して、質疑応答に進められました。



壁面のパブリック・アート「羊を徘徊」

今後の六甲山を考える視点が磨かれた

12年振りに六甲山の景観計画についてお話しいただきました。「都市山」六甲山に至る100年以上の自然環境や人為活動の変遷、課題やヒントをお話しいただきました。改めて「市民が仕切っていく」ことを啓発されました。

詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 小谷寛和さん

初めてセミナーに参加しました。四季折々の森の表情を身体で感じるのが好きで、六甲山によく登っていました。これがセミナーで中瀬先生が言われていた身近な都市山六甲山の「生態系サービス」、森の恵みの恩恵だということに改めて感じました。また、セミナーの前に、まちっ子の森でのアセビの伐採調査も見学させていただきました。森では子どもたちの自然体験学習も10年以上続けられているとのこと、息の長い活動に感心しました。



【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ環境保護基金)、

コープこうべ環境基金、セブン-イレブン記念財団、

GGG国立・国定公園支援事業



第129回テーマ：再び、六甲山の景観計画を考える



第129回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験 : 10:00~12:10
2. 講演 : 13:00~14:20
3. 休憩 : 14:20~14:30
4. 意見交換 : 14:30~15:00

- 六甲山の景観マネジメント
- 森林レクリエーション
- 景観計画の発想



冷え込んだので、ストーブのお世話になりました

講演のあいさつ (中瀬 勲さん)

4月から69歳になったのですが、突然、知事から淡路景観園芸学校の校長になるよう言われました。

今日のメインテーマですが、風景や景観だけでなく、それらを支える仕組みを含めてランドスケープ、造園と考えていいと思っています。



中瀬さん

1. 六甲山の景観マネジメント

■長期間の植生変遷の場

服部保先生が言われていることで、六甲山がもともと照葉樹林だったのが今照葉樹林に戻って来ている。再度山を例にして6つの時期を概観する。

- ①約1万年前：温暖化によって夏緑樹は次第に照葉樹林へと交代し、約6,000年前には六甲山の海拔700m以下を照葉樹林が占めるようになった。
- ②弥生時代：照葉樹林は焼き畑や燃料の確保などで減少し、奈良時代以前には雑木林になっていた。
- ③雑木林の伐採：伐採頻度が高くなり、コナラ、クヌギなどの落葉広葉樹も衰退しアカマツが進入し、再度山付近でもアカマツ林化がみられた。
- ④15世紀頃から経済の発展：アカマツ林の過剰の利用、特に夜間作業用の灯火に利用するための「マツの根掘り」により、はげ山化が始まっている。
- ⑤1902年から植林：はげ山化した再度山に植林作業が開始され、約135万本のマツ類、ヒノキ、スギ、クヌギ、ハゼノキなどが植栽された。その後、ヒノキが植えられた他は、ほぼ自然の状態に管理されている。
- ⑥植林後：約30年後にはコバノミツバツツジ、モチツツジなどが侵入し、約60年後にはアカガシ、シラカシなどの照葉樹も出現し、再び照葉樹林へと六甲山の緑は動き始めている。

■修行の場 (天狗、奥山) から生活・レクの場

奥山から里山に六甲山は変わっている。この土地はもともと人が入らなかった奥山、天狗が住んでいる場であった所が、人々が入り出して里山に変わっていった。明治の頃が転換点になっただろう。

■100年間の植生回復の場

六甲山の緑が、「植林」により徐々に回復し「再び照葉樹林」へと回復した。緑の荒廃も生じた。



積石工/「六甲山災害史」

- ①1900年 (明治33年) 頃：神戸市内でコレラが発生し、緑の荒廃が指摘された。このために本多静六氏により六甲造林案が策定され、マツ類などの植林がはじまった。
- ②1902年 (明治35年)：砂防法が制定され、修法ヶ原、再度山、布引山で砂防工事がはじまった。
- ③1938年 (昭和13年)：回復しかけた緑が、阪神大水

害で大幅な被害を受けている。

④第二次大戦中：大木の伐採と供出が進められ、緑は荒廃した。さらに、戦後は、一部住民による盗伐が横行し緑は更に荒廃した。

●本多静六の造林指導：明治神宮と六甲山の造林を指導した。明治神宮は日本各地から植物を集めたが、六甲山は地域遺伝子の苗で植えている。

2. 森林レクリエーション

■近代観光レクリエーション発祥の場

【近世100年、レクリエーション開発の展開】

六甲山で、欧米からの近代文明の影響を受けつつ、レクリエーション開発が先進的に進展した。都市近郊での自然地における別荘、ゴルフ場などの複合開発が展開した。欧米のレクリエーション思想にみられる「健康地、避暑地」としての考え方が六甲山でも展開された。

植生の回復と連携していたと考えられるが、治水、衛生、造林、そして景観やレクリエーション利用と多様な機能が統合化されていった。



六甲山ゴルフ倶楽部

●風景観の原点：万葉の頃は恐れ風景観、次いで情緒的な風景観という中で、江戸時代の水の風景観が原点になった。明治以降に、ウィーンの森を原点にするヨーロッパの森の思想が入ってきた。これが欧米人による六甲山開発につながる。

●『日本美の再発見』：著者はドイツ人のブルーノ・タウト、桂離宮、白川郷等の素朴な風景美を紹介した。井上章一著の『つくられた桂離宮神話』も併せ読むと、当時の建築モダニズムの表裏がわかる。

■何故、六甲は国立公園に

1947年、六甲山を国立公園に指定するための調査が開始されている。アーサー・ヘスケス・グルーム開発以来50年後のことである。1956年(昭和31年)には瀬戸内海国立公園の六甲山地区として指定された。この過程には自然の利用か、保全か、という古くて新しい議論がなされたであろう。六甲山地区は「瀬戸内海の展望台」として利用の側面から位置づけられたようである。

●真・善・美：人間の理想としての普遍妥当な価値のこと。認識上の真・学問としての真実、倫理上の善・道徳、審美上の美・芸術。国立公園として指定する際に、保全か利用かという議論の視点と関わっている。

●風景を見れるだけの素養：東大で風致の研究室を始めた田村剛博士は、「風景の良し悪しの差は風景そのものに依る寄りも、見る人の教養の差による」という名言を残している。

●東遊園地：明治4年に外国人用の公園が日本で初めて

神戸につくられた。
「東遊園地」(右写真)
と名を変えて市民の憩
いの場となっている。
六甲山と東遊園をペア
で考えると、すごい由
緒のあるレクリエーシ
ョン公園開発がこの地で始まっていた。



3. 景観計画の発想

■未来の六甲山は

【森林整備戦略】

松岡さんの大作品で、「都市山」の時代、つまり新たな人間と山の自然との関わり合いをどうするか、という時代に来ている。表六甲側は都市山で、北六甲側は新しい里山という位置づけで、六甲山の「恵み」を「育てる」・「活かす」・「楽しむ」仕組みづくりを考えている。これからどうするのかはまだ見えていない。



森林整備戦略の目的

- 生態系サービス：多面的機能の発揮で、健全な森や自然から、われわれが得られる恵みのこと。季節折々の食べ物を折々に合わせてやっている、自然を敬う日本人の気持ちが反映されて、和食が世界遺産になった。

【六甲山系グリーンベルト整備事業】

「阪神・淡路大震災復興計画」の主要プロジェクトで、対象範囲は、神戸市須磨区鉢伏山から宝塚市岩倉山までの六甲山の南斜面で、東西 30km、面積は約 8,400 ha。整備の目標は、①土砂災害の防止、②良好な都市環境・風致景観、生態系及び種の多様性の保全・育成、③都市のスプロール化の防止、④健全なレクリエーションの場の提供である。(一般のグリーンベルトと同様)

- 起伏のある地形のグリーンベルト：海外のグリーンベルトは、ボストンのグリーンネット構想のように、平地に樹林帯を作り中心部を囲んでいる。六甲山は起伏のある地形で成立するグリーンベルトの議論が必要。

■提言Ⅰ：日本庭園とアート

六甲山でも日本庭園の具象、抽象、借景が生かせる。風の彫刻家の新宮晋さんは動くアートを広めている。

- 日本庭園：具象、抽象、借景庭園が日本庭園の芸術論。相楽園のような具象に富んだ回遊式庭園、植物と水を取ったら石庭になる。竜安寺のような石の庭園は抽象画の世界、そこから石を取ったら借景になる。

■提言Ⅱ：地域再生の世界的なテーマ

一度は荒廃した、あるいは荒廃させた里海、里川、里山のハード、ソフト両面からの再生が、地域再生での世界的なテーマになっている。六甲山でもいろんな再生する要素が転がっている。それを発見して再生していく。

- ボストンのグリーンライン：高速道路を地下に埋めて、地表部を人間のための憩いの場になっている。廃物として放置されていた所に入れて再生させた。
- 尼崎の21世紀の森：海際で、荒れ果てた土地をみんなの力でもう一度森に戻そうとしている。武庫川の下流にあり、流域で種を採って植物を自前で育成して、森を再生している。

■参考Ⅰ：ボストン・コモンにならう

- ボストン・コモン：世界で一番古い公園で、カエルの池があったり、水遊びしたり、施設や店があって賑わっている。春夏秋冬、市の公園協会が運営して収入を上げている。こういう四季の折々の使い方をどうするのがテーマになる。



冬もスケートで賑わう

■参考Ⅱ：ソフトは市民の組織体で運営

- パブリック・アート：高速道路を埋めて公園を作った。公園は街が管理しているが、市民がアートをやっている。訳すと「無料、一時的な展示会を通してグリーンウェイに革新的な現代芸術を発見します」。
- ソフトの運営協議会：土地の管理とは別に、楽しく遊ぶための組織体が出来上がっている。有馬富士公園、甲山公園、21世紀の森公園などでも、運営協議会をつくって、公園でのイベントや仕組み作りは市民に任せてもらっている。県立公園の管理者はハードものを管理し、ソフトは市民が中心になってやる。

事務局

参加者は20名と少なかったが、熱心な方々が集まって、広い視野から多様な話題が展開しました。質疑応答では、松岡さんが「森林整備戦略」を補足し、前田さんが国立公園化の背景にある意図を問い、さらに松井さんが「拡大造林」の失敗に論及しました。六甲山の「今後を考えるための素養」は十分育まれたようです。

◆参考・配布資料など

- ・パワーポイント：「六甲・神戸 地域整備の過去・現在・未来」
- ・第26回市民セミナー報告書：テーマ「六甲山の景観計画を考える」、中瀬勲講師／六甲山を活用する会2005年5月発行

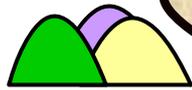
中瀬 勲：なかせ いさお
兵庫県立人と自然の博物館 館長
〒669-1546 三田市弥生が丘 6
電話：(079) 559-2001

◆参加者の声

- ・中瀬先生の講演は大変興味深かったです。都市山について、市民と六甲山をもっと近づけて欲しいと思います。やはり、楽しい場の創造をお願いしたいです。六甲だけでなく、東遊園地の芝生化など、もっと親しめる場を希望します。
- ・セミナーは132回で終わらず200回を目指して続けていただけませんか。楽しみが減ってしまいます。(若浅)

◆参加者：20名(50音順・敬称略)

伊谷 正弘 伊谷 幸子 井上 幸雄 岩浅 敬由
大岸ゆう子 岡谷 恒雄 川部 忠夫 小谷 寛和
田渕美也子 辻 美由紀 徳見 健一 堂馬 英二
中尾 啓子 中瀬 勲 西尾 司 播磨 征夫
前田 康男 松岡 達郎 松井 光利 八木 浄



六甲山魅力再発見市民セミナー

市民セミナーVol. 130
六甲山を市民のものに /
新野 幸次郎
2017年6月発行

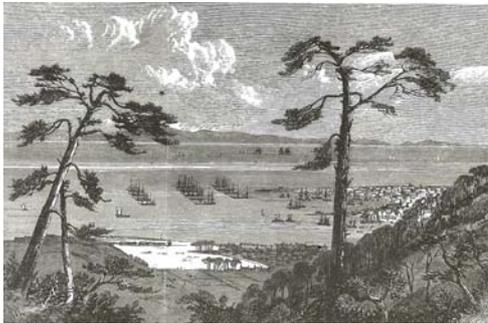
第130回テーマ 六甲山を市民のものに

- 山と海をもつ神戸の特性
- 大洪水と大震災を
乗り越えた神戸
- 日本最大の森林都市を
目指して

実施日：平成29年6月24日（土）
午前10時～15時00分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：新野 幸次郎さんプロフィール
1925年鳥取県生まれ、(公財)神戸都市問題研究所理事長、神戸大学長を経て、平成3年同大学名誉教授。その間日本経済政策学会会長の他、政府のいくつかの公職を歴任。阪神・淡路大震災以降は、都市再生戦略策定懇話会をはじめ、県と市の復興関係の委員会座長・顧問などをつとめた。



開港当時の神戸 /
ザ・イラストレーテッド・ロンドン・
ニュース

自然体験に30名が参加

午前中の自然体験会には、イベント清掃ぴかぴか隊など30名が参加し、散歩道やまちっ子の森のササ刈りと、散歩道モニターの2班に分かれて活動しました。

午後からのセミナーには38名が出席し、熱心に聴講しました。



自然保護センター前で

92歳の神戸っ子で、六甲山の保全を重視

「森林の専門家でございません。鳥取の生まれで、18歳の時からこちらの学校に入り、神戸大学に進み、90歳になるまで神戸で過ごしておりますから、「神戸っ子」と言ってもおかしくない。その神戸で、都市問題研究所のような形で勉強するようになった。神戸にとって一番大事な問題はいくつかある。その中の一つとして、六甲山の経営の問題、保全の問題というのは、本気で、私どもの生活の一部として考えていかなくちやならない」と、心境を語られました。

進取の神戸は、森林都市の保全も先駆する

冒頭、神戸市の特徴として、神戸開港150年で欧風文化を開化する街という歴史を持っていると述べられました。進取の気性に富んでおり、全国でも初の消費者問題や市民福祉などユニークな試みをしています。宮崎市長の時代に「市民のための行政」を考えて、公社で収益を上げてそれを施設の運営や市内の景気改善に反映しました。市民福祉のための一つとして「しあわせの村」を作って運営したことや、埋め立て事業でも全国や海外からも注目を集めたと話されました。

1995年の阪神・淡路大震災は、初の「大都市直下型地震」で日本災害史に特記される体験でした。昭和13年・42年の大水害もあり、災害の街としても注目されました。大震災の当時、個人のボランティアが活動し、ボランティア活動のあり方を一変して、NPO法案につながりました。

このように、神戸は他の都市の見本になる新しい活動から、大変な災害の象徴になる経験も持ったのです。このころ70歳の幸次郎さんは、震災復興のさまざまな会合のリーダー格と

して活躍し、現在も震災の教訓を東北や熊本に伝える活動を続けておられます。

次いで、日本最大の森林都市という側面を解説されました。森林の持つ7つの機能を紹介され、六甲山の明治35年以来の植林を踏まえて、現在の神戸市の森林整備戦略の展開に期待を託されました。



新神戸駅北側での整備 /
神戸市建設局防災部

日本の地形の特徴や国土の保全についての先人の言葉を紹介され、「天災が日本人を素晴らしい国民にした」と強調されました。終盤に、レガシー（遺産）とレージェンド（伝説）を結びつけたストーリー（物語）を作る着想を紹介され、神戸や六甲山に新たな関心を集める提案をされました。

より良い神戸を目指す努力を啓発された

神戸を70年にわたって見渡し、行政の施策にも関わってこられた幸次郎さんから、足元を見るだけでなく、鳥の目で神戸や六甲山を見ることを触発されました。「次の世代により良い神戸にしたい」というメッセージを受け、「目からウロコだ。まだ引退できない」と、エネルギーを注入されました。

詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 北嶋治夫さん

初めて六甲山の魅力に触れるセミナーに参加することができた。六甲山の素晴らしさ、大切さを知り、そして神戸に六甲山が存在していることに一神戸市民として誇りすら覚えたひと時だった。



100年余り昔ははげ山だった六甲山。大勢の市民が努力した結果、今は緑豊かな山として蘇った。先人たちの努力に敬意を払い、今後も市民が集い愛される六甲山を後世に引き継ぎ、伝えていく使命感を抱いた有意義な一日になった。有難うございました。

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

【助成金をいただいている機関】順不同

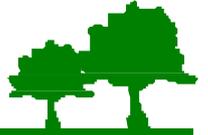
大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ環境保護基金)、

コープこうべ環境基金、セブン-イレブン記念財団、

GGG国立・国定公園支援事業



第130回テーマ：六甲山を市民のものに



第130回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験：10:00~12:10
2. 講演：13:00~14:20
3. 休憩：14:20~14:30
4. 意見交換：14:30~15:00

- 山と海をもつ神戸の特性
- 大洪水と大震災を乗り越えた神戸
- 日本最大の森林都市の繁栄を目指して



自然保護センターの展望台で記念写真

講演のあいさつ（新野 幸次郎さん）

経済学が専門で、六甲山だとか地震について専門的な知識はほとんどないといっているくらいです。神戸都市問題研究所でこの二つとも密接な研究を進めることになり、今日はその一部をお話します。



新野さん

1. 山と海をもつ神戸の特性

■神戸開港150年

神戸というのは面白い都市で、今年、開港150年になる。全国の都市でも非常に違った、ユニークな仕事をしてきた。開港のために、横浜がアメリカ向けの貿易中心にしたのに対して、米国を除いた西欧のヨーロッパの国々の文化だとか芸術だとか、そういうものを受け止める、あるいは製品や品物を受け止める街になった。欧風文化を開化する街という歴史を持つようになった。

■神戸市は進取の気性に富んでいた

●消費者問題神戸会議：神戸市は全国の消費者問題の開拓の最初の都市として名乗りを上げた。企業と市民と行政が一体となって消費者問題に取り組まなければならない、三者合意でこの問題の解決にあたらなければならないと主張し、日本全体でも注目をされた。

●市民福祉振興協会：神戸市のような一地方都市が、福祉条例を作って、市と行政とそれから市民と企業と行政が一体となって市民福祉の問題を考えた。国はやりすぎだと批評し、当初は認めようとしなかった。

●しあわせの村：北区に「しあわせの村」を作り、その中に「シルバーカレッジ」を作った。そして市民福祉の向上のために、市民自らが努力をするという組織も作り上げた。しあわせの村は、他の都市にもない、日本以外の他の国にもないような施設で注目された。私も10年ほど、しあわせの村の村長をした。



神戸市シルバーカレッジ

■宮崎市長のユニークな仕事

●市民のための行政：本当の行政というのは、いろんな施設を作っただけでなくて、その施設を運営して市民の幸せを確保でき、その運営が赤字なしに運営できるようにすると考えた。そこで公社を作り、営業成績を上げて蓄積をして、蓄積したお金で景気が悪い時は市内の景気を良くするために、お金を使った。

●ポートピア博覧会：1981年に開催したポートピア博覧会では収益が65億円貯まり、それを基金にいろんな運営のための元手にした。ポートアイランドでやる国際会議に参加する人たちに、援助費を出す制度を作った。開設以来その委員長を私がやらされている。国際会議が神戸でたくさん運営されるようになった。

●基金の運営：いろんな公社公団を作り、その収益を基金に施設が運営できるようにした。基金から3分の

1、3分の1は神戸市が税金の中から負担する。残りの3分の1は、施設の利用費とかで収入を上げる、3分の1ずつで運営する計算をした。

■埋め立て事業

ポートアイランド、六甲アイランドを埋め立て、神戸市が最初にまち作りを始めた。日本の他の都市も神戸市の埋め立て事業を参考にして、埋め立て事業をやるようになった。

●六甲アイランドの建設

六甲アイランドの建設をコンペで、市がやるのではなくて企業が受け持つやり方になり、積水ハウスがその世話をした。



六甲アイランドの埋め立て事業

●六甲アイランド基金：P&Gなどと一緒になり、8億円の拠金を元に、「公益信託事業」を始めた。六甲アイランドの自治会活動とか、神戸市内で国際的な活動をする団体などに支援の費用を出す。私もその運営委員長をずっと設立以来やらさせていただいている。

民間の企業からの拠金を基に、新しくまち作りし、それ以外の神戸市の国際的な事業について支援をする試みも、他の都市でも非常に注目をされている。

2. 大洪水と大震災を乗り越えた神戸

■阪神・淡路大震災の経験

昭和13年と42年の大洪水と、1995年の阪神・淡路大震災を経験し、災害の街として注目されるようになった。大震災の方は、「大都市直下型の地震」としてこれだけ大きな被害をもたらした地震というのは他になく、日本の震災史の中でも特記すべき災害として取り上げられ、地震国としての反省の材料になった。

●寺田寅彦の警告：昭和10年に書かれた論文、『天災と国防』の中で、日本のような地震大国では、災害に備えて、災害に対応して国民を守り復旧を分担する軍隊を運営しなければならないと書いている。

また、大変な風水害が起こってもそれに耐えて、みんな団結してそれを乗り越えて生きていこうとする努力が、日本人のお互いに助け合い働いていこうとする性格を作り上げていった。「天災が日本人を素晴らしい国民にした」とも書いている。

■ボランティアの活動

当時かってないボランティアの活動が始まった。誰からも言われることがなくて、行ってあげようという気持ちになって、全国から若い人たちが集まってきた。これは日本の歴史の中で初めてのボランティア活動のあり方で、それがきっかけでNPO法案ができて、新しいNPOの活動を法令上も保護しようという体制が全国的にも作り上げられていく。

神戸市が今まで、他の都市が見本にしていたという新しい活動をただけでなくて、大変な災害の象徴になるような経験を持つようになった。

■震災での関わり

ちょうど70歳の時で、もう大学は辞めていたが、亡くなられた貝原知事に誘われて、「都市問題策定懇話会」の座長をやらされた。震災復興のためには、70歳の年からよく頑張ってきたものだと思う。

●**兵庫創生研究会報告**：神戸新聞社から頼まれ、陳舜臣さんたちと一緒に、「兵庫創生研究会」を運営した。いろんな会場に分かれて、報告書を作った。

●**国際検証**：国際的に有名な専門家を呼んで、5年目に震災の検証をやった。そして10年目には総括検証というので、10年間での復興の仕事で何が駄目で、何が上手くいったかをちゃんと検証して報告書を作って、今後の震災の災害に備えた。

3. 日本最大の森林都市の繁栄を目指して

今から17、8年前、農林水産省の大臣から日本学会議の方に「地球環境人間生活に関する農業および森林の多面的な機能の評価について」の諮問があり、平成13年の11月に森林の7つの機能の報告書を作った。

■森林の7つの機能

①**生物多様性保全機能**：虫とか動物とか、生きものが保全されるような機能。六甲山は、生物保全の多様性が保全されている典型的な山である。

②**地球環境保全機能**：地球の環境を保全する機能。CO2が全世界で温暖化の問題として取り上げられている。山林を上手く管理すると、CO2を下げ吸収する。

③**土壌災害の防止機能**：土壌の保全機能というものも森林は持つ。昭和13年の水害後、神戸市はダムを造り、土砂崩れがそこでチェックできるような仕組みを六甲山系で広範に展開した。

④**水源涵養機能**：水を山林が保全するようにして、川に流していくような機能。布引の滝の辺りで採った水は、南洋を通っても腐らない水だと注目された。

⑤**快適環境形成機能**：森林というのは快適な環境を形成する機能を持っている。

⑥**保健レクリエーションの機能**：日本で初めて六甲山上にゴルフのコースが出来た。六甲山というのは、山頂が割りに平たく面積があり、いろんな活動ができる。

⑦**文化機能**：六甲山の森林の機能は、居留地から上がってきたイギリスの人たちが開拓した。外国人が自分たちの生活をエンジョイする場として六甲山を、保健レクリエーションとか、文化機能とか、快適環境形成機能とかを開拓する形で変革してきた。神戸の開港と六甲山の開発とは非常に密接な関係を持っていた。



記念碑台のグルーム像

■六甲山の植林

●明治35年の植林：

当時の日本の林学の大家であった本多静六さんが植林の指導を一生懸命やって、今日のような六甲山が出来上がってくる。六甲山は大変な裸山から立ち上がった、涙ぐましいそれまでの市民の努力の結果できたものと考えなくちゃならない。



植林直後の六甲山

●**森林王国の都市経営**：日本の場合は森林が国土面積の7割ぐらいを占めているので、街の中に森林を作るというあまり大きな試みはしていない。神戸市の総面積のうちの4割は森林でこの六甲山が入っている。こんな街というのは日本でも他に無い。そういう街の中で生活をするとなると、森林は自分たちの生活のそのものを形成しているものになっている。

●**六甲山の森林整備戦略**：神戸市が全国に先駆けてやっている森林戦略というのを、どれだけ上手く生かしているかということ、神戸でも、日本の全体のために考える必要がある。(松岡氏「木が繁ってきたので、少し手を入れる。木を伐っちゃいけないという価値観を変更しようとしている」と補足)

■国土の安全

●**国土を考える**：慶應義塾大学の塾長だった小泉信三さんが「先祖から受け継いだ国土をそのまま次の世代に引き渡すことになったら恥ずかしいことだ」と呼びかけている。これは六甲山の問題、日本の国土の問題を考える時に絶対忘れてはいけない言葉だ。

●**山林の保全**：東大名誉教授の太田猛彦さんが『森林飽和』(NHKブックス)で、森林が大きくなり過ぎて、山林の保全ができなくなったと書いている。

■六甲山のストーリーで関心を高めたい

どこでも設備やインフラなどのレガシー(遺産)ができる。それについての話がレジェンド(伝説)になる。これを一緒にすると、ストーリー(物語)が出来上がる。ストーリーが出来上がることで、人々の関心が強くなってくる。そして、その場所なり、施設なりを盛り上げてみんなのものにしようとする動きが強くなる。神戸や六甲山でも関心を高めるストーリーを作り上げたい。

事務局

市民セミナーの最終年で記念になる講演をしていただきました。参加者一同が、新野さんの含蓄のあるお話と、前向きで元気いっぱいのお姿に感銘を受けました。

◆参考・配布資料など

- ・ 配付資料：神戸都市問題研究所メールマガジン「マンズリーレポート」巻頭言～六甲山をみんなの山にする工夫(その1～3)
- ・ 参考資料：『都市政策』第149号～特集「協働と参画による六甲山を生かした神戸づくり」(10冊寄贈)

新野 幸次郎：にいの こうじろう

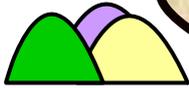
(公財)神戸都市問題研究所 理事長
〒651-0083 神戸市中央区浜辺通 5-1-14
電話：(078) 252-0984

◆参加者の声

- ・ 神戸市を世界に注目される街にしたい思いが伝わりました。
- ・ 国土を改善し次世代に渡さねば恥である、に感銘しました。

◆参加者：38名(50音順・敬称略)

天野 征一郎	伊谷 正弘	井上 幸雄	岡 敏明
岡谷 恒雄	金山 行雄	北嶋 治夫	木下 健二
木村 正典	久保田 みつ子	熊谷 正一	黒田 美恵子
倉持 隆	小谷 寛和	佐藤 昌弘	島岡 寛
白澤 清子	雑喉 良	高砂 雅人	玉井 誠
手嶋 光孝	堂馬 英二	徳見 健一	長野 繁
新野 幸次郎	原 清	林田 玲子	廣谷 玲子
藤井 浩	松岡 達郎	村上 正広	村山 健次郎
森迫 盛二	森長 英二	山下 美紀	柳田 千恵子
湯浅 久雄	渡部 公子		



六甲山魅力再発見市民セミナー

市民セミナーVol. 132
六甲山発郷土誌づくりの
歩み / 堂馬 英二
2017年10月発行

第132回テーマ 六甲山発郷土誌づくり の歩み

- 六甲山を活用する会の15年
- 六甲山発郷土誌づくり
- 六甲山発郷土誌を普及する



展示ルームに参加者集合

実施日：平成29年10月21日（土）
午前10時～15時00分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：堂馬 英二さんプロフィール

1947年生まれ、灘区在住。1970年静岡
大学ヒマラヤ遠征隊に参加。71年農学
部卒業、民間企業勤務を経て、75年
ヒマラヤ技術協力会事務局長。76年
から（株）リクルート専属教育トレー
ナー、91年（株）ワークスタイル研
究所を設立。阪神大震災以降、六甲
山の活性化に関わり、2003年六甲
山を活用する会を設立。

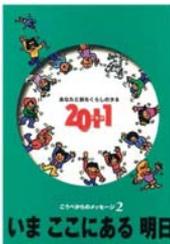
台風前日、雨中の散策に24名が参加

台風21号が接近中の雨天で14℃、静岡大学山岳会一行11名など24名が、雨具を着けて午前中の自然散策をしました。まちっ子の森や、森と歴史の散歩道を探勝して、当会の環境活動を知っていただきました。午後のセミナーは最終回ということで久しぶりに参加される方も多く、42名もの盛況で、ざっくばらんな雰囲気でも賑わいました。

阪神大震災から地域に目を向けて20年

講師は阪神大震災後から六甲山に関心を向けて活動を続けています。20年近く保管していた冊子を数点、参加者に寄贈しました。震災3年後にコープこうべが発行した『いまここにある明日』で、「こうべ」らしさってなんだろうと題し、ハイカラ生活の追求からオリジナルな生活の創造を提起しました。

1999年から3回開催した六甲山上でのブチ・シンポジウムの報告書は、市民として初めて六甲山に目を向けた試みとして注目を集めました。これらが地域を知ろうとする原点になり、「市民セミナー」の運営や報告書の継続・発信につながっています。



震災記念誌

「市民セミナー」から「郷土誌」の発信へ

講演は岡さんの司会で進みました。まず「六甲山を活用する会」15年の概要です。会の趣旨や運営体制、活動地域、そして「市民セミナー」を軸にして派生した環境整備や環境学習など、六甲山上での活動は広がっています。

主題の「六甲山発郷土誌づくり」の冒頭で、地域を知る試みを始めた出発点を述べました。2000年前後に神戸地域ビジョン委員会でも県民行動プログラムの策定に関わっており、これが2003年の市民団体の設立につながりました。

リニューアルした兵庫県立六甲山自然保護センターの活用に取り組み、六甲山上で半日滞在する方策としたのが「六甲山魅力再発見市民セミナー」です。

初年度は関係者を講師にして6ヶ月の予定を立てただけでスタートしました。毎月第3土曜日、参加費500円、講師とテーマは一回限り、当月報告書発行、3年後に『六甲山物語』を出版すると掲げて、綱渡りに近い状態でした。講師探しや集客などで苦労しましたが、やがて多彩な講師が出演さ

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

れ、多岐にわたるテーマを集めて、4年目には『六甲山物語1』を発刊しました。活動が軌道に乗り、『六甲山物語2・3・4』や『六甲山辞典・総集編』CD-R版も発刊し、六甲山情報を集積しました。



『六甲山物語』1～4 発刊

9年目に100回を迎え、「市民セミナー」の終了を考え出した時、「六甲山発郷土誌」という言葉に出会いました。活動の意義を改めて認識し、さらに6年継続しました。

15年目の現在、『六甲山物語5』の発刊を機に、「市民セミナー」を継続するのは負担が大きいの、終了することにしました。蓄積した六甲山情報やノウハウを広める方向に転換します。まず、「市民セミナー」全132話を再整理し、4つのジャンルの「六甲山発郷土誌」マップを作成しました。市民が地域を知るためのフレームができたので、運営ノウハウや活用方法も加え、ネットで発信する準備を始めました。

六甲山を知る「手がかり」を広めたい

六甲山を広く深く知ろうとする「市民セミナー」の継続が、活用可能な産物を生じました。出席者は132回という運営や報告書の発行に感嘆されました。これからの正念場は、多様な講師の貴重な語りを生かし、多くの市民が地域を知り関心を高める「手がかり」として活用してもらうことです。また、新たなチャレンジを続けるという予感もしています。

詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 山端謙一郎さん

六甲山を活用する会を立ち上げて15年、市民セミナーを132回、報告書を毎回発行されていた事、すごい経験をされていたんだと感心させられました。世の中では継続は力なりと申しますがそれを実践されていた！



参加者の募集、講師の依頼等のノウハウも蓄積されていると思います。私ども静岡大学山岳会関西支部として六甲山を楽しむ事ができました。会の皆様ありがとうございました。又会の隆盛を祈念致します。

【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、

コープこうべ環境基金、セブン-イレブン記念財団、

G G G 国立・国定公園支援事業



第132回テーマ：六甲山発郷土誌づくりの歩み



第132回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験：10:00~12:10
2. 講演：13:00~14:10
3. 休憩：14:10~14:20
4. 意見交換：14:20~15:00

- 六甲山を活用する会の15年
- 六甲山発郷土誌づくり
- 六甲山発郷土誌を普及する



42名で大盛況（司会は岡さん）

講演のあいさつ（堂馬 英二さん）

ふだんは黒子として「市民セミナー」運営のお世話をしています。最終回は仕掛け人が責任を取れと言われて、講演を引き受けました。「市民セミナー」の背景や経緯をご説明して、「郷土誌」の広報についてのご意見をおうかがいしたいと思います。



堂馬さん

1. 六甲山を活用する会の15年

「六甲山を活用する会」は六甲山上で長く活動する市民団体です。「市民セミナー」を発端に、環境整備や環境学習などにも取り組んでいる。

■「六甲山を活用する会」の今

- 会の概要：平成13年9月設立、現在の会員は90名。趣旨は、記念碑台周辺の利用、自然保護センターの活用、「まちっ子の森づくり」と「森と歴史の散歩道」の普及を挙げている。
- 会のやりくり：ここ5年間では事業費は438万円から227万円の幅がある。7割前後は助成金で賄っているが事務局運営費などのやりくりで苦勞している。
- 活動地域：六甲山中央部の記念碑台周辺の2km圏で、自然保護センターを拠点に、まちっ子の森や近畿自然歩道で毎月3～5日活動している。

■活動内容

- 市民セミナーと郷土誌：2003年4月に第1回市民セミナーを開始し、2011年までは毎月、2012年から年4回の開催で、15年目の現在132回を迎える。毎回報告書を発行し、3年毎に『六甲山物語』を発刊。「六甲山辞典・総集編」CD-R版も発刊し、郷土誌といえる資料を蓄積している。
- 森と歴史の散歩道づくり：2006年から、近畿自然歩道の清掃・整備に取り組み、延長1kmでササ刈りや山道整備を継続している。2.5kmの周回路を「森と歴史の散歩道」と名づけて整備し、案内もしている。
- まちっ子の森での環境学習：四季の環境学習として、年4～5回、まちっ子の森の二つ池などで、「小さな場所でも目を凝らせば多様な世界が見えてくる」をモットーに、学童対象の環境学習を運営している。
- アセビ伐採調査：2009年からまちっ子の森1.2haで、落葉広葉樹主体の森に再生を目指すアセビ伐採調査を4期実施した。フォロー調査を継続し、人と自然の博物館の研究紀要『人と自然』に学術論文も掲載している。

2. 六甲山発郷土誌づくり

原点を振り返ると、阪神大震災で地域の生活文化が壊滅したと感じて、六甲山との共生に関心を向けた。20年前に作成し保管していた冊子を死蔵しないために配付したい。これらを参照し、「郷土誌」の前史に触れる。

■地域を知る試み

- 「こうべらしさ」を考える：震災3年後、体験が風化するのを心配して、コープこうべが記念冊子を発刊した。編集協力した私も「こうべ」らしさってなんだろ

う、をテーマに文章を載せた。神戸の特色を思案して、「ハイカラ生活の追及からオリジナルな生活の創造」を提起し、六甲山の自然環境との共生を考えた。

- 六甲山に目を向ける：生涯学習団体「21世紀学会」の有志で、1999年に六甲山上でプチ・シンポジウム「改めて六甲山に目を向けてみよう」を開催し、報告書も発行した。マスコミに注目され脚光を浴びた。3年で3回続けて、市民が集まり六甲山のことを話す交流と、多様な報告や提案を集めることができた。
- 市民団体を立ち上げる：兵庫県が神戸県民局を設立し、公募された地域ビジョン委員会に六甲山部会のリーダーとして参画した。4年かけて六甲山を生かす「県民行動プログラム」を作成し、それを実践しようとした勝手連が市民団体を設立した。

■「六甲山魅力再発見市民セミナー」の試み

- 「市民セミナー」の着想：兵庫県の唯一の施設である「六甲山自然保護センター」がリニューアルし、施設の有効利用が課題になった。山上に半日滞在する集客として「六甲山魅力再発見市民セミナー」を着想した。毎月第3土曜日、参加費500円、講師とテーマは一回限り、当月報告書発行を基本にした。第1回は18名が参加したが、貴重な話を神戸市民150万人に伝えたいので、3年後に『六甲山物語』を出版すると宣言した。綱渡りの「市民セミナー」が活動した。
- 報告書の発行：参加者募集チラシや報告書の基本デザインと様式を最初に決めた。各回の報告書はA4×4ページで、表紙はセミナーの概要、講演内容の要約が2ページ、裏表紙は会報とした。開催時、写真・VT R、メモ、IC記録を行った。若手がブライントッチで記録を作成してくれ、編集作業が軽減された。
- 『六甲山物語1』出版：報告書は当月作成して郵送し、年度毎に「六甲山魅力再発見ガイド」を発行した。3年分の報告書36話を再編集し『六甲山物語1』を発刊した。講師とテーマは一期一会で幅広くランダムに集めたため、再編集する際に、目次立てで苦勞した。テーマを6つのジャンルに集約できたのが大きな成果で、座標軸も得られた。



『六甲山物語』目次

1. 六甲山を見渡す～六甲山の成り立ちと都市環境
2. 六甲山を巡る～六甲山の歴史と文化
3. 六甲山の植物を知る～六甲山の生物
4. 六甲山の動物を知る～六甲山の生物
5. 六甲山のくらし・学び～生活文化と環境学習
6. 六甲山に親しむ～スポーツからレジャーまで

辞典として使えるように437の用語索引も作り、神戸知事に巻頭言をお願いし、初版1千冊を出版した。

■「市民セミナー」運営のエピソード

- 月次開催から4回開催へ: 月例開催を9年続け、2011年から4・6・8・10月の4回開催に変更し、午前中は自然散策、午後は講演の組み合わせにした。
- 参加者は定員の9割: 「10名を割ったらセミナーは廃止する」と気を引き締めて集客した。最少14名で最多は57名、132回平均で26.7名になった。
- 「郷土誌」を自覚: 2010年に北海道新聞の記者と話した際、「市民セミナー」に対するコメントを求めると、「大都市における郷土誌づくり」だと示唆された。「六甲山発郷土誌」という意義に目覚めた。

■「六甲山郷土誌づくり」のノウハウ

- 講師依頼: 2回出講されたのが6名、市民活動家からオーソリティまで合計126名で、人と自然の博物館の研究者をはじめ学識経験者も多い。人物、活動内容、テーマという3つの魅力を確認してお願いしている。
- 『六甲山物語』シリーズ: 3年毎に『六甲山物語2、3、4』を刊行し、『六甲山辞典・総集編』CD-Rも発刊した。『六甲山物語5』の出版を目指している。
- 運営の工夫: 神戸シルバーカレッジのびかびか隊に年間行事として団体参加してもらい参加者を確保している。年4回の開催にすることで運営の負荷を軽減した。郷土誌としての内容を充実するために、六甲山の特性を探るテーマを増やしている。

3. 六甲山発郷土誌を普及する

■「六甲山郷土誌マップ」を作った

- 132話が4つのジャンル: 『六甲山物語1～5』をまとめて検索できる試みをした。「六甲山の特色」4項36話、「六甲山の歴史」3項29話、「六甲山の生きもの」3項32話、「六甲山とくらし」5項35話に整理でき、郷土誌の全体像が簡明になった。

「六甲山発郷土誌」マップ (ジャンル一覧)

A. 六甲山の特色	B. 六甲山の歴史
(1) 都市山を生かす	(1) 地域の歴史を辿る
(2) 六甲山を広く見渡す	(2) 神戸開港からの歴史を辿る
(3) 六甲山の自然環境と災害	(3) 六甲山の現代を知る
(4) 六甲山の生態系に関わる	
C. 六甲山の生きもの	D. 六甲山とくらし
(1) 六甲山の生きものを知る	(1) 六甲山の地場産業
(2) 六甲山の植物を知る	(2) 六甲山のくらし (4) 六甲山を歩く
(3) 六甲山の動物を知る	(3) 六甲山の学び
	(5) 六甲山で楽しむ

- マップの活用マニュアル化: 利用者向けの案内書や、検索の仕組みを整備する。郷土誌の目指すところや、有効な使い方や小冊子で案内し、報告書の内容はCD-Rや、ネットで検索するという形を考える。

■「六甲山発郷土誌」を普及したい

- web. で情報発信: 「六甲山発郷土誌」は専用のホームページを制作して無料で公開することを基本的に検討している。情報公開について講師の承諾を求めると、主旨に賛同し激励される方が圧倒的に多かった。
- 運営ノウハウの広報: 「市民セミナー」の運営や、「郷土誌」の制作などもノウハウ化して、「六甲山発郷土誌づくり」として、全国に紹介したい。

質疑応答・感想 (敬称略)

- * 田中: これだけきちっと報告書を作るのは真似できない。原動力はどこにあるの? ~私は編集者の立場、講師の話誰かに伝えたいという心がけかな。
- * 愛徳 (なるえ): 人集めのノウハウは? ~何とか集まっている。レポートは難しいがロコミやグループ参加が有効。132回の市民セミナーを凝縮した形にすると日本全国でもできそう。~全国の地域史とか郷土誌、地域起こして活動する人にも伝えたい。
- * 三木: ライフスタイルの創造に貢献したか? ~難しい質問だ。行きがかりでやっている、役に立つのとオリジナリティの2本柱を求めている。
- * 藤原: ふつうは地域の中の六甲山という見方だが、六甲山という立場から逆に地域を見ているのに関心。
- * 前田: 『六甲山物語』の資料を六甲山の百科事典のように使っている貴重な財産。ウェブでの無料公開で素晴らしい財産を使えるようにしたい。
- * 中井: セミナーはこれで最後かもしれませんが、「六甲山発郷土誌」だけでなく、132回の情報・経験を活かして、次の新しい事に挑戦してもらいたい。



事務局

台風前の雨天にもかかわらず、42名の方が参加されて、最終回が盛り上がりました。これまで実に多くの方のご協力で132回の市民セミナーを完遂できました。15年で培ったものを多くの方に広めるという次の課題は相当手強いですが、リ・スタートします。

◆参考・配布資料など

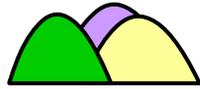
- ・PPT: 「六甲山発郷土誌づくりの歩み」
- ・配付資料: 「六甲山発郷土誌」マップ、『こうべからのメッセージ2』、『ブチ・シンポジウム報告書』1・2・3。記事掲載紙/毎日新聞、神戸新聞。
- ・参考資料: 『六甲山物語1・2・3・4』、他。

堂馬 英二: どうま えいじ
六甲山を活用する会 代表幹事
〒657-0028 神戸市灘区森後町 2-3-7
TEL: 050-3743-9897 FAX: 078-856-6616
E-mail: info@rokkosan-katsuyo.com
http://rokkosan-katsuyo.com

◆参加者の声:

- ・市民セミナーに出講したのが活動の原点になっています。
- ・六甲山発郷土誌は残していくべき大切な資料です。
- ・年に一度くらいは「市民セミナー」を開催してください。

◆参加者: 42名 (50音順・敬称略)、ゴシック: 静大山岳会 天野 征一郎 伊谷 正弘 井上 幸雄 大上 卓男 岡 敏明 岡谷 恒雄・園子 金原 淳一 神谷 知彌 川部 忠夫 喜多 茂 北嶋 治夫 木下 健二 熊谷 正一 黒田 郁子 小谷 寛和 沢村 勝義 下田 ゆみ子 高橋 明子 高橋 貞美 田中正視・敬子 田中 弘子 玉井 誠 堂馬 英二 徳見 健一 中井 龍司 中尾 啓子 中務 勝子 愛徳 篤・陽子 福永 一登 藤原 義則 前田 康男 眞苺 保 松岡 達郎 三木 柚香 八木 浄 柳田千恵子 山端謙一郎・和子 米田 佐江子



2. 六甲山を辿る ～六甲山の歴史と文化～

① 六甲山の茶屋群をみんなの文化財に P 21～23



小代 薫 こしろ かおる
建築家

第121回市民セミナー講演
2015年4月18日

③海文堂、震災、そして陳舜臣さん +野坂昭如さん P 27～29



平野 義昌 ひらの よしまさ
ミニコミ誌 執筆者

第128回市民セミナー講演
2016年10月15日

②文化遺産としての六甲山ホテル旧館 P 24～26



笠原 一人 かさはら かずと
京都工芸繊維大学
助教

第126回市民セミナー講演
2016年6月18日

④六甲山開発史 バージョン2 P 30～32



森地 一夫 もりち かずお
日本ボート外兵庫連盟
県連盟コミッショナー

第131回市民セミナー講演
2017年8月19日

『六甲山物語5』の第2段は「2. 六甲山を辿る」で、六甲山の歴史や文化にちなむ4話を集めています。

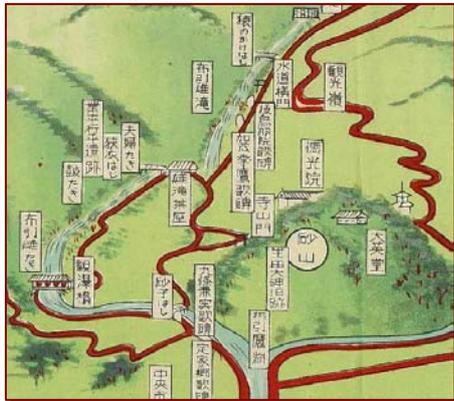
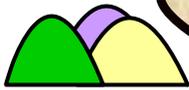
建築家の小代 薫さんは、明治時代の布引遊園地開発や近代公園誕生について博士論文を執筆されています。明治期の神戸で行われた市民主導のまちづくりの様子や、六甲山の茶屋の保存と活用への取り組みをご紹介します。

京都工芸繊維大学の笠原 一人さんは建築史の専門家で、昨年閉鎖された六甲山ホテル旧館の保存を提起されています。この建物の歴史背景や設計者、文化歴史価値について解説していただきます。

ミニコミ誌執筆者の平野 義昌さんは、元町で存在感のあった海文堂に書店員として勤めておられました。阪神大震災後に廃業することになって多くの市民に惜しまれました。神戸の作家にちなむ話題も併せてご紹介いただきます。

森地 一夫さんは六甲山の現代史に詳しく、10年前の第31回市民セミナーにご登場いただきました。このたびは最終年度を記念して、「六甲山開発史バージョン2」をお願いしました。あまり知られていない戦前～戦後の経緯をご紹介します。

ここでは、六甲山と神戸の明治～現代の印象的な出来事や経緯に目を開かれることを期待しています。



布引史跡案内略図（部分）

第121回テーマ 六甲山の茶屋群をみんなの 文化財に

- 明治の市民まちづくりはどんな
だったのか
- 布引遊園地開発と近代公園
誕生の秘話
- 布引雄滝茶屋の100年と
今後の取り組み

実施日：平成27年4月18日（土）
午前10時～15時00分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：小代 薫さんプロフィール
1977(昭52)年生まれ、37歳、芦屋・伊丹・神戸市育ち。2005年神戸大学工学部建設学科卒業、13年神戸大学大学院工学研究科単位取得退学。14年に博士論文「神戸開港場における内外人住民の自治活動と近代都市環境の形成に関する研究」提出。博士(工学)。研究分野は建築史・都市史。同2014年より企画・設計活動も開始し現在に至る。

午前中は「森と歴史の散歩道」を散策

朝の気温は16℃、小代さんなど8名で、「散歩道」を散策しました。まちっ子の森で景観整備や花芽の成長状況を観察し、山道の整備状況も確認しました。午後のセミナーには14名が参加しました。



陽春の自然散策

「市民が主導するまちづくり」の歴史研究家

2月の行政主催の森林整備に関するフォーラムで、博士論文をいただいたのがご縁です。小代さんは建築学科で建築の歴史や都市の歴史を研究し、昨年博士号を取得され、大学の研究職の求職活動もされています。「六甲山の茶屋」と「明治の市民まちづくり」の言葉に惹かれて、講演をお願いし、素人向きに話していただく注文もしました。

六甲山の茶屋の保護と再活用を目指す

冒頭で、「文化財を学者が率先して選定するだけでなく、地域の住民が日常生活からなくなって欲しくない歴史的なものをみなで守ることが大事だ」と言われました。

講演の話題の一つ目は明治期の神戸で行われていた「市民まちづくりの様子」、二つ目は新神戸駅北側の布引遊園地の開発が日本の近代公園の誕生につながったこと、三つ目は、布引茶屋で取り組まれている事例紹介です。

まず、150年前の神戸開港時の居留地と外国人の様子の基本情報です。雑居地は日本一広く、居住する者が多いなど、神戸で外国人の主体的な都市整備活動が可能になった背景を説明されました。



東遊園地公園 1910年代

神戸では居留地外国人が自治機関を長期にわたって運営し、公共施設用地を次々と借用していきました。中でも、東遊園地の整備は、外国人が明治政府との交渉を続けたという意義深い活動でした。

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

同じ頃に日本人が主導した公共公園の整備として、布引遊園地の経緯が紹介されました。神戸港の名主らが「花園社中」を設立し、「公遊花園ノ地」（公園）として官林の下げ渡しを受け、私設公園として開園しました。これに関わった兵庫県知事の神田孝平の発想が近代公園制度の原点になっていると述べられました。神戸では、住民の都市整備への積極的な関与が大きな役割を果たし、東京や横浜と違った形で日本の近代化に貢献したと結論づけられました。

次は研究成果を踏まえて取り組まれている、布引雄滝（おんたき）茶屋に関わる活動です。100周年記念会に合わせて、建物の調査図面を取ったこと、そして建物の変遷についても解説されました。そして改修計画を作って、出資者を集めている現状を紹介されました。その後、参加者と気の置けない意見交換をしました。

市民が地域の環境や生活文化を復活する

歴史研究を背景に詳しく話されたので、神戸の住民が「市民まちづくり」を主導した様子を知りました。近代公園制度の原点になっていることに、神戸の先進性も感じました。市民の自治活動で「茶屋の保存・復活」に取り組まれるのは、将来につながる大きな構想だと期待しています。

※詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 中尾 啓子さん

布引雄滝茶屋に興味があり参加しました。午前は、まちっ子の森を中心に快適な森林浴を楽しみました。アセビを切り開いた区画が暖かい日が差し込み、散歩道でタチツボスミレなどの野草を目にしました。午後は、外国人中心の居留地の町づくりなど、かなり学問的な説明をしていただきました。雄滝茶屋の保存について、出資者を募るなど興味あるご提案があり、もう少し詳細を知りたくなりました。



【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、
コープこうべ環境基金、自然保護ボランティアファンド、
セブンイレブン記念財団



第121回テーマ：六甲山の茶屋群をみんなの文化財に



第121回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. あいさつ：10:00~10:10
2. 自然体験：10:10~12:00
3. 講演：13:00~14:30
4. 意見交換：14:40~15:00

- 明治の市民まちづくりはどんなだったのか
- 布引遊園地開発と近代公園誕生の秘話
- 布引雄滝茶屋の100年と今後の取り組み



少人数でも熱心な参加者

講演の経緯（小代 薫さん）

■「みんなの」をキーワードにお話します

明治期の神戸をフィールドにして、市民が主導するまちづくりの歴史を研究してきました。歴史を踏まえた地域づくりのための建築コンサルタントのような活動を行っています。

存続の危機にある六甲山のお茶屋の保護と再活用を目指しています。



小代さん

講演内容

1. 明治期の神戸の「市民まちづくり」

■「市民まちづくり」は150年の歴史

「市民まちづくり」とは最近の造語で、住民が主導する住環境や生活環境の整備を指す。神戸では、明治期の居留地の外国人や日本の民間企業が行った都市整備の中に同様の現象が見られる。神戸の市民まちづくりの歴史は、全国でも最も長く、約150年の歴史がある。

●居留外国人が都市整備を主導：1868年の開港の頃、横浜では、主に政府主導で居留地の整備が行われた。神戸では、居留地外国人の自治権が認められたことや、日本人と外国人が混ざって居住する雑居地を持ったなど、一般の居留地外国人が都市整備を主導する先進的な試みが行われた。

●居留地と雑居地の面積は日本一：居留地は外国人専用、雑居地は内外人が雑居。日本人住民との家屋・土地の借用も認められた。神戸雑居地は、755,903平方メートルで日本一の広がりがあった。



●居留地会議が中心となって都市整備事業：外国人の自治機関として「居留地会議」があった。神戸では居留地返還まで33年間、良好に維持された。外国政府の代表者である領事と住民の代表者が一つのテーブルを囲んだのは、当時世界に例がないといわれた。居留地整備資金を自由に採配し、提案から決定まで行った。

■居留地外国人の東遊園地の整備

1872年4月にスポーツクラブのメンバーらが、東遊園地を自費で整備する許可を居留地会議に求めた。日本側の制止に対して、4か国の領事から東遊園地用地の引き渡し要請が外務省に送られた。相当の地代を取ることを条件に貸与が許可された。さらに無償での貸与と管理運営の権限を求めた交渉が3年近く続けられた。

●自治活動による居留地整備：整備費用の不足分を募金でまかなった。公共の道路の上に、私的なクラブによる

陸上施設が計画された。公共とプライベートな部分が一体になった、現代から見ても興味深い計画だった。

2. 布引遊園地開発と近代公園誕生の秘話

■布引遊園地

外国人との間で東遊園地の交渉が行われているとき、日本人においても住民が主導する形で公共公園の整備が行われていた。

●「花園社中」を設立：1871年、神戸港の名主らが、その景勝地に神戸の住民のための神社を造営したいと兵庫県に願い出た。自然環境を求めて進出を目論む外国人が問題となっていたので、この提案が受け入れられた。神戸港名主らは、民間企業「花園社中」を設立し、行楽地の整備を行った。

●「公遊花園ノ地」から「公園」：兵庫県知事神田孝平は、花園社中から要請された官林を「公遊花園ノ地」（公園）とし、無償に近い価格で払い下げ渡すよう大蔵省に要請し、許可された。そして、私設公園として開園することになった。

公園という概念がない中で、住民らが景勝地に対して、神社の造営を求め、周囲の境内地を行楽地とするスタイルは、信心半分遊山半分といった日本の旧来の習慣と地続きで、興味深い。



布引遊園地 1890年

●県知事神田孝平の発想が原点：神田は、この地を公園という租税地とすることを大蔵省に提案して許可されている。神田の、この読み替えの発想こそが、日本の近代公園制度の原点であったと考える。

■内外2公園の制度化と日本の近代公園制度

雑居地における東遊園地園と、布引遊園地の制度化と日本の近代公園制度の成立時期は、ちょうど重なっている。日本の近代公園制度は、1873年に明治政府の太政官より布告された。これにより全国主要都市にある日本古来の景勝地や寺社境内地、城址などの遺構が公園と読み替えられ、多くの緑地が保護され、有効活用された。

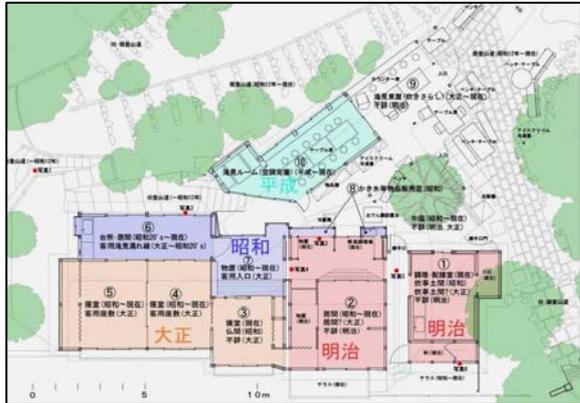
●神戸雑居地の居留外国人が公共施設を整備：神戸雑居地では一般の居留外国人たちが、各種クラブやメディアを通じて、公共の施設の整備を進めた実態があった。

●日本古来の遊樂の場が近代公園制度として継承：自治行動は神戸の日本人の間でも見られた。彼らが求めた日本古来の遊樂の場は、外国人から影響を受けた神田孝平による読み替えを経て、明治政府によって日本の近代公園制度として継承されることになった。

3. 布引雄滝茶屋の100年と今後の取組

■布引雄滝茶屋の100年

雄滝茶屋は昨年創業100周年を迎えた。「布引の滝に感謝する会」が編集した記念誌に原稿を書いたのがきっかけで、建物の調査図面を取ってパネルにした。



●明治期：布引遊園地は明治初年に物見遊山の和風行楽地として開園。明治7年の錦絵に様子が現れている。桜梅が植樹され茶屋が複数確認できる。雄滝茶屋は明治末に営業を始めたそうで、今となつてはこの当時の行楽と建築の様式を伝える現存唯一の茶屋だといえる。

●大正期：石垣を築き柱を建て地面から高く上がった所に座敷と濡れ縁を作る建築形式。滝や周囲の自然とともに、しっかりした飲食も楽しめる施設であった。

●昭和期：客用座敷がなくなり、濡れ縁が室内化し、ハイキング向けの軽食が中心になった。時期的には六甲山山上地区の大規模レジャー施設の盛況やハイキングが流行しだした頃。物見遊山の茶屋から近代登山の休憩所としての用途変容が見られる。

●平成期：空調完備の部屋ができた。物見遊山の茶屋から続く伝統的な屋内飲食施設の再来で興味深い。

■雄滝茶屋の保存活動

100年の風格を表現する建物を、このまま腐らせるのはもったいない。文化財としてきれいにし直す提案をした。たたかれ役の役回りだが、皆さんの文化財一号ができてつある感触を得ている。

●改修計画のポイント：外観を変えない、本来の用途にできるだけ戻す。大正時代の縁側をお客さんに開放して、改修費用を捻出するための収益部門を作った。50～100名限定の会員専用スペースにして、年額5万円程度

の利用料を頂く。資金援助する篤志家が共同利用できる別荘のように使えるようにすることを考えた。

●出資者による公益活動：利用料5万円の使い道は、公益活動という枠の中で出資者の自由な提案と決定に任せる。出資者が主体的に公益活動を行えるしくみづくりも行う計画である。

意見交換

◆岡：雄滝茶屋は立派、古いのですか？

●小代：今残っている建物は明治末の築。しかし明治初年にはすでにこの場所に茶屋があったのではと考えている。

◆松岡：博士論文の近代公園制度で新説とされたのは？

●小代：近代公園の父は井上大蔵大臣がだといわれるが、背景には神田県令の読み替えがあったこと。

◆兼貞：お茶屋さんじゃなく、「六甲山の茶店」の話だと思って来た。(茶屋と茶店の違いが話題)

●小代：六甲山には両方ある。比較的しっかりした料理を出す物見遊山のお茶屋さんから始まり、ハイカー相手の茶店へと移行していく。京都のお茶屋さんとも峠の茶店とも、アルプスの山小屋とも違う。どこにもない独自のものになっている。

◆松岡：「雄滝茶屋に感謝する会」の保存活動なのか？

●小代：僕が独立してやっている。会には協力を求める。

小代さんのまとめ

こういう場でお話しできたことが僕にとっては大きな一歩です。これからもこういう活動をいろんな所で、いろんな方としていきたいと思っています。何でもいのでご協力いただければありがたいです。お茶屋さんにちよくちよく行くとか、そんな所から大きなものに広がっていけばいい、そんな風に考えています。

事務局から

かつて山上には500mごとに茶店があった。山麓には毎日登山の伝統が生きており、茶屋も残っている。モータリゼーションの普及もあって、「歩く文化」を支えてきたものが根こそぎ変質している。

一般に、古いものを保存・復活するより、新しいものを作る方がずっと早いので、そちらに走りやすい。小代さんが復活しようとするエネルギーは貴重だ。



現在の布引茶屋

◆参考・配布資料など

- ・パワーポイント：レジュメ：「六甲山の茶屋群をみんなの文化財に」
- ・資料：布引雄滝茶屋100年の軌跡—六甲山行楽の歴史を伝える文化財として—
- ・アンケート：「これから何する？」

小代 薫：こしろ かおる

小代薫建築研究室 代表

〒657-0013 神戸市灘区六甲台町6-22-301

Tel/Fax:078-777-5051 携帯:090-7762-6226

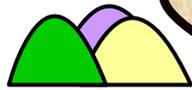
Email: office@koshiroarch.com

◆参加者の声

- ・これからの六甲山の茶屋文化を考えるにあたって、とても参考になりました。
- ・専門的なお話もあり、六甲山の活用、布引雄滝茶屋の保存について興味あるお話がきけて良かった。
- ・植物に詳しい方、楽しい方がいて良かった。
- ・四季を通じて楽しめる散策コースだと思います。

◆参加者：14名(50音順・敬称略)

井指 俊雄 泉 美代子 岡 敏明 岡谷 恒雄
兼貞 力 鎌本 暁 小代 薫 高松 千秋
徳見 健一 堂馬 英二 中尾 啓子 福永 一登
松岡 達郎 村上 定広



第126回テーマ 文化遺産としての 六甲山ホテル旧館

- 建物の歴史と背景
- 建物のデザイン上の特徴
- 設計者古塚 正治のこと



六甲山ホテル旧館正面

実施日：平成28年6月18日（土）
午前10時～15時00分
場 所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：笠原 一人さんプロフィール
1970年（昭45）、灘区出身・在住。
1998年京都工芸繊維大学大学院博士
課程修了。2010-11年オランダ・デル
フト工科大学客員研究員。近代建築
史・建築保存再生論専攻。日本建築学
会近畿支部近代建築部会主査。
DOCOMOMO Japan 幹事。住宅遺産トラ
スト関西理事。

六甲山ホテル旧館の外観を見学した

午前の記念碑台は20℃で晴れ、
行楽日和です。15名が環境整備
でササ刈り。17名は散歩道を回
遊し、六甲山ホテルの旧館を訪れ
ました。外観を観察し、六甲山事
情に詳しい森地 一夫氏から、写
真パネルで解説いただきました。
午後は43名が参加しました



森地さんから解説

宝塚ホテル・六甲山ホテル旧館の保存を提言

今年の2月に新聞紙上で、日本
建築学会近畿支部が六甲山ホテル
旧館の保存の要望書を阪急・阪神
ホールディングスや神戸市などに
出されていることを知りました。
早速、建築学会の事務局に講師
派遣をお問い合わせし、中心人物の
笠原さんをご紹介いただきました。
笠原さんは建築史の研究者で、
地元の灘区にお住まいです。建築
遺産の保存・維持に、力を注いで
おられます。今回は、六甲山ホテル
旧館の素晴らしさに脚光を当て
たお話をお願いしました。



保存の要望が大きく報道された

地域遺産を見直して保存することを啓発された

笠原さんは宝塚ホテルや六甲山ホテル旧館の保存を提起さ
れています。午後の講演は「文化遺産としての六甲山ホテル
旧館」をテーマに、体系的にお話いただきました。まず、昭
和初期の六甲山をめぐる阪急と阪神の争いを紐解いて説明さ
れました。六甲山ホテルの建設、ケーブルやロープウェイ、
山上道路の開発、六甲山開発の勢いと熱気が伝わりました。
続いて、六甲山ホテルの建築的特徴を詳しく説明されまし
た。スイスやドイツなどヨーロッパの山岳地帯に見られる伝
統的な建物の様式に基づいて、時代の流行のデザインも取り
入れていること。専門家の目から見た外観や内装の特徴など
を写真で詳しく解説されました。

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

旧館を設計した古塚 正治は阪
神電鉄勤務後、早稲田大学に入り、
宮内省勤務という経歴を持つ、阪
神間で活躍した優れた建築家で、
宝塚ホテル本館など数々の名建築
を残しました。

1929年建設の六甲山ホテルは山
小屋風のホテルの先駆で、同時代
の上高地ホテルや雲仙観光ホテルに先立った存在でした。古
塚 正治はホテル論で、六甲山ホテルを「遊興地及び季節を
主とするもの」で、大衆の利用の必要も説いています。

六甲山ホテルは、山小屋風ホテルの先駆けとなるデザイン
の大半が現存し、古塚 正治の数少ない現存作品で、阪神間
モダニズムの象徴となる貴重な建物です。問題の保存活用に
ついては、改修して耐震性を向上させることは十分可能なの
で、所有者の保存意欲を期待して終わりました。

人工の美を生かす文化を大切にしたい

六甲山ホテル旧館に注目して、建築物そのものの魅力はも
とより、建築の時代背景や建築家のビジョンが表現されてい
ることを学んだ。名建築を評価して維持活用するには、それ
を支える地域文化や愛着を持つ人々の存在が鍵になります。
今あるものを大切に生かすことに尽力したいものです。

※詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 李谷さん

建築設計を業とする私は、素晴らしい近代建築群が取り壊されている現状
を憂えておりました。笠原先生は長きにわたり近代建築史を研究されており、
村野藤吾氏の研究では、日本を代表する研究者の一人と言っても過言ではあ
りません。本セミナーでは六甲山ホテル旧館を保存する
意義を改めて認識できました。そして貴会やボランティア
の方々の熱い思い、六甲山を愛する地域の皆様の笑顔
に出会う事ができ、心が豊かになった一日でした。

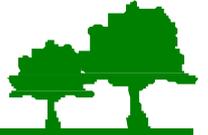


【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、
コープこうべ環境基金、セブンイレブン記念財団



第126回テーマ：文化遺産としての六甲山ホテル旧館



第126回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験：10:00~12:10
2. 講演：13:00~14:10
3. 休憩：14:10~14:40
4. 意見交換：14:40~15:00

- 建物の歴史と背景
- 建物のデザイン上の特徴
- 設計者古塚 正治のこと

六甲山ホテル旧館前で→



講演のあいさつ（笠原 一人さん）

今年初めに、阪急・阪神ホールディングス、阪急・阪神ホテルズに見解文を届け保存活用をお願いしてきた。

六甲山ホテルは由緒のある歴史的な建物です。日頃使っている皆さんはすごい建物だと思っておられないが、非常にユニークで特徴のある、歴史的価値、文化的価値がある。改めて、六甲山ホテル旧館を文化遺産として見ましょう。



笠原さん

1. 建物の歴史と背景

■六甲山ホテル旧館

今日の六甲山ホテルです。当時のものと姿が変わっている。くっきりとした表情、外観、構造的には変わらない。正面のこの辺りは全く変わらないけど、下には御影石が乗っていて、壁面にベランダが付いていた、ハーフチンバーという木が露出している所だ。1階の木が積み上げられているデザインになっている。今と較べると、屋根が斜めにカットされている。当時は切妻で、現在も向こう側の切妻はそのまま残っている。こちらは改変されている。



上：現在の旧館、下：竣工時

竣工当時そのままではないけど、骨格、全体の中心的なデザイン、そして内部（今は見えないけど）はよく残っている。六甲山ホテルとしての建物の価値があるし維持されているといつてよい。

■六甲山ホテル旧館の経緯

1929年、昭和4年に竣工した。古塚 正治（ふるつか まさはる）という建築家が設計した。鉄骨鉄筋コンクリートおよび木造。基礎の地下1階、柱も鉄骨・鉄筋と思われる。それ以外は木造。

1926年、宝塚ホテルが地元の平塚嘉右衛門という事業家と阪急電鉄が共同出資（半分ずつ）で建てられた。六甲山ホテルは宝塚ホテルの別館でやはり共同出資で、初代社長は平塚氏。宝塚ホテルも解体の危機にあり、保存運動が高まっている（新聞記事）。六甲山ホテルは2007年に近代化産業遺産に指定された。2015年12月末に耐震性能の低さと老朽化を理由に旧館が閉鎖された。

■六甲山開発をめぐる阪急と阪神の争い

明治以降、グルームなど外国人が開発したことはよく知られている。1920年代、30年代、そして戦後は外国人に代わって、阪神・阪急がしのぎを削って開発した。最初は1905年の阪神倶楽部、食堂のような小さなものを作った、道路もない頃だ。20年代頃に動きがあり摩耶山にケーブルができた。六甲山には何もなかった。

1925年に阪急が六甲阪急倶楽部・阪急食堂を開設した。1927年には阪神が六甲山上の土地250haを買収した。そして、1929年の六甲山ホテル開設になる。1931年に六甲ロープウェイ（阪急）、1932年に六甲ケーブル（阪神）と開発ラッシュが続いた。



1929年の六甲山ホテル竣工当時の全貌

2. 建物のデザイン上の特徴

■1930年代の山小屋風ホテルの先駆け

当時は山岳の観光化はスイスをモデルにしていた。

建物の細部を見てみたい。これは正面、細部は凝ったデザインになっている。屋根を支えている腕木のようなもの（持ち送り）、ヨーロッパで軒下を飾る時に使うもので、そのデザインを取り入れている。

壁面、歪んでいるようなのもデザイン、軒裏も凝ったデザイン。玄関部分は当時の最先端のデザイン、荒々しく、柱もすぼんでいる、上に向かって開いていく力強いデザイン。ドイツで流行していた表現主義（荒々しい）を参照しただろう。

六甲山ホテルの玄関部分は表現主義で、世界はすでにモダニズムに向かっているので少し古風だ。裏面にはハーフチンバーが残っていて、凝ったデザインが見られる。



正面玄関

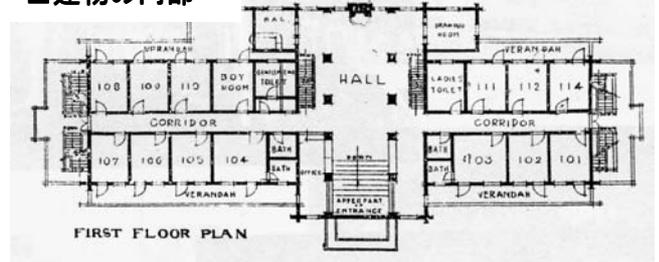


ベランダ



壁面

■建物の内部



平面図を見る。1階ロビーにアーチがある、アーチはヨーロッパ建築の象徴。太い梁で力強くみせている。自然に近い荒々しいデザイン。スクラッチタイル（焼く前にひっかく）を貼って荒々しく見せている。



1階のロビー

階段の手すりこに細かくデザインがあった、戦後やりかえられたようだ。

2階のビリヤード室（24 ページ写真）は、天井にトップライト、倶楽部のような空間がある。モダンな部分が随所に取り入れられて豪華な空間になっている。

地下にはダイニンググループ、キッチンがあった。おそらく鉄筋。現在、当時の特徴が残っている。

■山小屋ホテルの系譜

山小屋風のホテルは1930年代になって続々と全国に現れている。ところが六甲山ホテルはその直前で1929年に造られ、先駆けとなっていると言える。山小屋風というか、ハーフチンバーのホテルというのは、その前にトアロードのてっぺんに建っていたトアホテルのデザインにも採用されている。これは大邸宅風といった方がいい。そういう面からいうと、六甲山ホテルは正当な、スイスなどで見られる山小屋風の容貌をした、こじんまりした、まさに山岳に建っているのが相応しいようだ。わかる範囲では一番早い事例だ。

その後、山小屋風の雰囲気の上高地ホテル、雲仙観光ホテルも同じような感じ、軽井沢の万平ホテル。阪急六甲に建っていた、ホテル六甲ハウスも山小屋風だった。



上高地ホテル

3. 設計者古塚 正治のこと

■古塚 正治の経歴と特徴

古塚 正治は西宮・阪神間を拠点にして活躍した建築家。兵庫工業高校卒、阪神電鉄に入社、一念発起して早稲田大学に入っている。村野藤吾という有名な建築家と似た経歴を持っている。

そして、優秀でないと入れない宮内省の匠寮に勤務した。皇族関係の住宅とか建築物を造る所で、よっぽど腕が良くないと就職できない。そんなところで腕を磨いた。皇族の建築の特徴というのはモダニズムではダメで、様式的な伝統的なものをアレンジし、そこに少し新

しいデザインを取り入れながら、デザインしていくのが当時の宮内省のデザイン。そういうところで訓練してきたからこそ、さっきの六甲山ホテルのようなものが建てられたのではないかと。

そこから西宮の方に帰ってきて、八馬汽船という、銀行とか西宮酒造とかを運営していた方の建築顧問として就任した。西宮に建築事務所を開業して戦後まで活躍した。特徴としては、地元でいた、阪神間にいたということ。今でこそ建築家は山のようにいる。阪神間だけでも何百人という。当時はまだ数えるほどだった。

彼の代表作の一つが宝塚ホテル。かつての宝塚市の市長さんの正司邸、多聞ビルディングという八馬汽船の本社ビルだったところは今も西宮に残っている。西宮市庁舎、西宮市立図書館、そして六甲山ホテルがあって、尼崎信用組合本店など、山のように作品を造っていた。戦前だけでも100~200という単位の作品群だったが、どんどん消えて少なくなっている。

■古塚正治のホテル論

六甲山ホテルが建った頃からホテルが大衆化していった。それまではオリエンタルホテルなど高級ホテルがたくさん建っていた。1929年を境にして大衆化していく。彼は「大衆化しないとダメだ」と言っている。アメリカのように大衆化しないと、採算的に難しい、そういう考えの延長で六甲山ホテルも造っている。

彼によると、ホテルは4つの種類がある。1. 豪華なもの、2. ビジネスホテルのようなもの、3. 月決め、4. 季節もの。六甲山はシーズンホテル、もともと夏の2ヶ月だけオープンしていた。六甲山ホテルは、季節を狙ったものと位置づけしていた。

まとめ（笠原さん）

閉鎖された六甲オリエンタルホテルと並んで、六甲山を代表するホテル。1920年代から30年代の阪神間モダニズムと呼ばれる、この辺の文化の象徴となる建物です。現在、閉鎖されて保存が危ぶまれています。いくらでも改修して耐震性を向上させられる。耐震補強してリニューアルオープンしてほしいという願いを込めて、この重要性についてお話しておきます。

事務局

六甲山ホテルが、六甲山周辺地域の歴史と建築の転換期にできた文化遺産だという理解が深まりました。このテーマに多くの人が集まって意見交換でき、地域文化を大切に作る気運を高める貴重な機会になりました。

◆参考・配布資料など

- ・パワーポイント：「文化遺産としての六甲山ホテル旧館」
- ・参考資料：「六甲山ホテル旧館の建物の保存活用に関する要望書」／「六甲山ホテル旧館の建物についての見解」
- ・新聞記事：朝日2016. 2. 21/5. 28、産経2016. 6. 1
- ・岡本の洋館 内覧会・チラシ/住宅遺産トラスト関西
- ・大阪の建築150年・チラシ/Club Tap

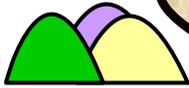
笠原 一人：かさはら かずと
京都工芸繊維大学 助教
〒657-0015
神戸市灘区篠原伯母野山町2丁目2-1-109
電話：078-882-4949 FAX：同左
e-mail：kasahara@kit.ac.jp

◆参加者の声

- ・六甲山ホテルについて詳しく教えていただき感心しました。
- ・どんな方法でもいいので保存していただきたいです。
- ・今日は六甲山の歴史の話も聞き、有意義な散策ができた。
- ・六甲山が別荘地として開発された歴史を詳しく知りました。六甲山ホテルも何らかの形で保存されることを願います。

◆参加者：43名（50音順・敬称略）

天野 征一郎 池田 淳八 夫妻 泉 美代子 伊谷 幸子
伊谷正弘 井上 幸雄 井上由美子 今北 龍雄 大出 孝子
岡 敏明 岡谷 恒雄 笠原 一人 川部 忠夫 北村 明美
黒田美恵子 堺 令子 柴田 昭彦 嶋崎 勝男 鈴木 紀生
竹内 和美 武内 宏 竹野 智明 多田 葉子 徳見 憲一
堂馬 英二 中井 憲子 中尾 啓子 中尾 嘉孝 奈島 伴治
難波美智子 濱邊 定子 福島 静代 前田 道子 眞崎 光
松井 ** 三輪 孝子 村上 定広 奈谷 真一 森地 一夫
柳田 千恵子 山下 博邦 吉井 文子



六甲山魅力再発見市民セミナー

市民セミナーVol. 128
海文堂、震災、そして陳舜臣さん / 平野 義昌
2016年10月発行

第128回テーマ 海文堂、震災、そして 陳舜臣さん+野坂昭如さん

- 海文堂書店について
- 陳舜臣
- 野坂昭如と六甲界限
- 陳舜臣・野坂昭如比較神戸考

実施日：平成28年10月15日（土）
午前10時～15時00分
場 所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：平野 義昌さんプロフィール
1953年（昭28）神戸市中央区生まれ・在住、62歳。1976年関西学院大学法学部卒。コーベックス、三宮ブックスを経て、2003年海文堂書店入社。人文書を担当し、13年海文堂廃業後もパート仕事の傍ら、ミニコミなどに執筆を続ける。著書に『本屋の目』（みずのわ出版）、『海の本屋のはなし—海文堂書店の記憶と記録』（苦楽堂）がある。



海文堂閉店の賑わい

秋晴れの活動

秋晴れの行楽日で、午前中の自然散策にはほぼ全員が参加しました。8名は散歩道の沿道のササ刈りに精を出し、10名（写真）は森と歴史の散歩道を楽しみました。午後の講演に19名が出席しました。



『六甲山物語』の店頭販売でお世話になった

平野さんとは10年以上前、海文堂に新刊の『六甲山物語』の店頭販売をお願いしたのがご縁でした。当時のご担当で、わざわざ六甲山コーナーを設けていただき恐縮しました。

そして今年の年頭、ミニコミ誌『ほんまに』17号に陳舜臣さん追悼の特集号を発行されたという新聞記事を眼にしました。陳舜臣さんはこの市民セミナーの講師にお招きしたいと念願していたお一人で、昨年末にお亡くなりになって、目論見はついに実現できませんでした。

このような事情から平野さんをお招きしました。直前には野坂さんの話もテーマに加えていただきました。

海文堂の話題から「神戸考」へとつながった

冒頭で100年におよぶ海文堂の歴史を紐解き、創業・再建・文化活動・震災・閉店の節目や経緯、書店のライフヒストリーといえる解説をされました。

馬券売り場建設運動に端を発し、地域の文化活動支援や陳舜臣さんとの出会いがありました。震災後に文化活動支援に注力し、それまで培った人間関係のネットワークを生かして、企業メセナ協会・メセナ奨励賞を受賞しました。地方の書店のユニークな活動が全国的に評価されたのです。

創立99年で閉店し、予想外の盛大な閉店行事になり、翌年には「99+1」という100年イベントが催されました。その後も平野さんたちが、ミニコミ誌『ほんまに』や、『海の本屋のはなし』の出版や著述活動などを続けています。

続いて、陳舜臣さんのお話です。震災後に神戸新聞に寄稿された「神戸よ」のメッセージに感激され、神戸出身の大作家が忘れられた存在になって



99+1記念誌

いるのに不満を感じて、『ほんまに』17号で陳舜臣追悼集を出版したと思いを語られました。陳さんが日本国籍の台湾人で民族差別に翻弄されたこと、著作の風景描写から神戸在住の作家としての地域への関心などを紹介されました。

新刊の『ほんまに』18号は神戸の空襲と作家たちの特集で、その中から野坂昭如さんの紹介です。「闇市焼け跡派」を自称し、多彩な活動を続けた野坂さんが、六甲界限で複雑な家庭で暮らしたことなどを説明されました。

終盤は陳舜臣さんと野坂昭如さんを対比し、神戸との関わりや神戸を抱く原風景を解説され、「命について平和について大仰に語るのではなく、体験からメッセージを出している」と共通点を述べられました。

「小さな歴史を大切に」は心に響く

平野さんは、「小さな歴史を大切に」と結びられました。『海の本屋のはなし』のあとがきに、福岡店長がお客さんから評価されたことを、「神戸という地域に根ざした姿勢。本屋を拠点としたさまざまな文化発信のありよう。偉ぶらず、本を求める人たちにできる限りオープンに扉を開けていたこと。本を媒介として極力お客様と対話を重ねようと務めてきたこと。儲けにならないバカなことも多々敢行してきたこと」の5つを挙げています。そのような実践がよくわかります。小さな歴史に目を向けることを大切にしたいですね。

※詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 木村明恵さん

今回が2回目の参加ですが、前回とはまったく異なる内容で、多方面からのアプローチを試みられていると拝察いたします。2013年廃業された元町の有名店・海文堂でご勤務されていた平野義昌さんの、本を通じたさまざまな関わり、神戸という地の奥の深さを感じました。海と山に囲まれた風光明媚な地。人と人との関わりも同じく明るく、その中から生まれる可能性を感じ、心温まるひと時となりました。



主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、
コープこうべ環境基金、セブン-イレブン記念財団、
GGG国立・国定公園支援事業



第128回テーマ：海文堂、震災、そして 陳舜臣さん+野坂昭如さん



第128回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験：10:00~12:10
2. 講演：13:00~14:20
3. 休憩：14:20~14:30
4. 意見交換：14:30~15:00

●海文堂書店について

●陳舜臣

●野坂昭如と六甲界限

●陳舜臣・野坂昭如比較神戸考



自然保護センター・レクチャールーム

講演のあいさつ（平野 義昌さん）

海文堂が2013年に閉店後は主夫とパート仕事、余暇は本の紹介などを書いています。ミニコミ『ほんまに』に陳舜臣さん追悼特集を出版したことから今回のセミナーに呼ばれました。陳さんの「六甲山房」が六甲山系にあるという細かい関係で、ややこじつけです。ついでに、『ほんまに』最新号で神戸空襲と小説を特集したので、灘区六甲道周辺で少年時代を過ごした野坂昭如も加えてお話しします。



平野さん

1. 海文堂について

■大正3年設立の海の本屋

元町商店街3丁目で長らく「海の本専門店」としてご愛顧をいただいた。70年代中頃までは専門書中心の品揃えだったが、島田誠社長就任で総合書店になり、画廊を併設。小林良宣が入社し中心的存在になると、「海事書」に加えて、地元の本・著者を大切にする、人文書・文芸書・児童書に力点を置くという「海文堂」の基礎が固められた。福岡店長時代はイベントと古本販売に力を入れ、神戸の本屋の代表的存在（売り上げではなく）として評価を受けた。（海文堂の歴史の一端を紹介）

1914（大正3）：賀集喜一郎が海事図書出版・販売「賀集書店」を創業。

1930（昭和5）：岡田一雄入社、経営を立て直す。

1945（昭和20）：3月空襲で店舗焼失。

1973（昭和48）：岡田一雄死去、書店は島田誠が継承。

1984（昭和59）：阪神元町駅ビル馬券売り場建設反対運動。陳舜臣も参加。

1995（平成7）：1.17 阪神淡路大震災、「アート・エイド・神戸」立ち上げ。

1996（平成8）：海文堂、メセナ奨励賞受賞。

2000（平成12）：小林店長退職、福岡新店長、島田社長退任。

2013（平成25）：8.5 従業員に閉店発表、9.30 閉店。

■震災後の文化活動支援も特色

阪神淡路大震災での被害は軽微で8日目には営業再開でき、海文堂が次のようなことを行った。

●営業再開することで街に「明るい灯火を掲げる」：出勤可能な従業員は避難所で寝起きして復旧作業。取引会社の支援あり。

●「学童に文具を贈ろう」：取引会社の支援あり。児童書担当者が避難所に読み聞かせる出張。

●文化活動・芸術家支援「アート・エイド・神戸」立ち上げ：芸術家の皆さんが海文堂に駆けつけ、何かできることがないか相談。文化活動による復興支援、芸術家支援。チャリティー美術展、音楽会、壁画キャンペーン、震災詩集発行、若い芸術家に少額だが現金支援。

●96年、「アート・エイド」活動により、企業メセナ協議会・メセナ奨励賞受賞：小さな本屋が、ほとんど金を使わずに、これまでの人間関係＝ネットワークを中心に人が集まったことに大きな意味がある。

■震災後100年の幕を閉じる

●震災後の本屋：再開できた・できなかったで明暗。しかし、再開した本屋も震災後の不況で経営上の問題点が次第に露呈。有名店や地元有力書店の廃業、倒産、移転が相次ぐ。2000年、海文堂も島田・小林退任。

●海文堂閉店：何よりも売り上げ減少がすべて。8月5日発表、9月30日閉店という性急さに納得いかなかった。スタッフはプロとして仕事を完結したと自負している。創業99年の老舗にはそれなりの「往生」が必要だったと今も思っている。しかし、お客さんたちは2ヵ月弱の期間にお別れに来てくださった。感謝。

●閉店後の残党（落ち武者）の活動：閉店作業終了後、顧客の方々がさよならパーティーを開催。そこで島田元社長から100年イベントを提案した。



2013.2：『ほんまに』第15号で海文堂閉店特集を出版。

2014.5~6：「海文堂生誕100年まつり 99+1」

2014.9：『ほんまに』第16号《続・神戸の古本力》。

2015.7：平野著『海の本屋のはなし 海文堂書店の記憶と記録』を苦楽堂より出版。出版記念関連イベントを多数開催。

2016.1：『ほんまに』第17号《神戸の作家としての陳舜臣》を出版。

2016.9『ほんまに』第18号《神戸空襲と小説》を出版。

2. 陳舜臣

■馬券売り場反対運動が陳さんとのご縁

島田社長時代に阪神電鉄元町駅馬券売り場反対運動で協力いただいた。「元町の文化と伝統を守る会」代表就任。ブックフェア、サイン会など交流があった。

■震災時のメッセージに涙を流した

阪神淡路大震災後の「神戸新聞」95.1.25朝刊。陳は病床にありながら神戸市民に激励のメッセージを送ってくださった。当時私は三宮ボックスで復旧作業をしていた。陳のメッセージ「神戸よ」を読み、涙を流した。



■「ほんまに」で陳さん追悼の特集を出した

陳は2015.1.21逝去。ご高齢で長く闘病中だった。近年新作品の発表はなかったもので、世間では忘れられた存在だったかもしれない。事実、本屋の棚に作品が少ない。私は新聞・雑誌の追悼記事や特集の少なさに不満を持つ。特集は「大手がやらないならミニコミがやる！」の心意気。『ほんまに』がミニコミという身分も顧みず、陳追悼特集を出版したのは、神戸の大家作家への敬意と共に、あのメッセージ「神戸よ」へのお礼である。



『ほんまに』17号陳舜臣追悼号(中)

■ミステリー『六甲山心中』の六甲山の描写

『六甲山心中』は、心中しようと六甲山を徘徊する若いカップルが、殺人事件に巻き込まれるストーリー。
《いま私は書斎の南の窓から、神戸のまちを見下ろしている。夏の夕陽を浴びて、一直線の防波堤が港に白く伸び、そのむこうを紀伊の山なみが縁どっている。／ふりかえって、東の窓をみると、そこから六甲山の緑がのぞきこんでいるようだ。木々の息吹は、私の膚にまで伝わってくる。／こんなふうには、神戸の海や山はやけに身近かに迫り、私はふだんはそれに包まれ、そしてときにはそこから脱出しようとする。

小説をかくとき、私はいつも自分を脱走者のようにおもう。(後略)／陳舜臣『六甲山心中』あとがき

3. 野坂昭如と六甲界限

■闇市焼け跡派を自称

野坂は『火垂るの墓』『一九四五・夏・神戸』などで神戸空襲体験を作品にしている。少年時代、実母の親戚に養子入り。養父も祖母の養子。複雑な家庭環境で親子互いに遠慮があっただろうが、不自由なく育つ。灘区中郷町、成徳小学校卒業、神戸市立第一中学校(市立葺合高校の前身)中退。

野坂は多彩な活動で目立つ存在だったが、「闇市焼け跡派」を自称したように、空襲で養父母を亡くし、妹(養女)を栄養失調で死なせてしまった。その虚しさ・後ろめたさを引きずってきた作家。デビュー作品『エロ事師たち』はアウトロー小説だが、性と死がテーマ、神戸空襲のことや死んだ妹の実名を出している。

■野坂の六甲界限の描写

『火垂るの墓』にくわしい六甲界限描写はないが、『一

九四五年・夏・神戸』にある。

《神戸旧市部、東のかぎりをなす石屋川は、六甲山系鶴甲山の奥に源を發し、東明の浜へ注ぐ。ふだん、笹舟もおぼつかない心細い流れだが、大雨が降れば、土砂をまじえて黄色い濁流の、四メートルの川床をおおいつくし、すさまじくほとぼしり、これは六甲山系の地盤が風化花崗岩で、吸水量のすくないためと、また、山裾そのまま海へなだれこむ、地形のせいでもある。》

4. 陳舜臣・野坂昭如比較神戸考

■陳舜臣と野坂昭如、それぞれの神戸

●陳：1924(大正13)年神戸生まれ。戦前、日本国籍だが台湾人、民族差別を体験。空襲で被災したが、家族無事(叔母が死亡)。生まれ育ち、作家になってからもずっと神戸在住(戦後一時台湾帰郷)。陳は神戸の焼け跡からの復興過程を見ている。開発についても一定の理解がある。ただ、近代化・開発には人間の生活が結びつかなければならぬと考える。

●野坂：1930(昭和5)年東京生まれ、実母の縁者に養子に出され、神戸育ち。強度の近視で軍国少年脱落。空襲で家族死亡。戦後実父(新潟)に引き取られる。野坂の神戸原風景は少年時代過ごした町並みであり、焼け跡。

■大きな歴史と小さな歴史(結び)

陳と野坂は個人的体験や視界で捉えたものを語る。そして、阪神大水害、戦争、空襲を体験して、命について平和について大仰に語るのではなく、体験からメッセージを出している。

私は海文堂の本を書くときに、「港町神戸の発展と海文堂」というような大それた歴史を考えていた。編集者のアドバイスあり。読者が知りたいこと・読みたいことは、海文堂のみんなが日常していたこと、考えていたこと、仕事、棚づくり、お客さんとのエピソードなど日々の小さなことだ、と。最初原稿を手直しし、同僚たちのインタビューをした。知らなかった話がいっぱい出てきた。こうして、海文堂という本屋の小さな歴史の本ができた。小さな歴史が貴重で、大切。



『海の本屋のはなし』

事務局

平野さんは照れくさそうでしたが、海の本屋、震災、陳舜臣、そして野坂昭如と、気になる出来事や人の話題を結びつけて話されました。大切なものを懐かしむ一編の叙事詩を紡いだようでした。六甲山の魅力再発見に新たな興味を盛り込んでいただきました。

◆参考・配布資料など

- ・パワーポイント：「海文堂書店、震災、そして陳舜臣さん」
- ・レジュメ：「海文堂書店、震災、そして陳舜臣+野坂さん」
- ・参考資料：『ほんまに』15号、17号、18号
- ・参考資料：『海の本屋の話』／平野義昌著／苦楽堂
- ・参考資料：『本屋の眼』／平野義昌著／みずのわ出版

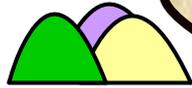
平野 義昌：ひらの よしまさ
ミニコミ誌 執筆
〒650-0017 神戸市中央区楠町1-8-8
電話：078-371-2948

◆参加者の声

- ・整備された山の道を歩き、気分が良かった
- ・元町通に行けば必ず、海文堂によっていた。神戸の歴史である海文堂の話に興味があった。
- ・陳舜臣さんの震災メッセージ「神戸よ」に私も感激した。
- ・海文堂書店は本を売るだけでなく文化発信の拠点であった。

◆参加者：19名(50音順・敬称略)

泉 美代子 伊谷 正弘 伊谷 幸子 岩浅 敬由
今村 千穂 大上 政雄 岡 敏明 岡谷 恒雄
木村 明恵 嶋崎 勝男 須貝 邦子 武内 宏
竹野 智明 堂馬 英二 平野 義昌 村山百合子
柳田千恵子 龍造寺真子 渡辺 洋



第131回テーマ 六甲山開発史 バージョン2

- 昭和初期の六甲山～開発競争
- 戦後の六甲山
- 国立公園化以降の六甲山



昭和31年8月 表六甲ドライブウェイ復旧/毎日新聞ニュース

実施日：平成29年8月19日（土）
午前10時～15時00分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：森地一夫さんプロフィール

1960年生まれ。関西学院大学理学部卒業、神戸大学大学院理学研究科数学専攻理学修士。コンピューター・ソフトウェア会社に勤務。小学校よりボーイスカウトに入り六甲山をハイキングしてきた。現在、日本ボーイスカウト兵庫県連盟・県連盟コミッショナー。ホームページ「祖父の見た六甲山」を開設。

自然体験に21名が参加

快晴で、午前中の自然体験会に21名が参加。まちっ子の森のササ刈りと、散歩道モニターの2班で活動しました。午後のセミナーには28名が出席し、聴講に集中しました。

「祖父の見た六甲山」を軸足にした森地さん

森地さんは絵葉書などの資料収集と併せて、「祖父の見た六甲山」のホームページも有名です。今回は、戦前・戦後の六甲山で祖父の高岡 勇氏の活躍ぶりも紹介されました。

高岡氏は戦前に六甲登山ロープウェイに勤務し、戦後は六甲山ホテルの支配人をしながら、自治会などの活動をされた。昭和24年に唐櫃小学校の六甲山分校の開校に関わり、初代のPTA会長を勤め、昭和30年には7年越しで六甲山之碑を再建された。昭和30年に六甲山経営株式会社で阪急六甲のタクシー会社や住宅経営・販売など、一手に山上の開発を担われるなど、戦後復興期の立役者の一人だと思われます。

外人村から現在まで120年を俯瞰した

パート1は「六甲山の外人村」として、グルームさんの時代から現在までの120年の歴史を俯瞰したいと、話を始められた。



三国池畔のグルーム氏別荘

明治28年にグルームさんが三国池の傍らに別荘を建てたのが始まり。あちこちに別荘を造って居留地の外国人を誘い、どんどん仲間が増えて外人村の様相になった。唐櫃道とアイスロードが交差する前が辻が中心地で、郵便局や下村茶屋があった。明治44年の大阪朝日新聞に大江素天が署名記事を書いている。籠で登って、外人村にあったグルームさんの家に泊めてもらい、六甲山の見聞を紹介した。このころから六甲山上にある外人村が一般の人に知られた。

それ以前の六甲山は里山みたいに使われていたが、下から見ると単なる禿山だった。神戸開港で居留地ができ、外人が入ってきて、神戸港からこれほど近くに1,000m近い山があるのは珍しく、ちゃんと目を付けた。山の上で何かしようという発想は外人さんが思いついた。別荘に住むだけでなくいろんなスポーツが行われた。日本で最初にゴルフ場が発

祥した。スキー・スケートも山の上で行われた。登山・ハイキングも外人さんが道を開拓して、日本人が真似て歩いた。山を歩くという文化ができた。

大正3年～7年、欧州で第一次世界大戦が勃発し外人が国に帰ってしまい、空いた別荘に日本人が住み始める。軍需景気で金持ちになった日本人が別荘を買うようになり、山上のインフラが必要になる。明治43年ごろから六甲山進出を始めていた阪神が山の上に電気を供給するなど、徐々に変化していった。と、開発史の初期を改めて紹介された。

パート2は阪神、阪急の開発競争、パート3は国立公園化と進められた。今回の全体のコンセプトとして、六甲山が国立公園化して5年後の昭和37年5月10日、当時の原口 忠次郎神戸市長が「六甲連山は神戸の庭である。（中略）現状はあまりにも無秩序に開発が進められ、また、神戸の市街地と背後地の有機的な連携をも阻害している」という記述を提示された。紆余曲折の開発史を豊富な資料を駆使して、話題を展開されました。



六甲登山ロープウェイ連絡バス

これからの六甲山はどうなるの？

昨年末に、六甲山ホテルの譲渡がニュースになった。阪急系の六甲山経営の歴史が終焉を迎え、六甲山の現代史の転換になると思われた。今回の森地さんに解説していただいたことを手がかりに、今後の進展を注視したい。

編集子のつぶやき（堂馬）

報告書づくりの裏方を努めています。参加者に感想文をお願いするのを忘れたため、このコラムに登場しました。

講演記録をテープ起しし、提供資料を読み返し、何とか120年の開発史を見渡しました。神戸開港を端緒に、行政の施策や事業者の目論見、さらに2回の大戦や大災害がからんだ、壮大な歴史ドラマを感じました。その節目で祖父の高岡勇氏の活躍も確かめられるなど、森地さんの愛着がうかがえました。



主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

【助成金をいただいている機関】順不同

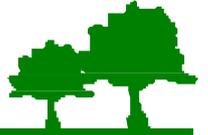
大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、

コープこうべ環境基金、セブンイレブン記念財団、

GGG国立・国定公園支援事業



第131回テーマ：六甲山開発史 バージョン2



第131回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験：10:00~12:10
2. 講演：13:00~14:20
3. 休憩：14:20~14:30
4. 意見交換：14:30~15:00

- 昭和初期の六甲山～
開発競争
- 戦後の六甲山
- 国立公園化以降の六甲山



熱心に話を聞く参加者

講演のあいさつ（森地 一夫さん）

1 2年前は知られていない戦前の六甲山にスポットを当ててお話をしました。今回は戦後の部分にも時間を割いてご説明します。私は六甲山について何の肩書きもなく、郷土史家というとは大げさですが、個人的にやっています。



森地さん

1. 昭和初期の六甲山～開発競争

パート2として、昭和初期の賑わいをもたらした阪神・阪急の開発競争を紹介する。

●昭和初期の賑わい：北尾 鏡之助が『近畿景観』に寄稿した「六甲山雑記」は、昭和4年ごろの六甲山の賑わいぶりを紹介している。「山上には100以上の別荘があり、土日には高級車が砂煙を上げて疾走」、「秋晴れの日曜日には3,000人から5,000人くらいの人が登る」など。ホテルが4軒、飲食店も9軒あり、リゾートの場風になっていた。

■阪神・阪急と開発競争

昭和6年5月26日の神戸又新(ゆうしん)日報に「六甲山めがけて二電鉄の争覇」「バスだ、ホテルだ、食堂だとまるで早慶戦その儘、山の神聖を患ふる葺合署」という記事が載った。当時は、阪神、阪急が阪神間に線路を敷くだけじゃなくて、町づくりも併せてやっていた。華やかな町の発展が起きた時期で、下界での抗争をそのまま山の上に持ち込んだ。

●有野村から土地を購入：南山麓の住吉村など七か村が、北山麓の有野村から85,000円の補償金を得て、入会権を放棄した。大正15年ごろに、有野村は唐櫃小学校を建設するために、土地の売却を考えた。昭和2年に阪神電鉄に75万坪を160万円で売却した。阪神はさらに土地を買増していった。

●出遅れた阪急：有野村から最初に土地の売却を持ち込まれて、阪急電鉄は価格が高いと断った。その後、奥村 千吉氏が持つ丁字ヶ辻一带および付近の土地を購入したが、阪神の4分の1くらいで出遅れた。

●阪神の六甲山経営：広大な土地を押さえた阪神は、昭和7年に所有地の真ん中に幅員6m、延長7mの回遊道路を竣工した。住宅別荘地区、水源地区、森林地区、遊園地区、商業地区の5種類に分けて計画的に開発を進めていった。

●阪神・阪急の誘致合戦：阪神がやったら阪急も同じようなもので対抗した。阪神のケーブルに対して阪急はロープウェイ、阪急が昭和4年に六甲山ホテル、対して昭和9年にオリエンタルホテル。阪神は土地が広いので、昭和8年に高山植物園、昭和12年にカンツリーハウスを開園すると、阪急は記念碑台横にツツジ園を作って対抗した。こうして山の上はリゾート地、遊園地、休養地で発達したが、周囲からの懸念も生じた。

■神戸背山の開発計画、県・市の対立

同じころ、兵庫県や神戸市は神戸の背後にある背山の開発計画を立ち上げていた。兵庫県は山の上を全部風致地区にして何も手が入らないように縛ろうとした。神戸

市は風致地区を一部指定にする方向で、県と市の意見が対立した。神戸市は摩耶から西の方の道路網の整備などに力を入れた。背山というのは鉢伏から宝塚まで全山縦走路のエリアだが、阪急、阪神はここ六甲山上部だけなので、大きな話が進まなかった。

●多様な登山者：当時の雑誌に、「登山者の数は100万人あるいは150万人で足りない。ケーブル、ロープウェイ、タクシーで上がる人など、が様々な登り方をしていた」とある。昭和10年から12年くらいがピークで、阪急、阪神のおかげで賑わった。

■阪神大水害と太平洋戦争で賑わいが止まる

昭和13年7月3日から5日の阪神大水害で、ケーブルは7ヶ月運休。奥村氏が造った表六甲ドライブウェイは完全に破壊されて不通になる。これが一発目のダメージで、ちょっと下火になる。



●大太平洋戦争～終戦：六甲ケーブルは7ヶ月運休

六甲登山ロープウェイが昭和19年、摩耶ケーブルも金属回収のために撤去された。六甲ケーブルの撤去は時間切れで終戦を迎えた。

●ゴルフ場で芋の栽培：昭和20年5月21日の神戸新聞に「山頂に振り下す鋏」「ゴルフ場も忽ち増産基地」が載った。兵隊がゴルフ場を掘ってサツマイモを植えていた。大戦中はかなりひどい状態で、ここがダブルショックで六甲山の賑わいはストップする。

2. 戦後の六甲山

終戦を迎えて、六甲ケーブルは昭和20年に復活、六甲山ホテルも昭和26年に復活する。

■六甲山は泣いている

昭和27年に、小林 一三氏が朝日新聞の六甲山特集に「六甲山は泣いている」と題して投稿した。戦前に阪神、阪急が散々競争していたことを反省し、知事、市長、阪神、京阪神電鉄の四者共同で、六甲山のランドデザインを作ることを提案している。

●両電鉄の思惑：阪神電鉄は25年前から本腰を入れ、六甲山系の土地を1/3握っており、回遊道路も作った。静かな山上都市を建設する方針は変わっていないと主張した。阪急は、20~30坪の山上住宅の建設に乗り出し、大衆の観光地、山上居住地として開発できる。兵庫県、神戸市、阪急、阪神の四者の協力態勢を作る必要があると述べていた。

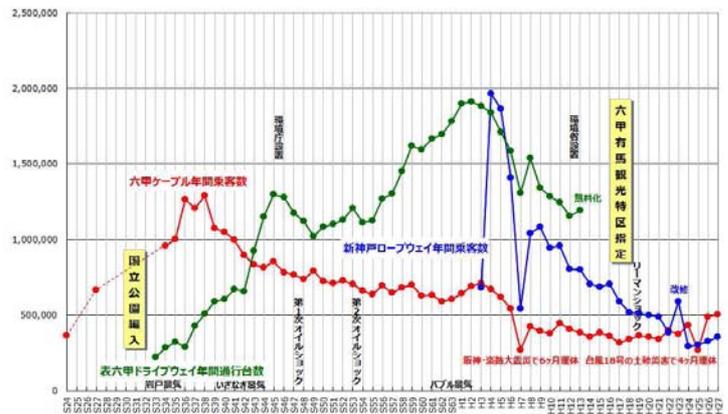
3. 国立公園化以降の六甲山

パート3は国立公園化で、国立公園を巡る話題と現在までの動向を紹介する。

●表六甲ドライブウェイの復興：昭和31年8月10日に有料道路として復旧した。道路整備特別法を使い、不足した資金8,000万円を小林 一三氏から借りた。同氏はロープウェイの復活よりも、これからは一人ひとりが自家用車を持つモータリゼーション時代

が来るので、道路を復活する方がいいと思っていた。

- 国立公園に編入**：昭和31年5月1日、瀬戸内海国立公園に追加して指定された。六甲国立公園期成促進連盟が会長原口神戸市長を中心に7年間運動していた。指定公示後は、公園法によって毎年国庫補助を受けるほか、観光客の誘致に大いに役立つと考えられた。
- 国立公園制度の流れ**：戦前の国立公園法は特別保護区や国定公園の整備だった。戦後、高度経済成長期における、自然公園の保健休養機能の拡充と観光レクリエーション開発の進展という方向に変わり、昭和32年に「自然公園法」になる。どんどん国立公園を開発し、みんなのリゾートにしようという流れで、昭和45年までに全国の国立公園内に68の有料道路ができた。
- 利用気運の盛り上がり**：ケーブルの利用者は昭和36、7年をピークに増えている。表六甲ドライブウェイが開通し、モータリゼーションが効いてどんどん伸びている。六甲山を国立公園というキーワードで利用しようとする気運は盛り上がった。
- 神戸市背山総合開発計画**：四者一体の開発については、昭和37年に原口市長が「無秩序な開発」と懸念の文章を書いて、背山総合開発審議会を設置し開発計画の審議を託した、「神戸市背山開発計画」がある。基本方針の中の観光開発には、「古典的観光の基調をなしている社寺・仏閣のような歴史的由緒・旧蹟はほとんどなく、きわめてバターンくさい、エキゾチックなムードがある」と書いているのは面白い。基本計画図には、極楽茶屋から摩耶山を通して、生田川に下ろすモノレールの計画が書かれていた。
- 自然保護法の改正と規制の強化**：この後、環境保全運動や自然保護政策の導入やらで、環境庁が設置され、自然保護法が改正されどんどん厳しくなっていく。国立公園の箔を付けたのが、自分の首を締めてしまうという状況が昭和45年から起こってしまった。昭和53年に神戸市の都市景観条例が出て、景観を守ろうとするかなり厳しい条例が出てきた。
- 阪神・淡路大震災**
バブル経済の盛り上がりまでが道路のピークで、ケーブルはずっと下がり調子で震災でポコンと減り、半年止まる。ドライブウェイは平成15年で無料化になりデータがないが、ピークは平成の頭くらいで、震災がダメージで、下降線はそのまま残ってしまう。
- 国立公園のメリット**：平成13年の行政担当者へのアンケートで、国立公園指定のメリットは、自然の保護がされるのが圧倒的に高く、利用者増に伴う経済波及効果が次点になっている。デメリットは規制に伴う



六甲山の利用客の推移～震災後は下降線のまま

経済的損失が大きいというのが圧倒的で、認可手続きが煩雑であり、時間的損失が大きいというのが2番目に上がっている。

- 規制の緩和**：六甲有馬特区が先鞭をつけて、平成15年に山の上でイベントをやる許可を簡単にする提案が通った。平成28年7月20日に神戸新聞に「国立公園の建築緩和を」という記事がある。現在の規制をもっと緩和して、都道府県知事又は政令市の市長が特例を定めて許可することを、国家戦略特区に申請している。環境省は提案を受け入れないと回答している。どうなることやら。
- 六甲山利用者の想い**：平成13年のアンケートでは、自然というので六甲山に来ているのが定着していることが分かる。六甲山の担っている役割は、山の自然を活かしたい場所だと思っている人が多い。

■六甲山の未来やいかに

シンボリックな写真を2点だけ、六甲山ホテル旧館とリゾートホテルをしている所の看板を紹介する。この辺が六甲山の風景を変えていくかもしれない。どういう風になるのか見守っていきたい。

まとめ（森地さん）

私は六甲山をどうこうする責任はないが、市民代表の立場でそれなりの話をしたと思っています。六甲山は紆余曲折していますが、みんなで使っていこうというのが変わっていない。最後の機会に話させていただいたことを感謝します。

事務局

六甲山開発史を短時間でお話いただきました。資料収集に大変ご苦勞されて、その一部をご紹介いただき、持ち帰り資料としてもご提供いただきました。森地さんが探究をさらに進展されるのを期待します。

◆参考・配布資料など

- ・PPT：「六甲山開発史バージョン2」
- ・配付資料：「六甲・摩耶にあるもの・あったもの」、明治44年新聞記事など、および文字起し一式。第31回市民セミナー報告書「六甲山開発史」。
- ・参考資料：国立公園化に関わる行政資料、自然公園法に関わる資料など多数。

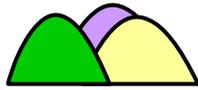
森地 一夫：もりち かずお
ホームページ「祖父の見た六甲山」
<http://www2.osk.3web.ne.jp/~morichi/rk/>

◆参加者の声

- ・六甲山120年史を資料や写真で駆使して説明していただいた。
- ・六甲山は見る山だったが、歴史を知って利用したくなった。
- ・六甲山は昔も今も人の手が入り、魅力や価値が増している。
- ・このセミナーは素晴らしい財産だ。記録として活用したい。

◆参加者：28名（50音順・敬称略）

天野 征一郎	井奥 稔	伊谷 幸子	伊谷 正弘
岩浅 敬由	岡 敏明	川部 忠夫	北垣 正
北嶋 治夫	熊谷 正一	小谷 寛和	澤崎 悦男
雑俣 良	下田 ゆみ子	高井 俊夫	高田誠一郎
高橋 貞美	辻 恵	佐藤 昌弘	堂馬 英二
中尾 啓子	南部 哲夫	藤井 禎	前田 裕子
眞崎 光	森地 一夫	山田 恭治	鷺尾 直枝



3. 六甲山に親しむ

～生活文化と環境学習～

①シム記念摩耶マラソン登山
の歩み P 34～36



前田 康男 まえだ やすお
シム記念摩耶登山マラソン
実行委員長
第122回市民セミナー講演
2015年6月20日

③六甲山系のチョウ P 40～42



谷本 祥二 たにもと しょうじ
須磨離宮チョウの会
代表
第125回市民セミナー講演
2016年4月16日

②六甲山で森林療法 P 37～39



西村 典芳 にしむら のりよし
神戸山手大学 現代社会学部
教授
第123回市民セミナー講演
2015年8月15日

『六甲山物語5』の3段目は「3. 六甲山に親しむ」としました。ここには、六甲山の自然環境や生きものへの親しみ方という視点から3話を集めています。

六甲山の歴史に詳しい前田 康男さんは、摩耶山活性化策の一つとして明治時代の居留外国人シムさんの摩耶登山マラソンを復活する提案をされて、2年間運営に関わっておられます。

神戸山手大学の西村 典芳さんは健康療法の専門家です。標高600メートル以上の六甲山を歩いてリハビリに役立て、健康寿命を延ばす方法を提唱され、六甲山を都市型の健康保養地として生かす活動を先導されています。

須磨離宮チョウの会の谷本 祥二さんはチョウの専門家です。近隣でチョウと食草を観察し、六甲山系のチョウの解説やチョウを呼び寄せるバタフライガーデンづくりも紹介していただきます。

六甲山の自然環境の魅力を改めて見直して、新たな切り口で生かす方策を考える参考にしていただけると思われます。

六甲山魅力再発見市民セミナー



第2回大会スタート

第122回テーマ シム記念摩耶登山マラソンの歩み

- シム記念摩耶登山マラソンの着想
- 特色ある大会へのこだわり
- 「オール灘」の協力で開催が実現

実施日：平成27年6月20日（土）
 午前10時～15時15分
 場所：六甲山自然保護センター、
 記念碑台・散歩道



講師：前田 康男さんプロフィール
 1947（昭22）年、神戸灘区生まれ、年齢67歳。中学高校時代は六甲山を遊び場として育つ。大学及び社会人としての約40年間で集めた六甲山関連の資料をもとに定年後、六甲山の歴史を纏め、六甲山の歴史講演の他、六甲山がらみの各種イベントで活動中。提案者兼実行委員長として主催してきた「摩耶登山マラソン」は今年3回目を迎える。

午前中の散策でシチダンカを鑑賞

午前中は7名で「散歩道」の定期点検をしながら、自然散策しました。「まちっ子の森」でモリアオガエルの卵塊を確認し、六甲山ホテル駐車場では、植栽されたシチダンカを鑑賞しました。午後の講演には26名が出席して賑わいました。



六甲山ホテルのシチダンカ

郷土史情報収集家の本領を発揮

前田 康男さんに初めて市民セミナーの講師をお願いしました。六甲山情報の収集に卓越され、これまで、昭和初期の灘や六甲を紹介するイベントで顧問格としてお世話になってきました。

摩耶山のケーブル・ロープウェイを経営する神戸市の都市整備公社が業績不振で撤退しかけたため、存続を求める住民運動が高まりました。そのような経緯で摩耶山を活性化する活動は盛り上がっています。前田さんは灘区のアイデアコンテストに「シム記念摩耶登山マラソン」を提案して第1位になり、実行委員会の委員長も引き受けています。

「シム記念摩耶登山マラソン」の基礎を固めた

「摩耶山の山おこしのサンプルとして気楽に聞いてください」と、「シム記念摩耶登山マラソン」を着想した背景を説明されました。摩耶山の活性化のアイデア・コンテストに応募する際に、人気のあるイベントを調べて、トレイルランニングを取り上げ、そして神戸や摩耶山の歴史遺産を生かすことを考えたとのことでした。

143年前の明治5年に、旧居留地と旧天上寺の間で日本最初の長距離ロードレースが行われました。居留地外国人のスポーツ同好会「神戸レガッタ&アスレチッククラブ」が実施し、同クラブの創設者であるA. C. シム氏がロードレースで優勝しています。A. C. シムはラムネの製造でも有名で、防災ボランティアの先駆者でもありました。彼をもっと知って欲しいという理由で、「シム記念」と命名しました。

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

摩耶山を舞台にした長距離ロードレースの復活・再現を目指して当時のコースを踏査した結果、青谷道が選定されました。参加賞もシムにこだわって、ラムネやTシャツを製作したり、イノシシ肉入りのカレーも開発しています。灘区役所に実行委員会を設立し、地域の活動団体を巻き込み、行政機関との連携を密にしています。

2013年5月に第1回を終えて、2014年12月に第2回を開催し、「シム記念摩耶登山マラソン」の基礎を固めることができ、2015年12月5日は第3回の開催を予定しています。そして、摩耶山の初冬の風物詩になるのを期待されています。



初冬の風物詩に定着するのを期待します

歴史上の出来事と現在のニーズを組み合わせ、「不易流行」を絵に描いたような試みをされました。摩耶山の活性化に「オール灘」を動員して新風を巻き起こしています。このイベントが文化に育っていくかどうか興味津々です。

※詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 岩田 晶子さん

昨年、「シム記念・摩耶マラソン」に参加しました。とても充実した大会だったので、その舞台裏のお話が聞けるといことでセミナーに参加しました。

神戸の町と山を楽しみ尽した、異国の先人シムさんのように私も「神戸」を「六甲山」をもっと知ってさらに楽しみたいと思いました。色んな「六甲山」の魅力を発見できるいいセミナーだと思いました。



【助成金をいただいている機関】 順不同

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、
 コープこうべ環境基金、自然保護ボランティアファンド、
 セブンイレブン記念財団



第122回テーマ：シム記念摩耶登山マラソンの歩み



第122回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. あいさつ：10:00~10:10
2. 自然体験：10:10~12:00
3. 講演：13:00~14:30
4. 意見交換：14:40~15:15

- シム記念摩耶登山マラソンの着想
- 特色ある大会へのこだわり
- 「オール灘」の協力で開催が実現



第1回スタートの合図

講演の経緯（前田 康男さん）

■山おこしのサンプルとして聞いてください

摩耶ビューラインは年間1億円もの赤字で都市整備公社の撤退が問題になりました。ケーブル・ロープウェイの存続を求めて住民運動が起こり、2011年に存続が決まりました。摩耶山の活性化に努力する活動が盛んで、この試みもその一つです。



ラムネを持つ前田さん

講演内容

1. シム記念摩耶登山マラソンの着想

■摩耶山の活性化、コンテストで1位

2011年に摩耶山の活性化を図るアイデア・コンテストがあり、応募して111提案中の第1位になった。摩耶山に興味を持ってもらうことを考えて提案した。

●トレランの着想：世の中で流行っている人気のあるイベントに注目した。神戸マラソンは参加費1万円でも8万人が応募している。全山縦走は4~5年前から申込に徹夜で並ぶ人気になっている。平地を走るのと山歩きを併せると「山を走る」。トレイルランニングの人氣が高まっている。「トレラン」をやったらいいと着想した。

●摩耶山・神戸独自のもの：摩耶山には歴史遺産が数多い。143年前の1872（明治5）年には、居留地と旧天上寺の間で日本最初の長距離ロードレース（14.5km）が行われた。しかも、1909年に開催された神戸~大阪間の日本最初のマラソンよりも数十年早い。

●A. C. シムが活躍：長距離ロードレースでは、アレキサンダー・キャメロン・シムが1時間23分30秒でぶっちぎりで優勝している。彼はスコットランドの人で、明治3年にKR&AC（居留地外国人スポーツ同好会「神戸レガッタ&アスレチッククラブ」、147年継続）を創設している。神戸のスポーツ界の基礎を築いたKR&ACやA. C. シムを神戸の人にもっと知って欲しいので、「シム記念」と命名した。



A. C. シム

■日本最初のロードレースの再現

明治5年に摩耶山を舞台に日本最初のロードレースが開催された。これを「シム記念摩耶登山マラソン」で復活・再現することにした。

●A. C. シムの偉業：シムは薬剤師の資格も持ち、居留地18番で薬や化粧品を販売した。ミネラルウォーターやラムネの製造販売で有名で、「18番」のラベルはラムネの代名詞になった。居留地の自衛消防隊長を努め、「三陸大津波」や「北美



東遊園地の顕彰碑

濃地震」の際に現地に飛んだ、防災ボランティアの先駆者でもあった。1900年に亡くなり、東遊園地に顕彰碑が建立された。

●コースを検証：明治5年のロードレースほどの道を登ったのか、文献を調べたが見つからなかった。当時の新聞「神戸クロニクル」に、「260段の心臓破り」の記事がある。これは旧天上寺の階段と推定される（実際は330段）。コースは確定できなかったが、「青谷道」を適切と判断してマラソンコースに選択した。



旧天上寺の階段

2. 特色ある大会へのこだわり

■摩耶登山マラソンの提案

コースを決定して、シム記念や、摩耶山独自のものを復活することにこだわって、提案を具体化した。

●第1回は青谷道：交通事情

から居留地スタートは無理と判断し、王子スポーツセンターを出発して掬星台まで駆け上がるコースを提案した。警察の許可を得られず、受け付けは王子公園で、15分歩き、妙光院前をスタートにした。



第1回集合の妙光院前

●シムのラムネを復活：シムが製造したラムネを復活して参加者に提供することにした。当時のラムネのラベルを探したが見つからず、ミネラルウォーターのラベルを参考に制作した。ガラスのラムネ瓶は製造している所がほとんどないので業者に回収してもらって利用した。



参加賞のラムネ

●地元のボランティアをお願い：100人くらいのボランティアが必要だと考えた。相手の了解を得ないで、摩耶山を守ろう会には飲食物のサービス、つくばね登山会にはコース誘導などの担当を提案に入れた。

3. 「オール灘」の協力で開催が実現

■実行委員会を立ち上げ

灘区役所のまちづくり課で「シム記念摩耶登山マラソン」実行委員会を設立し、区役所が事務局になって、関係官庁との折衝など調整の中心役を果たした。

●7団体の人選：実行委員会の人選が成功の大きな要因になった。提案者の前田が初代の実行委員長、副委員長はA. C. シムに因む「神戸レガッタ&アスレチッククラブ」支配人。実行委員は、摩耶山再生の会・事務局長、灘百選の会会長、つくばね登山会会長、摩耶山を守ろう会会長、摩耶山観光文化協会会長で、いずれも地域活動

を支える有力な方々が集まった。実行委員会には関係する行政機関や、アドバイザーにも出席していただいた。

■「オール灘」による協力

「シム記念」と銘打ったので、参加賞のラムネやTシャツ製作、KR&ACへの参加要請、「シムギャラリー」の展示などを行った。これらを「オール灘」で進めた。



●デザイン・チラシ制作：参加賞のTシャツやラムネラベルのデザイン、募集チラシのモデルや制作は、灘区在住のデザイナーや参加者に依頼した。

●摩耶山カレー：摩耶山を守る会は、六甲摩耶の名物としてイノシシ肉入り「摩耶山カレー」を開発した。肉の硬さと臭みは、「沢の鶴」の酒粕と「萩原珈琲」のコーヒーを添加することで解決した。



●企業・団体の協賛：灘区に本社、支店、あるいは店舗を持つ企業、団体にお願ひし、11企業・団体に協賛していただいた。神戸新聞社、読売新聞神戸支局、ラジオ関西、神戸商工会議所の後援もいただいた。

●マスコミ広報：2013年2月以降、新聞各紙、ラジオ、神戸市広報誌、神戸市長定例記者会見等で広報した。

■第1回の実績と第2回の変更

第1回は参加者から良い評価を得て、次回開催の希望も多かった。いくつかの変更点を加えて第2回を開催し、基礎固めがやっとできた。

●第1回の実績：2013年5月11日(土)、小雨の中で第1回が開催された。応募者465名で参加者245名。ボランティア参加者は124名になった。



第1回のゴール地点

●平成25年度・地域活動賞の受賞：神戸や摩耶山の歴史を踏まえた摩耶マラソンの魅力を発信したことが評価されて、9月20日に相楽園会館で、「平成25年度・地域活動賞」を受賞した。

●第2回の変更点と実績：受付とスタート地点を神戸高校同窓会館に移し、コースは上野道に変更した。わくわくコースはチームランに名称変更した。2014年12

月6日(土)、寒い日に第2回が開催され、参加者301名。ボランティア参加者は99名(警察・消防除く)になった。楽しく一体感があつたと好評であつた。



第2回ゴール手前



第2回大会表彰式

出席者から一言

◆黒田(マラソン参加者)：第2回に参加し非常に楽しかった。大会のいわれを知って勉強になった。

◆浅田(まちづくり課係長)：前任者に誘われて第1回と第2回にボランティア参加し、4月から配属になった。提案者の熱意があつてのことで、「いわれ・歴史をマラソンに、マラソンからいわれ・歴史も知る」機会になる。事務局として委員長を支えたい。

◆石原(小学同窓生)：第1回と第2回に参加した。前田さんはすごい熱心で頭が下がる。小学校の作文集をすべてパソコンに入れるなど、何に対しても熱心なことを改めて身近に感じた。

◆小代(第121回講師)：布引のお茶屋さんの活用を進めている。今日の話はトントン拍子で進んでいる。どのように壁を乗り越えられたか聞いてみたい。神戸の近代史を研究しているが、市民のまちづくりの伝統が根づいていると思う。

前田さんのまとめ

「シム記念摩耶登山マラソン」の基礎固めができた段階で、今後は初冬の風物詩になるのを期待しています。

今年は12月5日に去年と同じコースで実施します。8月頃には募集要項やチラシができるので、ご参加の検討をよろしくお願ひします。

事務局から

前田さんが提案して実行委員長を引き受け、着実に見事に「シム記念マラソン」を進められていると感銘しました。地域の歴史・文化に詳しく、六甲山を愛着している前田さんならではの実践で、ライフワークだと思います。周到に組織化し態勢づくりされましたが、一般の市民が支えていけるものに熟成されることを願ひます。

◆参考・配布資料など

- ・レジュメ：「シム記念摩耶登山マラソン」～2年の歩み
- ・パワーポイント：「シム記念摩耶登山マラソン」スライド
- ・「シム記念摩耶登山マラソン」第1・2回チラシ
- ・各種グッズ：Tシャツ、サイダーなど
- ・参考資料：第99回市民セミナー「六甲山とスポーツ」報告書/講師・高木 慶光氏

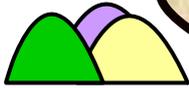
前田 康男：まえだ やすお
 シム記念摩耶登山マラソン実行委員長
 〒657-0028 神戸市灘区森後町3丁目5-15
 携帯：090-1257-9441
 Email: yasumae22831@ezweb.ne.jp

◆参加者の声

- ・素晴らしい内容でした。
- ・アイデアは勿論、細部へのこだわりについての話が面白い。
- ・イベントを催す大変さ、裏方さんの話には興味があります。
- ・「シムマラソン」から、神戸の歴史も学びました。
- ・色々のご苦労があるでしょうが、継続は力ですね。

◆参加者：26名(50音順・敬称略)

浅田 香織 天野 征一郎 石原 真紀子 伊谷 正弘
 岩田 晶子 岡 敏明 岡谷 恒雄 織田 泰史
 兼貞 力 黒田 拓 小代 薫 佐々木 恵一
 柴田 昭彦 杉田 憲治 (奥さん・娘さん)
 田井 陽平 徳重 光彦 徳見 健一 堂馬 英二
 前田 康男 松本 大樹 麦林 敏雄 村上 定広
 森田 稔 柳田 千恵子



まちっ子の森で瞑想

第123回テーマ

六甲山で森林療法

- 世界の健康保養地
- 日本で健康保養地の動き
- 六甲山での活用



講師：西村 典芳さんプロフィール
1962(昭37)年、熊本生まれ、兵庫区在住、53歳。早稲田大学人間科学部健康福祉学科卒業。病気を予防し、心と体の健康のための新しいツーリズム、「ウェルネスツーリズム」を研究、一般社団法人神戸ウェルネスツーリズムの理事などをつとめる。幅広い年代に向けての健康作りのノウハウを伝える活動を行っている。『中小企業と環境ビジネス』など著書多数。

実施日：平成27年8月15日(土)
午前10時～15時15分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道

午前中は散歩道で「健康歩き」を体験した

朝の記念碑台は晴天で26℃。20名が参加し、「森と歴史の散歩道」で、ウェルネスウォーキングを体験しました。まず血圧を測定し、広場でストレッチをして、出発しました。「まちっ子の森」では、木陰で「ソロ」という「横臥療法」で10分間瞑想に浸りました。散歩道を周回し、シュラインロードで会員の村上さんから道沿いの西国三十三箇所巡りの石仏を解説してもらいました。



記念碑台から散歩に出発

センターに戻って、西村さんから「距離は2.5キロ、1時間20分、平均速度は1.9キロ。血圧降下の顕著な結果も出ている」と報告されました。

糖尿病を克服し、「健康」を追究する西村さん

西村さんは、旅行会社の責任者として修学旅行や語学研修など観光ビジネスに携わって来られました。10年前には糖尿病になり、真面目に治療を続けて改善されたとのことです。この経験から糖尿病の要因に関心を深め、栄養学・衛生学を修めておられます。2012年に神戸夙川学院大学(2015年廃校、神戸山手大学に継承)から、ヘルスツーリズムの専門家として招かれ、教員の道を歩まれています。「健康・観光」を研究・体得し、その普及に率先されている実践者です。

「健康保養地」の現況と実践活動に目を開いた

今回のテーマをヘルスツーリズムという視点から解説されました。地方再生と人口問題という時代の潮流、ヘルスツーリズムの社会的背景から現状まで、体験話をふんだんに盛り込まれて約1時間話され、「この辺で飽きてきましたか?」と、VTRの放映に場面転換されました。

テレビ番組「サキドリ」の特集、「ヘルスツーリズムでみんな元気に!」を興味津々で30分鑑賞しました。それまで話題に出てきた、熊野古道ウォーキングや、天草ヘルスツー

リズムの情景を目にした皆さんは、感心しきりでした。特に、天草プリンスホテルの女将さんの早朝ウォーキングが、地域起こしに広がっていく場面に驚きの声もありました。

休憩後、世界のヘルスツーリズムとして、ドイツを主に各国での取り組み事例を紹介されました。代表的なドイツの健康保養地(クアオルト)、気候療法や地形療法、クナイプ療法などを解説されました。



ドイツのクナイプ療法保養地

続いて日本のヘルスツーリズムの現況を紹介し、六甲保養地研究会で手がけている、ウェルネスウォーキングを説明されました。ヘルスツーリズムの全貌と、六甲山周辺での実践活動とのつながりを理解することができました。

健康保養地は六甲山の持ち味の再発見になる

六甲山は都市山として山麓市民が活用できる絶好の環境です。今回は、「ウェルネスウォーキング」を切り口に、六甲山を健康保養地にする提起をされました。六甲山を活かすための大きな発想転換も促されることと期待します。

※詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 脇田さん

長い間神戸に住んでいますが、六甲山をゆっくり歩いたのは今回が初めてです。山の中は自然のままであると思っていたのですが、市民のボランティアの方が手を入れていただいていること、昔の街道脇に多くの仏像があることなど、多くの発見をさせていただきました。神戸の宝である六甲山を、もっと活用していきたいと思いました。みなさん、六甲へ行きましょう。



【助成金をいただいている機関】順不同
大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ環境保護基金)、
コープこうべ環境基金、自然保護ボランティアファンド、
セブン-イレブン記念財団

主催：六甲山を活用する会
協力：兵庫県立人と自然の博物館
後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会



第123回テーマ：六甲山で森林療法



第123回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. あいさつ：10:00~10:10
2. 自然体験：10:10~12:00
3. 講演：13:00~14:30
4. 意見交換：14:40~15:15

- 世界の健康保養地
- 日本での健康保養地の動き
- 六甲山での活用



2013年の公開講座

講演の経緯（西村 典芳さん）

■研究テーマは地域住民の健康づくり

私は今、和歌山県立医科大学博士課程の医学研究科衛生学教室の1年生、ほやほやの医学生です。4年間かけて博士号の学位を取ります。私の研究テーマは、今日お話しする地域住民の健康づくりです。



講演する西村さん

講演内容

■地方創生と人口問題

地方創生と人口問題は非常に切実だ。長野県の黒姫高原、信濃町のみらい創生委員で、月に3回から4回出かけている。1万人の町だった信濃町は、2040年には半分になる。創生会議では減らないようにどうしたらいいか話し合いをしている。

●まち・ひと・しごと創生総合戦略：「東京一極集中からUターンさせて、しごとを作ってそこで働いて、住んで貰って、子供を産んで面倒を見て貰う、そして介護もして貰う」という考え方だ。私は「しごと」の部長で、ウェルネスウォーキングの事業をまず立ち上げた、今度はバイオマス事業も立ち上げる。

■ヘルスツーリズムの社会的背景

国内の旅行消費額は平成24年で22.5兆円、世界のヘルスツーリズム市場は2012年で44兆円、日本は2.4兆円だ。2017年には1.5倍に拡大する。

●ヘルスツーリズムの位置づけ：平成19年の「観光立国推進基本計画」でニューツーリズムの一つに挙げられた。「自然豊かな地域を訪れ、そこにある自然、温泉や身体にやさしい料理を味わい、心身ともに癒され、健康回復・増進・保持するもの」と説明されている。

●健康悪化の要因と疾病：うつ病患者が増加し、がん、脳卒中、心臓病、糖尿病の4大疾病に、「精神疾患」を加えて5大疾病とされる。健康維持・増進に欠かせないものは「運動・休養・栄養」で、運動不足が多い。

●メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）：内臓脂肪に高血糖、高血圧、脂質異常の2つ以上を併せもった状態。予備軍が約1,070万人いる。

●ロコモティブシンドローム：寝たきりや要介護になる危険性がある状態で「ロコモ」と呼ばれる。「運動器」の衰えが原因。健やかに老いるには、「自分で歩ける、自分で食べれる、ボケない」ことが大切。心身ともに自立し、健康的に生活できる期間が「健康寿命」で、平均寿命との間は寝たきりなどの「不健康な期間」。

●超高齢化社会と介護：世界の人口は現在67億人、40年後には90億人になる。北欧諸国では高齢者の自立支援を柱とした医療福祉政策を推進してきた。日本は世界の国々の5倍の速度で高齢化した超高齢化社会だ。日

本の介護は「至れり尽くせり」で老人化を促進する。介護の本質は要介護者を出さない「予防介護」にある。

■国が進めるヘルスケア産業

医療費は去年39兆3千万円、国債額とほぼ同じレベルで、毎年4、5%ずつ伸びている。これを何とかするため、ヘルスケア産業が進められている。

●ヘルスツーリズム認証：この辺では鳥取県智頭町、滋賀県の高島町に林野庁が認めた森林セラピー基地がある。どんなことをやってくれるのかを調査員が認証する、そのために人材を作る。

●宿泊型特定保健指導：厚生労働省で始まった。最初は糖尿病で、教育入院するのではなく、ホテルに泊まって同じような結果を出せるプログラムを民間でやって貰う。健康運動指導士さん、管理栄養士さんが一緒になって、プログラムを開発する動きがある。

1. 世界の健康保養地

■世界のヘルスツーリズム事例

ドイツは374箇所の健康保養地を持っている。ドイツから医学は学んだが、即効性のない医学は見捨てられ、積み残してきたのが保養制度だ。今は、自然療法、運動療法、生活習慣病とか、いろいろな疾患の改善なり予防をする世の中が変わってきた。100年ぐらい遅れている。



ドイツの健康保養地

●オーストリアの「ベストヘルスオーストリア」：認証制度が古くからある。ヨーロッパの真ん中ぐらいにある土地柄で、周囲の国から温泉に入りに来やすくなる。

●ウエルネスツーリズム：ちょっと旅行に行つて温泉に入ってスパ（マッサージを受けたり、スパのプログラムをやりながらゆっくり過ごす）。ハンガリーやスイス、アメリカなどでプログラムが行われている。

●タイは国家制度：タイ式マッサージは国家資格で、店のレイアウトから設備、やれる人の認定まで全部厳格に決めている。タイのスパは非常に世界的なレベルだ。

●韓国の取り組み：2018年の平昌オリンピック開催地の町づくりのため、日本に学びに来ている。国家あげでの取り組みで、済州島のホテル建設、森林セラピーのコース整備もしているが、ソフトは追いついていない。

●ドイツの健康保養地（クアオルト）

●クアオルト（健康保養地）：「自然を使って、中長期滞在してもらって、プログラムを体験してもらおう。そして夜は地域の伝統に触れてもらおう。そういう風なことをトータルにやるところ」で、3週間ぐらいのパックになっている。4年に一度3週間保養をやりなさいと社会保険からお金が出る。クアオルトの中には、温泉、泥パック、

海、気候療法、クナイプ、の種類がある。利用者が1900万人、雇用もすごい。

●**気候療法**：とにかく生気象、気圧とか気候、涼しいとか冷たいとかをすごく大事にする。一番良いのは転地効果で、その場所に行ったら気分が変わる。神戸市内からここに上がってくるだけで5℃以上気温が違う。

●**地形療法**：3%から5%の緩やかな坂道を登っていくと、運動負荷が適度に55%か60%になる。そういうものを利用したのを地形療法と呼んでいる。実際に健康保養地で行われているプログラムは1回20～40分歩く。最初は160～180歳（心拍数）で、馴れると180～190歳で、上200から下115で禁止する。

●**クナイプ療法**：公園の至る所に水場がある。膝から下に水の冷刺激を与え、暖めるのを繰り返すと、血液の流れが良くなる。腕を水につけると降圧効果がある。

水療法、運動療法、食療法、植物療法、秩序療法。世界の中で一番古い自然療法だと言われているのがクナイプ療法だ。秩序療法というのは今日やった。樹で独りでぼーっとしていたのが秩序療法、メディテーションだ。

2. 日本での健康保養地の動き

■日本のヘルスツーリズム

●**信州・信濃町の「癒しの森」**：企業29社で、3泊4日とか2泊3日とか、新入社員研修をやっている。森林でウォーキングをやって過ごすプログラムだが、新入社員が1人も辞めていないという結果も生まれている。

●**信州ウォーキングツーリズム研究所**：まち起こし、地域起こし、地方再生の目玉としてやっている。町を縦断する企画として、ウォーキングで練り歩こうというのを私が言い出してやり始めた。

●**かみのやま温泉クアオルト**：蔵王の中腹、1000mにあるウォーキングコースはミュンヘン大学の認定コースだ。毎日ウォーキング6年目で、12,000人になっている。毎日歩いても同じ所を歩かない。

●**熊野古道健康ウォーキング**：熊野古道の地形や自然を生かしている。ドイツの気候療法を活用している。

●**天草ヘルスツーリズム**：

早朝ウォーキングが42コースある。温泉もない小さなホテルで閑古鳥がなかった。今年年間7,000人も客が来るようになった。



天草プリンスホテル

◆参考・配布資料など

- ・パワーポイント：「六甲山での森林療法」～健康長寿を目指して「お散歩でこの国を元気にする」～
- ・「健康を観光資源に」／神戸新聞2015.8.9記事
- ・参加者募集チラシ：「KOB E森林植物園 ウェルネスウォーキング」
- ・用具：血圧計、ウォーキングポール

西村 典芳：にしむら のりよし
神戸山手大学現代社会学部観光文化学科 教授
〒650-0006 神戸市中央区諏訪山町3-1
電話：078-940-1151 FAX：078-940-1165
Email：n-nishimura@kobe-yamate.ac.jp

3. 六甲山での活用

■ウェルネスウォーキングの推進

●**森林植物園でのモニター実験**：2014年に六甲保養地研究会で、森林植物園でウェルネスウォーキングをやるという取り組みをした。

●**六甲健康保養地研究会**：奥田会長が来ている。前の神戸夙川学院大学の公開講座で同じテーマで講演をしたのがきっかけで研究会ができ、ウェルネスウォーキングをやるきっかけになった。



水療法

●**森林植物園ウェルネスウォーキング**：植物の観察ではなくて、健康のために歩くという価値付けをし直す。3月に健康ウォーキングマップを納入するのが目標。

●**ウェルネスウォーキングの概念**：人生を責任で自分で持って、楽しく充実したもの、点検をしながら変革し続ける。「気候性地形療法」を活用し、地域の人たちと仲良く元気になって、まちを生活していこうというのを、定義にしていきたい。「健康志向・楽しさ」の軸と「スポーツ・ツーリズム」の軸で、全部を含んだものと考えている。

●**ポートピアホテル「朝の森林浴散歩」**：うちのゼミで毎月第一水曜日にやっている。

●**多可町健康保養地推進計画**：兵庫県多可町で「健康保養地推進計画」を今年の春から始めた。エーデルささゆりを拠点にして、「なか・やちよの森公園」を歩く。

●**六甲山の保養所の活用**：六甲山の保養所をもう少し活用できたらいい。眠っているところを若い人に借りて貰って、私たちの活動とか考え方に共鳴して貰って、サービスも一緒に提供できると面白い。

西村さんのまとめ

ウェルネスウォーキングは「活動」ではなく、「事業」としてやることを覚悟しています。そこで雇用が生まれるくらいにやっていくことを考えて活動しています。

(※スライドの締めくくりは、急がば回れ、地域が主体となる「地域主権」と謳われていた)

事務局から

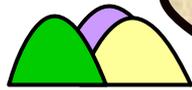
朝はウェルネスウォーキングを楽しむ指導、午後はヘルスツーリズムや健康保養地の動向を解説していただきました。六甲山を健康保養地にするには、「健康増進のもてなし」を豊かにする必要を痛感しました。

◆参加者の声

- ・我々だけではもったいない内容、学んだことを発信したい。
- ・ヘルスツーリズムの新しい知識を学べた。やり方を見直す。
- ・地域を元気にできる実践的な取り組みが素晴らしい。
- ・血圧測定、ストレッチ、ウォーキング、森でのソロにびっくり、講師の方と一緒にウォーキングは最高でした。
- ・森の中を歩き心身ともにリラックス、血圧が5%減った！

◆参加者：23名(50音順・敬称略)

泉 美代子	伊谷 正弘	大上 政雄	大森 敦史
岡 敏明	岡谷 恒雄	奥田 信也	兼貞 力
木下 健二	倉持 隆	徳見 健一	堂馬 英二
長野 繁	西村 典芳	藤井宏一郎	藤川 真司
松本 俊夫	松本よしゑ	村上 定広	柳田千恵子
山田 国久	妙見 昌彦	脇田 和子	



日本一長い蝶採り網

第125回テーマ 六甲山系のチョウ

- 六甲山系のチョウと食草
- 離宮公園のバタフライガーデンづくり
- 「あっと」驚くチョウの生態

実施日：平成28年4月16日（土）
午前10時～15時10分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：谷本 祥二さんプロフィール
1955年（昭30）生まれ、60歳。高松市出身、垂水区在住。1978年神戸大学経済学部卒業、証券会社勤務を経て、1987年から学習塾経営。小学校3年生のときから蝶のとりこになり、少しのブランクを経て現在に至る。須磨離宮公園でバタフライガーデンづくりや観察会。小学3年生の環境学習も手伝っている。

「森と歴史の散歩道」でチョウの食草を探す

午前の記念碑台は快晴で20℃、谷本さんと参加者12人が「森と歴史の散歩道」を歩いてチョウの食草を探した。記念碑台から「まちっ子の森」を経由して、六甲山ホテル東端から記念碑台に戻った。道すがら、テングチョウ、クロヒカゲ、コツバメ、アカシジミ、ジャコウアゲハなどチョウが見られる時期と食草を解説してもらった。



まちっ子の森で解説

谷本さんの原点はオオムラサキとの出会い

兵庫県立人と自然の博物館の八木 剛先生から、「六甲山系のチョウの変遷」に展示協力される谷本さんを紹介していただいた。谷本さんとセミナーの準備でたびたびお会いして、かなりのチョウの研究者であることを知った。

郷里の高松で小学校3年生の時、チョウの専門家の導きでオオムラサキと出会って、チョウの世界に入ったとのことだ。日常生活では、奥様もチョウの採集家で、チョウに関係する予定を決めてから、年間の予定や計画を考えるとのことだ、チョウ中心の生活の様子だ。



日本の国蝶オオムラサキ

今回のセミナーでは、成人向けのセミナーにすることと、当会が整備している「森と歴史の散歩道」の食草を調べてもらうことをお願いした。

「チョウを知ってもらいたい」という熱意が伝わる

午後の講演では、前段として、午前中の自然散策で観察したチョウの食草と、チョウの見られる時期を説明し、「チョウにとっては気に入らないコースだろう」と残念そうだった。

続いて、「六甲山系のチョウ」について約82種類がいることやアサギマダラが多いことなどを紹介された。次に「離宮公園のバタフライガーデン」について、スライドを使いながら説明された。去年の5月から須磨離宮公園の東端でバタフライガーデンづくりをされ、丸1年で45種類のチョウを呼べる状態になっている。バタフライガーデンで見られるチョウ

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

ウの紹介や、家庭でのバタフライガーデンづくりへと話題が進んだ。

休憩時間にセンターで開催している「六甲山系のチョウの変遷」を見学し、主催者の平尾さんから標本の説明も聞くことができた。

後半は、「あっと」驚くチョウの生態と題して、あまり知られていない変わった生態を次々と紹介された、鳥を惑わす擬態や、気温や地域での変異などに目を見張った。

最後は、カラスアゲハの吸蜜を実演していただいた。ストローを伸ばして蜜を吸っている様子を目にして、参加者は興味が高まりざわついた。チョウづくしの1日で、皆さんが童心に戻ったようだった。



展示会の標本を見学

まちっ子の森はチョウの食草が少ない

チョウの目から「森と歴史の散歩道」を見てもらった。予想以上に食草が貧相であることを確認した。放置山林化した六甲山上の生態系の問題が明らかになったようで、植生の多様化などの課題を実感する。そんな中でも、時期を選ぶといういろいろなチョウが見られることに勇気づけられた。

※詳しくは次ページをお読みください。

参加の感想 向山さん

標本を見ながらお話を聴くことで、とてもわかりやすく自然保護の大切さを感じました。西区神出町にある雌岡山では、生息していたギフチョウが、40年前に絶滅したと聞きました。環境の変化、人為的等が考えられます。



「六甲山を活用する会」の活動は、生き物たちと共存できる環境づくりの一役を担っている事業だと感じました。初参加でしたが、メンバーの方たちを身近に感じ嬉しくなりました。ありがとうございました。

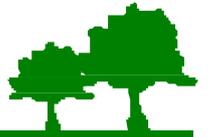
【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、

コープこうべ環境基金、セブン-イレブン記念財団



第125回テーマ：六甲山系のチョウ



第125回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. 自然体験：10:00~12:10
2. 講演：13:00~14:10
3. 休憩：14:10~14:40
4. 意見交換：14:40~15:10

- 六甲山系のチョウと食草
- 離宮公園のバタフライガーデンづくり
- 「あっと」驚くチョウの生態



平尾さんが展示標本を解説

講演の経緯（谷本 祥二さん）

◆チョウの目から見た「散歩道」／午前

午前中、「散歩道とまちっ子の森」を歩いてみて、たいへん整備が行き届いていることにおどろいた。今回は「散歩道とまちっ子の森」が「チョウにとってどうか」という観点で歩いてほしいとのことだったので、チョウになった気持ちで歩いてみたが、正直、今回は5.0点といったところだろう。

チョウの食草（食樹）として確認できたのは、アセビ（多い）、コナラ（そこそこ）、スミレ類、イボタ、アラカシ（少し）という程度だった。周囲の環境や過去の観察などもふまえて、このあたりで見



食草を探す谷本さん

られるであろう主なチョウと時期をまとめてみた。

- () 内は、チョウの幼虫の（食草・食樹）
- 5月初旬～5月中旬 コツバメ（アセビ）
 - 6月初旬～6月中旬 アカシジミ（コナラ）
 - 6月中旬～6月下旬 ウラゴマダラシジミ（イボタ）
 - 5月中旬～9月下旬 ツマグロヒヨウモン（スミレ類）
 - 5月下旬～9月下旬 ジャコウアゲハ（ウマノズクサ）
 - 6月初旬～10月下旬 テングチョウ（エノキ）
 - 6月中旬～6月下旬 ヒオドシチョウ（エノキ）

これ以外に、8月下旬～9月下旬にかけて、ヒヨドリバナ、ブuddleアの蜜を吸いに、「旅をするチョウ」アサギマダラがたくさん集まる。また、アゲハチョウの仲間も5月下旬～9月下旬にかけて見られるだろう。

講演内容／午後

1. 六甲山系のチョウと食草

■六甲山系のチョウは約82種類

日本のチョウは約250種が土着している。その3分の1、約82種が神戸、六甲山系にいる。ガは約6,000いる。チョウはガの進化型だが、ヨーロッパから来た分類で、チョウ（バタフライ）とガ（モス）のはっきりした区別はない。ただ、夜活動するチョウはいないことは確かだ。

■「旅をするチョウ」アサギマダラが多い

六甲山にはアサギマダラが多い。10月24日に和歌山を出て1週間神戸に着いた、マーキングがある。東北地方からベトナムまで最長2,500kmを飛ぶ。気温20℃を好み、気温に合わせて移動する。旅をしないで居る個体もある。六甲山は移動の中継地で、8月から9月、ヒヨドリバナ、ブuddleア、フジバカマに集まる。



4/24のマーキングがあるアサギマダラ

2. 離宮公園のバタフライガーデン

■去年5月からガーデンづくり

ヨーロッパでは自分の庭でチョウを楽しんでいる。須磨離宮公園の東の端で、7～8年前から計画して去年5月からボランティアでバタフライガーデンづくりをしている。



900平方メートルの広さがあり、建物跡のため土はガチガチなので、土づくりからやっている。温室の中でチョウを放すのではなく、近隣のチョウを集めようとするものだ。

■丸1年で45種類が集まってきた

●目標はきれいな60種類

離宮公園内で25年間調査して、69種類のチョウを確認した。昨年の秋から今年の春までで45種類が集まってきた。丸1年で45種類のチョウを呼べる態勢になった。ひとつの庭に神戸のチョウの半分が集まった。きれいな60種類のチョウを集めるのが目標だ。

●バタフライガーデンのチョウ

近畿で48年ぶりにツマグロキチョウが大発生した。どこにでもいるのがキチョウ、ミズイロオオナガシジミは尾状突起を持っている。イボタを食べるウラゴマダラシジミは、裏・碁・斑・シジミという意味で、小さいチョウをまとめてシジミチョウという。



ツマグロキチョウ



ウラゴマダラシジミ



アカシジミ

●鳥を騙す尾状突起

緑の中で目立つアカシジミは尾状突起を持っている。これは鳥を騙すためのもので、尾の部分に目玉もついていて、ここを頭だと思わせて鳥に食われた間に逃げる。尾状突起を食われた蝶を目にすることがある。トラフシジミ、ミドリシジミも同様だ。

●オオムラサキの羽化率は2～3頭



ピカチュウ？



エノキの袋かけ



オオムラサキの卵

オオムラサキの幼虫はピカチュウに似た顔をしている。エノキの袋がけで飼育している。300～500の

卵のうち成虫になるのは2～3頭(チョウは1頭2頭と数える)、500分の2。アゲハチョウの場合は100分の2で、親になれる確率はだいたいこの程度だ。

■家庭でミニバタフライガーデンづくり

自分の庭でバタフライガーデンづくりをお勧めしたい。次のような点を留意するとよい。

1. まずどんなチョウがいるのかを調べる。
2. どのチョウを集めるのかを決める。
3. 食草は何を植えるのかを決めてピックアップする。
4. 5階まで上がってくる、ベランダでもできる。
5. 秋には完成させたい。

食草だけでなく吸蜜植物もセットにして植えないといけない。ガーデンでは20種を植えている。

※平尾氏談：食草は56種、庭で26種、食草・樹木で100種。楽なのは手入れの要らない多年草。アオスジアゲハの場合、ヤブガラシを植えると蜜を吸いに来る。食べてもらって喜ぶ。殺虫剤・農薬はいっさい使わない。

3. 「あっと」驚くチョウの生態

■チョウの擬態

コノハチョウ：羽根を閉じて止まると1枚の葉っぱにしか見えない。葉っぱの軸まで擬態する。
ミヤマカラスアゲハの幼虫：目のような物があるが目ではない。鳥を驚かすために目のような模様がある

■季節変異【季節によって変わる】

ベニシジミ：スイバ、ギンギンを食べるチョウ、春型は色があるが、夏型になると色がなくなりベニシジミで無くなっている。



ベニシジミ

タテハモドキ：左上は夏型で、出っ張りがありとがっていない。右上の秋型になると羽根の形がとがってくる。葉っぱの軸も出てくる。左下の夏型の裏は明るい色だが、右下の秋型になると枯れ葉に似てくる。止まると1枚の枯れ葉に擬態する。目玉模様は少し大きくなる。



タテハモドキ

■地域変異【地域によって変わる】

場所によって模様が変わるチョウがいる。

ミヤマカラスアゲハ：左から順に、熊本、神戸、



ミヤマカラスアゲハ

北海道と北へ行くほど青い模様が鮮やかになる。

ナガサキアゲハ：右端の神戸産は白いものがチョロット、左へ鹿児島、インドネシア、南に行くほど白い紋が広がる。



ナガサキアゲハ

■生きた化石テングチョウ

テングチョウ：アメリカで新生代の化石が見つかった。約4,000万年前にチョウがいた証拠になる。天狗の鼻を比較するため、モンキチョウを横に並べた。



左：テングチョウ

■その他

フクロウチョウ：海外のチョウ、目玉の模様で鳥から身を守る。
クロシジミ：天敵であるアリに育てられるチョウが日本に5種、神戸ではクロシジミ1種、絶滅に近い。幼虫をくわえて巣に持ち帰りエサを与えて大きくする。そのかわりアリは、幼虫の背中から出てくる蜜を吸う。



フクロウチョウ

◆カラスアゲハの吸蜜を実演

最後にチョウに蜜を吸わせる実演をする。ハチミツを15倍くらいに薄めて、カラスアゲハに吸わせる。ここにストローがある、くるくる巻いているのが伸びる。ピロードのような黒い毛があるのがオス。周囲を気にしないで10分くらい吸う。1つの花には蜜が少ないので、ちょんちょんと吸って次の花に飛んでいく。



カラスアゲハの吸蜜

まとめ(谷本さん)

六甲山の上までよく集まってくれたと感謝します。午前中の食草探しから午後熱心に参加していただいたので、つい、話す声も大きくなった。大変楽しかった。六甲山の身近なチョウを深く知ってもらいたい。バタフライガーデンなどを通じて昆虫少年の育成に務めたい。

事務局から

形にとらわれず団らんしながらのセミナーになった。会場で開催している展示会で出展者の平尾さんにも解説していただいて、チョウの紹介内容が豊かになった。「まちっ子の森」と「散歩道」はチョウの食草が貧相とのことで、森の整備の重要性を改めて実感した。

◆参考・配布資料など

- ・パワーポイント・配付資料：「六甲山系のチョウ」
- ・パンフ：『神戸・六甲山系の蝶と食草Ⅱ』／「六甲山の自然を守ろう会」提供
- ・「六甲山系のチョウの変遷50年」／神戸県民センター主催
- ・同上・展示解説チラシ
- ・『まちっ子の森・樹木図鑑』／六甲山を活用する会

谷本 祥二：たにもと しょうじ
須磨離宮チョウの会 代表
〒655-0861 神戸市垂水区下畑町鷺ヶ尾
303-9-1-308
電話：080-5369-0166

◆参加者の声

- ・スマイレの花とかチョウの食草を、先生の話とパンフレットを見ながら散策し、とてもわかりやすかった。
- ・チョウの幼虫と植物との関係性がよくわかった。
- ・須磨離宮バタフライガーデンの説明も興味深かった。
- ・平尾さんのチョウのコレクションも素晴らしいでした。
- ・まちっ子の森のアセビ伐採調査、道の整備は本当にきれいできれいにされてびっくり。子どもたちも喜ぶと思う。
- ・わきあいあいの交流ができた。また、参加したい。

◆参加者：16名(50音順・敬称略)

泉 美代子 伊谷 正弘 岡本 正美 岡谷 恒雄
奥田 信也 長田 隆秀 加藤 紀久 楠本 里枝
谷本 一美 谷本 祥二 堂馬 英二 中尾 啓子
橋本 敏明 向山 和利 森川 正章 柳田千恵子



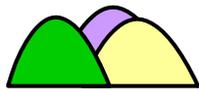
索引

『六甲山物語5』には六甲山にまつわる多種多様な事実や話題が登場します。人名、地名、機関名、テーマ名、植物名、動物名、資料名など、解説を加えている332の用語を選んで掲載しました。また、巻末には第13回～15回の「六甲山魅力再発見 市民セミナー」の年間プログラムも掲載していますので、併せてご参照ください。

【あ】		エリノア・オストロム	6	県民行動プログラム	18
アーチ	26	表六甲ドライブウェイの復興	31	【こ】	
アート・エイド・神戸	28	フレデリック・ロー・オルムステッ		小泉 信三 こいずみ しんぞう	
アオスジアゲハ	42	ド	11		16
青谷道	35	雄滝(おんたき)茶屋の保存運動	23	コープこうべ	17
アカシジミ	41	【か】		行動規範の共有	7
明るい灯火を掲げる	28	外縁者の便益	6	高山植物園	31
アゲハチョウ	41、42	快適環境形成機能	16	神戸開港150年	15
アサギマダラ	41	海文堂、震災、そして陳舜臣さん+		神戸クロニクル	35
アセビ	41	野坂昭如さん	27	神戸空襲	28
アセビ伐採調査	18	海文堂閉店	28	神戸市背山総合開発計画	32
尼崎の21世紀の森	13	回遊道路	31	神戸市都市整備公社	34
天草プリンスホテル	37	笠原 一人 かさはら かずと	24	神戸都市問題研究所	15
天草ヘルスツーリズム	39	上高地(帝国)ホテル	26	神戸の市民まちづくり	22
アラカシ	41	かみのやま温泉クアオルト	39	神戸レガッタ&アスレチッククラブ	
有野村から土地を購入	31	カラスアゲハの吸蜜	42		35
歩く権利	7	唐櫃(からと)小学校	30	神戸山手大学	39
(兵庫県立)淡路景観園芸学校	12	ガレット・エクボ	11	神戸又新(ゆうしん)日報	31
【い】		環境資源管理	6	「神戸よ」(陳舜臣)	28
生きた化石テングチョウ	42	神田 孝平 かんた こうへい	22	交遊花園ノ地(公園)	22
井戸 敏三 いど としぞう	1	【き】		国立公園のメリット	32
井上 真 いのうえ まこと	6	企業メセナ奨励賞	28	小代 薫 こしろ かおる	21
イボタ	41	基金の運営	15	小林 良宣 こばやし よしのぶ	28
『いまここにある明日』	17	掬星台(きくせいだい)	9	【さ】	
入会林野の研究	6	気候療法	39	坂バス	10
入浜権	7	季節変異	42	雑居地	21、22
【う】		北尾 鎌之助 きたお りょうのすけ	31	砂防法	12
ウィーンの森	12	協治の研究	6	三陸大津波	35
ウェルネスウォーキングの定義	39	京都工芸繊維大学	26	山林の放置	6
慈 憲一 うつみ けんいち	8	居留地	21	山林の保全	16
海の本専門店	28	居留地外国人	21、22	【し】	
『海の本屋のはなし』	27	『近畿景観』	31	しあわせの村	15
埋め立て事業	15	キンダースカウト事件	7	静岡大学山岳会関西支部	17
ウラゴマダラシジミ	41	近代化産業遺産	25	自然アクセス制度	7
雲仙観光ホテル	26	近代観光レクレーション	12	自然公園法	32
【え】		近代公園制度	21、22	自然保護法の改正と規制の強化	32
NPO法案	15	【く】		市民のための行政	15
【お】		クアオルト(健康保養地)	38	市民福祉振興協会	15
横臥療法(おうがりょうほう)	37	宮内省のデザイン	26	アレキサンダー・キャメロン・シム	
欧風文化	15	クナイブ療法	39		35
大きな歴史と小さな歴史	29	久保 貞 くぼ さだ	11	A. C. シムの偉業	35
太田 猛彦 おおた たけひこ	16	熊野古道健康ウォーキング	39	シム記念摩耶登山マラソン	34
オオムラサキ	40	アーサー・ヘスケス・グルーム	12	シム記念摩耶登山マラソンの歩み	
オオムラサキの幼虫	41	クロシジミ	42		34
オール灘	36	軍艦ホテル	9	シム記念摩耶登山マラソン実行委員会	36
奥村 千吉 おくむら せんきち	31	【け】		シムのラムネを復活	35
		健康悪化の要因と疾病	38	地元のボランティア	35

宿泊型特定保健指導	38	チョウの食草	41	服部 保 はっとり たもつ	12
消費者問題神戸会議	15	チョウの擬態	42	花園社中	21,22
昭和初期の賑わい	31	陳舜臣 ちん しゅんしん	16,27,28,29	パブリック・アート	13
昭和13年の水害	9	陳舜臣追悼号	29	原口 忠次郎 はらぐち ちゅうじ	ろう
昭和42年の水害	9	陳舜臣・野坂昭如比較神戸考	29	阪急食堂	25
照葉樹林	12			阪急・阪神ホールディング	24
植林作業	12			阪神(淡路)大震災	9,14,32
所有権の内在的制約	7	【つ】		阪神間モダニズム	26
シルバーカレッジ	15	ツマグロキチョウ	41	阪神倶楽部	25
震災後の文化活動支援	28	【て】		阪神大水害	12,31
震災時のメッセージ「神戸よ」	28	出遅れた阪急	31	阪神の六甲山経営	31
信州ウエルネスツーリズム研究所	39	寺田 寅彦 てらだ とらひこ	15	阪神・阪急の誘致合戦	31
信州・信濃町の「癒しの森」	39	天上寺	8	阪神・阪急と開発競争	31
真・善・美	12			万人権(ばんにんけん)	7
森林の7つの機能	16	【と】			
森林王国の都市経営	16	ドイツの健康保養地(クアオルト)	37,38	【ひ】	
森林植物園ウエルネスウォーキング	39	堂馬 英二 どうま えいじ	17	東遊園地	12,22
森林植物園でのモニター実験	39	都市コモンズ	7	(兵庫県立)人と自然の博物館	11
(六甲山)森林整備戦略	13	『都市政策』	16	兵庫県立大学	7
		土壌災害の防止機能	16	兵庫創成研究会	16
		都市問題策定懇話会	16	表現主義	25
		トレランの着想	35	ヒヨドリバナ	41
【す】				平塚 嘉右衛門 ひらつか かえも	ん
水源涵養機能	16	【な】		平野 義昌 ひらの よしまさ	27
スクラッチマイル	26	ナガサキアゲハ	42	ビリヤード室	26
須磨離宮チョウの会	42	中瀬 勲 なかせ いさお	11		
スマイレ類	41	灘区民まちづくり会議	9	【ふ】	
		『なだだな』	8	風景観の原点	12
【せ】		灘百選の会	35	風景を見れるだけの素養	12
生態系サービス	13			風致地区	31
生物多様性保全機能	16	【に】		フクロウチョウ	42
世界のヘルスツーリズム事例	38	新野 幸次郎 にいの こうじろう	14	再び照葉樹林	12
絶対的排他的権利	7			再び、六甲山の景観計画を考える	11
瀬戸内海国立公園	12,32	西村 典芳 にしむら のりよし	37	ふだん使いの山	8
『一九四五・夏・神戸』	29			ブチ・シンポジウム報告書	17
		日本建築学会近畿支部	24	フットパス	7
【そ】		日本最初の長距離ロードレース	35	ブッドレア	41
雑木林	12	日本最大の森林都市	14	ブルーノ・タウト	12
ソフトの運営協議会	13	日本のヘルスツーリズム	39	古塚 正治 ふるつか まさはる	24,25
祖父の見た六甲山	30	日本庭園	13	古塚 正治のホテル論	26
		日本二大廃墟	9	文化遺産としての六甲山ホテル旧館	24
【た】		日本美の再発見	12	文化機能	16
大都市直下型の地震	15	【ぬ】			
高岡 勇 たかおか いさむ	30	布引雄滝(おんたき)茶屋	21	【へ】	
高尾山	10	布引雄滝茶屋100年の軌跡	23	ベニシジミ	42
多可町健康保養地推進計画	39	布引の滝に感謝する会	23	ヘルスツーリズム	37
宝塚ホテル	25	布引遊園地	22,23	ヘルスツーリズム認証	38
タテハモドキ	42			ヘルスツーリズムの位置づけ	38
谷本 祥二 たにもと しょうじ	40	【の】		ヘルスツーリズムの社会的背景	38
旅をするチョウ、アサギマダラ	41	野坂 昭如 のさか あきゆき	29		
丹波の森公苑	11			【ほ】	
		【は】		ポートピア博覧会	15
【ち】		ギャレット・ハーディングの論文	6	保健レクリエーションの機能	16
地域活動賞	36	ハーフチンバー	25	ボストン・コモン	13
地域住民の健康づくり	38	禿げ山化	12	ボストンのグリーンライン	13
地域変異	42	禿げ山の問題	6	『火垂るの墓』	29
(神戸)地域ビジョン委員会	18	馬券売り場建設反対運動	27,28	ボランティアの活動	15
地球環境保全機能	16	八馬汽船	26		
地形療法	39				
地方創生と人口問題	38				
超高齢化社会と介護	38				

本多 静六 ほんだ せいりく		ロコモティブシンドローム	38
	12, 16	六甲アイランド基金	15
『ほんまに』	27	六甲アイランドの建設	15
『本屋の眼』	29	六甲ケーブル	31
【ま】		六甲国立公園期成促進連盟	32
前が辻	30	六甲山開発史バージョン2	30
前田 康男 まえだ やすお	34	六甲山グリーンベルト整備事業	13
まちっ子の森	18	六甲山経営株式会社	30
まちづくり協議会	9	六甲山系のチョウ	40
摩耶ケーブル	9, 31	六甲山系のチョウと食草	41
マヤカツ	10	六甲山自然保護センター	49
マヤ暦	10	『六甲山心中』	29
摩耶観光ホテル（軍艦ホテル）	9	『六甲山辞典・総集編』	19
摩耶山	8	六甲山で森林療法	37
摩耶山カレー	36	六甲山に目を向ける	19
摩耶山再生会議	9	六甲山の外人村	30
摩耶山再生の会	9	六甲山の森林整備戦略	16
摩耶山再生の会の活動	8	六甲山のストーリー	16
摩耶山の活性化	35	六甲山の茶屋	21
まやビューライン	9, 35	六甲山の茶屋群をみんなの文化財に	21
回る十国展望台	9	六甲山の利活用を考える	5
万平ホテル	26	六甲山は泣いている	31
【み】		六甲山発郷土誌（マップ）	17, 19
三俣 学 みつまた がく	5	六甲山発郷土誌づくりの歩み	17
味泥復興委員会	9	六甲山ホテル開設	25
ミニバタフライガーデン	42	六甲山ホテル旧館	24, 25
ミヤマカラスアゲハ	42	六甲山ホテルの譲渡	30
【む】		六甲山房	28
村野 藤吾 むらの とうご	26	六甲山魅力再発見市民セミナー	18
		『六甲山物語』	18, 27
		六甲山利用者の想い	32
【め】			
メタボリックシンドローム	38		
【も】			
モータリゼーション時代	31		
森地 一夫 もりち かずお	30		
森と歴史の散歩道	18, 40		
monte702（モンテ702）	10		
【や】			
野外活動の哲学	7		
ヤブガラシ	42		
山を歩くという文化	30		
山小屋風ホテル	24, 25		
闇市焼跡派	29		
【ら】			
落葉広葉樹	12		
【り】			
離宮公園のバタフライガーデン	41		
リュックサックマーケット	9		
【れ】			
レガシー・レジェンド・ストーリー	16		
【ろ】			
ローカルルール	6		



市民セミナープログラム

平成27年度 六甲山魅力再発見市民セミナー(2015年4月～10月)

開催	テーマ	講師	ページ
第121回(4月)	六甲山の茶屋群をみんなの文化財に	小代 薫 (建築家)	21
第122回(6月)	シム記念摩耶登山マラソンの歩み	前田 康男 (シム記念摩耶登山マラソン実行委員長)	34
第123回(8月)	六甲山での森林療法	西村 典芳 (神戸山手大学 現代社会学部 教授)	37
第124回(10月)	六甲山の利活用を考える ～資源管理の議論から～	三俣 学 (兵庫県立大学 経済学部 教授)	5

平成28年度 六甲山魅力再発見市民セミナー(2016年4月～10月)

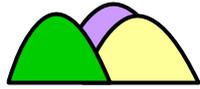
第125回(4月)	六甲山系のチョウ	谷本 祥二 (須磨離宮チョウの会 代表)	40
第126回(6月)	文化遺産としての六甲山ホテル旧館	笠原 一人 (京都工芸繊維大学) 助教	24
第127回(8月)	摩耶山再生の会の活動	慈 憲一 (摩耶山再生の会 事務局長)	8
第128回(10月)	海天堂、震災、そして陳舜臣さん+野坂昭如さん	平野 義昌 (ミニコミ誌 執筆者)	27

平成29年度 六甲山魅力再発見市民セミナー(2017年4月～10月)

第129回(4月)	再び、六甲山の景観計画を考える	中瀬 勲 (兵庫県立人と自然の博物館 館長)	11
第130回(6月)	六甲山上を市民のものに	新野 幸次郎 ((公財)神戸都市問題研究所 理事長)	14
第131回(8月)	六甲山開発史 バージョン2	森地 一夫 (日本ボーイスカウト兵庫連盟 コミッショナー)	30
第132回(10月)	六甲山発郷土誌づくりの歩み	堂馬 英二 (六甲山を活用する会 代表幹事)	17



年度毎の「六甲山魅力再発見ガイド13・14・15」も発刊



編集後記

『六甲山物語5』を発刊することができました。さらに、CD-R版の制作も進めています。既刊の『六甲山物語1・2・3・4』、『六甲山辞典・総集編』CD-R版を併せると、「六甲山発郷土誌」として活用していただける知的産物を保有することになります。これらの産物と運営のノウハウ等を広く紹介したいと考えています。

「六甲山魅力再発見市民セミナー」は平成24年度から、4月・6月8月・10月の年間4回、午前中は県立自然保護センター周辺の散策と組み合わせた新シリーズとして開催しています。延べ15年間で合計132話を重ねて、講師126名、参加者総数3,525名で1回平均26.7名になります。

『六甲山物語5』は、平成27年度第13期～平成29年度第15期の12回の報告書を再編集したものです。『六甲山物語1・2・3・4』の6つのジャンルを基にして、テーマを広げたり深めたりしました。平成27年度は「六甲山の地域特性を生かす活動」を取り上げ、平成28年度は「六甲山の現在・過去の魅力」を焦点にしました。平成29年度は市民セミナーの最終年度を記念して、「広い視点から六甲山を考える」テーマをお願いしました。また、3年を通じて、午前中に「まちっ子の森」や「森と歴史の散歩道」を自然体験したのも特徴です。

132回の「六甲山魅力再発見市民セミナー」を終えて、『六甲山物語5』まで刊行できたのは、着手したときには想像もできなかった喜びです。講師の皆さん、参加者の皆さん、多くの協力者・運営スタッフの皆さんのご理解とご支援に、改めてお礼を申し上げます。

そして、このような産物や成果を多くの人たちに伝えることに注力する所存です。

平成30年1月

『六甲山物語5』編集委員会

ご支援いただいた機関・団体の皆さま

「六甲山魅力再発見市民セミナー」の開催と報告書の発刊、および関連行事等に関して、多くの皆さまからご支援をいただきました。改めてお礼を申し上げます。

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：環境省近畿地方環境事務所、兵庫県神戸県民センター、神戸市教育委員会、灘区役所、

助成：(財)大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、コープこうべ環境保護基金、セブン-イレブン記念財団、自然保護ボランティアファンド、GGG国立・国定公園支援事業、灘区役所、ひょうご県政 150 周年記念県民連携事業

委託：兵庫県神戸県民センター (順不同)

市民セミナーの会場として県立六甲山自然保護センターを利用させていただき、神戸県民センターのお世話になりました。

このたびの『六甲山物語5』の発行は、(財)大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）の助成金に加えて、ひょうご県政 150 周年記念県民連携事業の助成をいただくことで実現しました。また、株式会社ワークスタイル研究所には編集・制作でご協力いただきました。

「六甲山物語5」

六甲山をさらに知る 続12話

平成27～29年度「六甲山魅力再発見市民セミナー」総集編

発行日：2018年1月31日

編集制作：六甲山を活用する会

制作協力：株式会社ワークスタイル研究所

印刷製本：株式会社プリントネット

